

国指定史跡

# 作山古墳測量調査報告書

2016年3月

岡山県総社市教育委員会

国指定史跡

# 作山古墳測量調査報告書



2016年3月

岡山県総社市教育委員会

	誤	正
例言	4. 測量調査は…永岡和美の協力を得た	4. 測量調査は…永岡和美の協力を得た。
5 頁 下から 5 行目	そして、5 世紀はいると、…	そして、5 世紀にはいると、…
8 頁	(28) 沢田秀実編 2014…	(28) 澤田秀実編 2014…
9 頁 下から 6 行目	…くびれ部南側の陪塚として…	…くびれ部南側の培塚として…
17 頁 第 9 図キャプション	(和田 2007 から引用 一部改訂)	(和田 2007 から引用 一部改変)
22 頁 下から 2 行目	…くびれ部付近の南側に陪塚があると…	…くびれ部付近の南側に培塚があると…
47 頁 下から 6 行目	…調査作業員小野良介・長岡和美の…	…調査作業員小野良介・永岡和美の…
47 頁 下から 5 行目	…復元・拓本は両者で分担した。	…復元・拓本は両者で分担し、整理作業員 笹田陽子の協力を得た。
59 頁 6 行目	…埴輪列が一段目斜面の高い位置に…	…埴輪列が平面的には一段目斜面の高い 位置に…



二段目平坦面の埴輪列（北西から）



作山古墳空撮

巻頭図版2



埴輪列検出状況（北西上方から）



埴輪列の埴輪と掘り方（南から）



埴輪列の埴輪と掘り方（南から）



埴輪列と調査区北壁墳丘切断面（南から）



埴輪列と調査区北壁墳丘切断面（南西から）

# 序

総社市は、広く肥沃な平野と高梁川が運ぶ豊かな水、そして災害の少ない気候風土という農耕に適した条件に恵まれ、水稲耕作開始期以降人々が集住し、吉備の中枢地として栄えてまいりました。

その証左として、市内には国指定史跡作山古墳をはじめ、国指定史跡こうもり塚古墳・鬼城山・備中国分僧寺跡・備中国分尼寺跡など有数の遺跡が存在します。

その中でも、作山古墳は全国第10位の規模を誇り、全国第4位の造山古墳に次いで、立ち入ることのできる古墳としては全国第2位の規模となり、赤磐市の両宮山古墳を含め県下三大巨墳として注目されています。

悠久の時を越え現代に残されたこれらの遺跡は、私たちにとってかけがえのない財産であり、保護・保存して後世に伝えていくとともに活用を図っていくことが肝要と考えます。

作山古墳も、そのための基礎作業として測量調査を実施してまいりましたが、ここにその成果をまとめ報告いたします。今後の作山古墳の保護・保存・普及啓発に活用していくとともに、古墳研究の進展に少しでも寄与することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、平素から本市の文化財行政に、格別の御指導・御協力を賜っております関係諸機関及び関係者の皆様に深謝申し上げますとともに、より一層の御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

総社市教育委員会

教育長 山 中 榮 輔

## 例言

1. 本報告書は、総社市三須200外に所在する作山古墳の測量調査報告書と、2004年度年報で公表した現状変更に伴う立会調査の報告書である。
2. 測量調査は、作山全山の下草刈りが終了した1月から、草木が茂る5月初旬までを中心に行った。
3. 測量調査は、1997年から基準点の杭打ちを開始し、2014年まで行った。調査組織は、当初文化財室として、2000年度からは文化課として対応した。
4. 測量調査は、文化課職員の平井典子（現 埋蔵文化財学習の館）、高橋進一、松尾洋平（現 倉敷地区農業共済事務組合）が担当し、測量作業員の黒江多佳子、角田京子、萱原誠、今川博之、大畑隆弘の協力を得た。  
現状変更に伴う立会調査は、平井、高橋が担当し、発掘調査作業員の小野良介、永岡和美の協力を得た
5. 測量調査ならびに報告書の作成にあたっては、下記の方々から様々な助言や有益な教示を得た。記して感謝の意を表します。  
宇垣匡雅、梅本康広、大久保徹也、草原孝典、(故)葛原克人、久住猛雄、澤田秀実、白石純、  
新納泉、広瀬和雄、北條芳隆、松木武彦、村上幸雄 (五十音順)
6. 本報告書の作成は、総社市教育委員会文化課および総社市埋蔵文化財学習の館において、平井が担当して行った。
7. 本報告書の執筆・編集は、平井が担当した。
8. 作山古墳測量図は今後の整備や保存のために、1/200の図面を作成している。
9. 本報告書に関係する遺物、実測図、写真等は総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）に保管している。

## 凡例

1. 本報告書に用いた高度は海拔であり、X・Y軸の値は世界測地系である。方位もそれにのっとっている。
2. 本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は個々に明記した。
3. 本報告書に掲載した二つの報告については、遺物番号、挿図番号、写真図版番号を、それぞれ連番とした。
4. 第3図・第19図は、国土地理院発行の1/25,000 地形図・「総社東部」・「総社西部」・「倉敷」・「箭田」を縮小・複製し、加筆したものである。
5. 便宜的に段築の平坦な面を「平坦面」とした。古墳周囲の平坦な面は作山段などによって段状を呈していることから、前方部側も含め「テラス」として表記した。
6. 200m以上の古墳を巨大古墳とし、100m以上の古墳を大形古墳として表記した。
7. 埴輪の基底部や、朝顔形埴輪・円筒埴輪の筒部はすべて円筒埴輪として表記した。
8. 径の計測が不可能な遺物については、断面図の右側に外面、左側に内面の拓本を表示している。
9. 遺物の色調は、『新版標準土色帖（1994年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

# 目 次

序  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査の目的と方法	1
1. 調査の目的と方法	1
2. 調査経過	1
第2章 地理的歴史的環境	4
1. 遺跡の位置と地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第3章 既往の調査・研究	9
第4章 調査成果	12
1. 墳丘規模	12
2. 墳丘の形状及びその周辺	15
(1) 前方部	15
(2) 後円部	20
(3) 平坦面上の等高線	22
(4) 外表施設	22
(5) 作山段	22
(6) 培塚について	22
第5章 寄贈遺物及び表面採集遺物	24
第6章 総括	27
1. 墳丘の形状について	27
2. 周濠の有無について	29
3. 時期について	31
4. 作山古墳とその周辺	32

## 附載 作山古墳現状変更に伴う立会調査

第1章 調査の経緯	47
1. 調査に至る経緯と経過	47
2. 調査の体制	47
第2章 調査の概要	48
1. 調査の概要	48
2. 遺構と遺物	49
(1) 墳丘切断面	49
(2) 埴輪列	50
(3) 出土遺物	52
3. 結語	59

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録



## 目 次

### 作山古墳測量調査報告書

第1図 作山古墳国指定史跡範囲と公有地範囲 (S=1/4,000) ……	1
第2図 基準点測量杭位置図 (S=1/1,200) ……	3
第3図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/40,000) ……	6
第4図 作山古墳復元図 (西川・春成) ……	9
第5図 後円部墳端残存位置図 (S=1/1,500) ……	12
第6図 作山古墳墳丘測量図・断面図 (S=1/2,000) ……	13
第7図 作山古墳墳丘測量図 (S=1/1,500) ……	14
第8図 前方部前端断面図 (S=1/1,500・1/500) ……	16
第9図 作山古墳トイレ改修に伴う確認調査 ……	17
第10図 下水路工事調査地位位置図 (S=1/5,000) ……	19
第11図 下水路工事土層柱状図位置図 (S=1/2,000) ……	19
第12図 下水路工事北壁土層柱状図 (S=1/60) ……	19
第13図 下水路工事7層出土遺物 (S=1/4) ……	19
第14図 前方部北側の造出しと張出し部 (S=1/1,000) ……	20
第15図 寄贈遺物及び表面採集遺物 (S=1/4) ……	25
第16図 墳丘復元図 (S=1/1,500) ……	28
第17図 明治10年以前の地目図 ……	30
第18図 作山段を含む北側テラスの遺存状況 (S=1/1,500) ……	30
第19図 主要墳丘墓・古墳分布図 (S=1/40,000) ……	33
第20図 写真撮影位置図 (S=1/1,500) ……	35

### 附載：作山古墳現状変更に伴う立会調査

第1図 調査地位置図 (S=1/5,000) ……	48
第2図 埴輪列出土地点とその周辺 ……	48
第3図 調査区北壁墳丘切断面土層図 (S=1/80) ……	50
第4図 調査区とサブトレンチ位置図 (S=1/300) ……	51
第5図 南北サブトレンチ西壁土層図 (S=1/60) ……	51
第6図 円筒埴輪出土状況平・断面図 (S=1/40) ……	51
第7図 埴輪列出土埴輪1 (S=1/4) ……	53
第8図 埴輪列出土埴輪2 (S=1/4) ……	54
第9図 埴輪列出土埴輪3 (S=1/4) ……	55
第10図 埴輪列出土埴輪4 (S=1/4) ……	56
第11図 調査区内出土遺物 1 (S=1/4) ……	57
第12図 調査区内出土遺物 2 (S=1/4) ……	58
第13図 調査区内出土遺物 3 (S=1/4) ……	59

## 図 版 目 次

### 作山古墳測量調査報告書

#### 前方部とその周辺

第1図版 くびれ部付近二段目斜面の道と崩落状況 ……	36
第2図版 くびれ部付近一段目斜面の道と崩落状況 ……	36
第3図版 造出し ……	36
第4図版 造出しと張出し部 ……	36
第5図版 前方部北側テラス ……	36
第6図版 前方部二段目・三段目 ……	36
第7図版 張出し部 ……	36
第8図版 造出しと張出し部と溜池 ……	36
第9図版 張出し部西側の溜池と土手 ……	37
第10図版 前方部前端付近と水田跡 ……	37
第11図版 前方部前端付近の水田跡 ……	37
第12図版 前方部一段目平坦面の埴輪 ……	37
第13図版 北西角二段目斜面 ……	37
第14図版 北西角三段目斜面 ……	37
第15図版 前方部頂部を望む ……	37
第16図版 北西角一段目斜面と前端 ……	37
第17図版 前方部前端北側と残丘 ……	38

第18図版 前方部前端と堀切 ……	38
第19図版 前方部・残丘・トイレ ……	38
第20図版 前方部前端 白いポール付近から突出部 ……	38
第21図版 突出部 ……	38
第22図版 突出部上の攪乱・岩盤露出状況 ……	38
第23図版 突出部上の攪乱・岩盤露出状況 ……	38
第24図版 突出部の南側一段下がり ……	38
第25図版 突出部の南側一段下がり ……	39
第26図版 前方部南西角の民家裏側掘削状況 ……	39
第27図版 前方部南側三段目斜面 ……	39
第28図版 一段目平坦面上の民家裏側掘削状況 ……	39
第29図版 かつて培塚とされた残丘 ……	39
第30図版 南側造出し想定地付近の民家 ……	39
第31図版 二段目斜面の崩落状況 ……	39
第32図版 二段目平坦面の埴輪列 ……	39

#### 後円部とその周辺

第33図版 西側三段目斜面 ……	40
第34図版 後円部頂部 ……	40

第35図版	くびれ部付近二段目斜面の攪乱	40	第72図版	後円部遠景（北東から）	44
第36図版	くびれ部付近二段目斜面の削平状況	40	第73図版	寄贈・表面採集埴輪	45
第37図版	民家裏側の掘削状況	40	第74図版	寄贈埴輪：武人埴輪肩鏡片	45
第38図版	二段目斜面の削平状況	40			
第39図版	民家裏側の掘削状況	40	<b>附載 作山古墳現状変更に伴う立会調査</b>		
第40図版	一段目平坦面上の溝	40	第1図版	一段目平坦面と敷地（西から）	49
第41図版	一段目斜面の削平状況	41	第2図版	敷地面と南側の段差（西から）	49
第42図版	一段目斜面の削平状況と道	41	第3図版	敷地面と南側の段差（南から）	49
第43図版	一段目斜面の道	41	第4図版	建物除去後の調査区全景（西から）	64
第44図版	民家裏側の削平状況	41	第5図版	墳丘切断面1（南から）	64
第45図版	民家裏側の掘削状況	41	第6図版	墳丘切断面2（南から）	64
第46図版	一段目斜面の遊歩道	41	第7図版	墳丘切断面3（南から）	64
第47図版	二段目斜面の遊歩道	41	第8図版	墳丘切断面4（南西から）	64
第48図版	三段目斜面の遊歩道	41	第9図版	墳丘切断面5（南東から）	64
第49図版	後円部墳端	42	第10図版	埴輪列出土状況（北西上方から）	64
第50図版	後円部墳端	42	第11図版	埴輪列出土状況（西から）	64
第51図版	後円部墳端付近の掘削状況	42	第12図版	埴輪列と南側サブトレンチ（東から）	65
第52図版	作山段と墳丘段築	42	第13図版	埴輪7～10（南から）	65
第53図版	墳端の掘削状況	42	第14図版	墳丘切断面及び後円部（南から）	65
第54図版	墳端の掘削状況	42	第15図版	埴輪列のサブトレンチ掘削状況（南東から）	65
第55図版	後円部墳端	42	第16図版	埴輪2～4（南から）	65
第56図版	作山段の掘削状況	42	第17図版	埴輪5～9（南から）	65
第57図版	墳端と作山段の掘削状況	43	第18図版	埴輪7～10（南西から）	65
第58図版	作山段の掘削状況	43	第19図版	埴輪完掘状況（南から）	65
第59図版	作山段の掘削状況	43	第20図版	埴輪列の埴輪1	66
第60図版	道周辺の崩落状況	43	第21図版	埴輪列の埴輪2	66
第61図版	二段目以下の道と崩落状況	43	第22図版	埴輪列の埴輪3	66
第62図版	一段目の掘削状況	43	第23図版	埴輪列の埴輪4	66
第63図版	墳端の掘削状況	43	第24図版	埴輪列の埴輪5	66
第64図版	墳端の掘削状況	43	第25図版	埴輪列の埴輪7	66
第65図版	作山段上の水田跡と小溜池	44	第26図版	埴輪列の埴輪8	66
第66図版	作山段上の水田跡	44	第27図版	埴輪列の埴輪9	66
第67図版	くびれ部付近の崩落状況	44	第28図版	埴輪列の埴輪10	67
第68図版	周堤状の畑と前方部テラス	44	第29図版	朝顔形埴輪	67
第69図版	周堤状の畑と前方部テラス 一段低い箇所が水田跡	44	第30図版	円筒埴輪口縁部	67
第70図版	作山古墳側面遠景（南東から）	44	第31図版	円筒埴輪	67
第71図版	後円部遠景（東から）	44	第32図版	円筒埴輪	67
			第33図版	形象埴輪と須恵器	67

## 目 次

寄贈遺物及び表面採集遺物観察表	26
<b>附載 作山古墳現状変更に伴う立会調査</b>	
出土遺物観察表	60

# 第1章 調査の目的と方法

## 1. 調査の目的と方法

作山古墳は、全長約282mを測り、全国第10位の規模を有する巨大前方後円墳である。1921（大正10）年3月3日に国指定史跡となり、1967（昭和42）・1973（昭和48）年には、作山古墳の墳丘上にある家屋や墓地を除くすべてを、総社市が公有化した。

公有化後、総社市教育委員会は見学者の便宜を図るため、地元の自治会に依頼して夏に遊歩道、冬に全山の下草刈り清掃を行ってきたが、将来的な墳丘の保存と整備を見据え、基礎資料としての墳丘測量図を作成する必要があることから、現状変更許可申請の許可を得た後、墳丘全体に10mメッシュの杭打ちを実施し、国土座標にのせることとした。

まず、墳丘の中心部分をだまかに割り出して縦軸を定め、後円部の中央に横軸を設定した後、業者に杭打ちと基準点測量を委託した。基準点測量は1997年度から4カ年計画で実施し、1年目は中央の縦軸及び後円部中央の横軸と後円部1/4を、次年度からは残り3/4を後円部側から1/4ずつ行った。

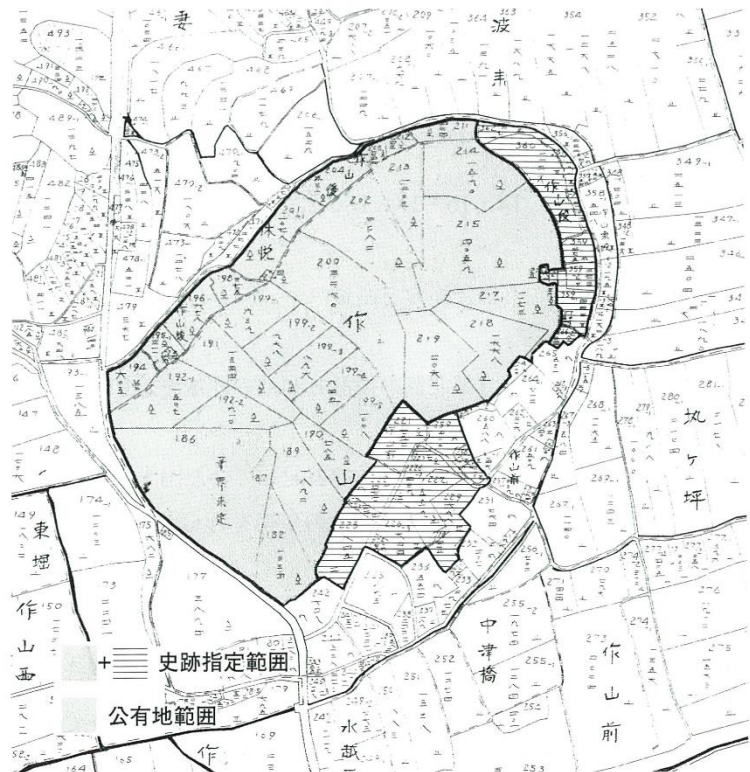
その後は、全山の下草刈りが実施された12月後半から、下草が繁茂する前の5月の初めまでに発掘調査等の合間を縫って測量を行う予定であったが、現実的には緊急発掘に追われ、実施する機会をなかなか得ることができなかった。

測量は平板を用いて行い、1/100の縮尺で25cm間隔の等高線による図面を作成した。計測はエスロン巻尺による手測りで実施した。腐食土の厚い箇所も多かったため、スタッフはできるだけ腐食土を突き抜けて立てるように努めた。

なお測量は、総社市教育委員会文化課文化財係の職員が担当し、基本的にはスタッフ担当・平板担当・テープ担当の3名で実施した。スタッフは平井典子が担当し、平板を高橋進一が主として行い一部に松尾洋平が携わった。テープ担当は随時測量作業員の黒江多佳子、角田京子、今川博之、大畑隆弘、小野良介の協力を得た。

## 2. 調査経過

測量調査は1998年から取り掛かり、まず墳長がつかめ



第1図 作山古墳国指定史跡範囲と公有地範囲（S=1/4,000）

るように仮の中心軸として設定したJラインの前方部端と後円部端を計測した。この段階で、今まで考えられてきた286mには達しない可能性が高くなった。

調査日程は以下のとおりであるが、業務や天候により測量を終日実施できなかった日もある。

1998年

3月26・30・31日

2002年

2月28日

3月3・4・6・7・9・10・11日

2007年

4月24・25・27日

5月2・7・8日

2008年

4月4・8・9日

2009年

1月26・27・29日

2月2・3・5・6・9・12・13・17・18・19・26日

3月2・4・5・9・10・11・12・13・16・17・18・19・23・24・25・26・30日

4月2・3・6・7・8・9・10・16・17・20・21・22・24・27・28・30日

5月1日

2010年

2月9・17・18・24・26日

3月1・2・3・4・5・8・10・11・12・16・17・18・19・24・26・29・30・31日

4月5・6・8・9・13・14・15・17・19・23・28・30日

2011年

3月10・11・14・15・17・18・22・23・28・29・30日

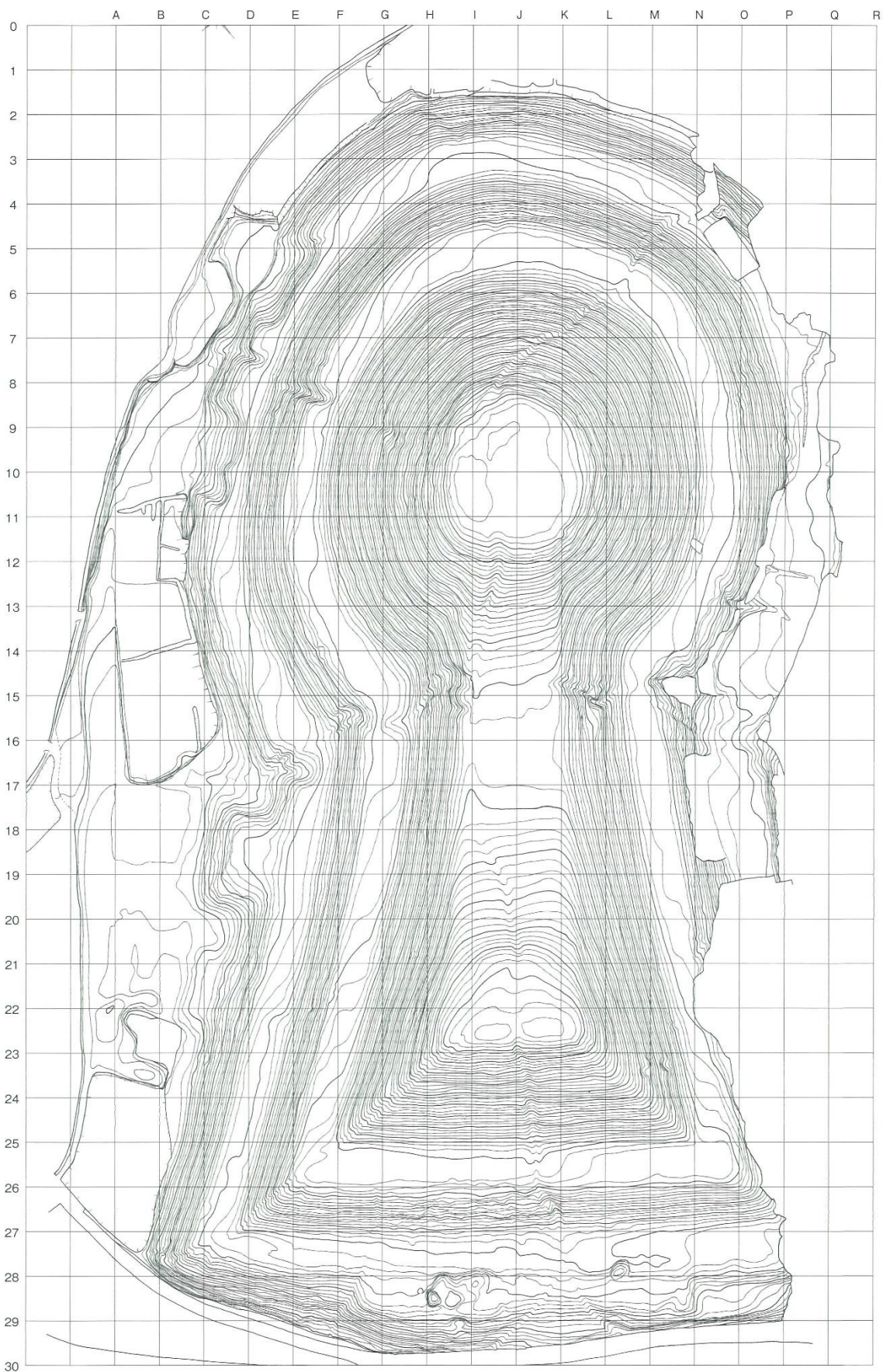
2012年

5月5日 不整合部分を測量

2014年

5月16日 前方部北側の攪乱と溜池の北端を追加測量。

なお、基準点測量時に日本測地系で表記していた国土座標が、途中から世界測地系に変更されたため、2015年度に業者に依頼して座標値の変換を行った。



第2図 基準点測量杭位置図 (S=1/1,200) [方眼は10m四方]

## 第2章 地理的歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

岡山県三大河川の1つである高梁川の沖積作用により、高梁川左岸には広い平野が形成されている。この平野部の北側には、吉備高原南端の山塊が連なり、南には福山を取り巻く山塊が広がる。これらの山塊に挟まれた平野部には、低丘陵が数多く点在し、かつては高梁川の支流が幾条も流れていた。その中でも中央付近を東西に流れる旧河道は、『備中国風土記』の「宮瀬川」に比定されるものと考えられ、この川の南が窪屋郡、北が賀夜郡となる。

作山古墳は、窪屋郡に所在し、作山古墳の南方約500m付近には、近世山陽道が東西に走る。岡山県南では、200mを超える巨大前方後円墳が、東から両宮山古墳・造山古墳・作山古墳と、いずれも旧山陽道沿いに立地している。このことから、5世紀段階にはすでに、旧山陽道に先行する道が存在した可能性が高い。

### 2. 歴史的環境

作山古墳と造山古墳が立地する高梁川と足守川に挟まれた平野部は、吉備有数の遺跡が存在する地域である。この地域には縄文時代後期後半以降遺跡が目立つようになり、弥生時代以降大規模な集落や墳墓群が形成される。

#### (1) 旧石器時代

この時期の遺跡は、発掘調査によってナイフ形石器1点が出土した平野部の窪木薬師遺跡<sup>(註1)</sup>以外には、高梁川の東に位置する低丘陵上で発見されている。井山宝福寺裏山遺跡<sup>(註2)</sup>、浅尾遺跡<sup>(註3)</sup>、権現山遺跡<sup>(註4)</sup>、井尻野遺跡<sup>(註5)</sup>があげられるが、中でも浅尾遺跡では翼状剥片を含む4点の石器類が採集されている。翼状剥片は製品ではなく国府型ナイフ型石器の素材となるものなので、キャンプサイトにたまたま残ったものとしては考えにくい。また、井山宝福寺裏山遺跡からは、確実にこの時期の所産とはいええないものの、石器を製作する際の剥片等もかなり散布していることから、旧石器時代の母集団がこの丘陵上に存在した可能性が高い。なお、採集された石器の石材はほとんどがサヌカイトであるが、井尻野遺跡からは隠岐島産黒曜石を使用した尖頭器が出土している。

#### (2) 縄文時代

草創期の土器は発見されていないが、この時期の可能性のある尖頭器が服部遺跡<sup>(註6)</sup>から出土している。風化しているが、押圧剥離らしき調整が認められる。他に同時期の遺物を含まないため実態は明らかでない。

早期の遺跡としては、押型文土器が出土した平野部の真壁遺跡<sup>(註7)</sup>と低丘陵上の長良山遺跡<sup>(註8)</sup>があげられる。

後期、特に後半には人々の沖積地への進出が始まる。平野部に立地する真壁遺跡、三輪遺跡群<sup>(註9)</sup>、南溝手遺跡<sup>(註10)</sup>、窪木遺跡<sup>(註11)</sup>など、広い範囲でこの時期の遺跡が確認されるようになることから、何らかの農耕が行われたものと考えられる。

晩期に入ると上記の遺跡はさらに広がり、確実な住居跡は発見されていないものの、土器や石器、

骨片、炭化物、焼土などの集中箇所が認められる。県南の沖積平野では、縄文時代の遺構は色調・土質などに明瞭な違いが認められないため検出が困難であるが、このような集中箇所が住居である可能性も考えられる。

### (3) 弥生時代

ここでは、水田址が発見されて以降を弥生時代として扱う。

上記の縄文時代晩期の遺跡を引き継いで早期の遺跡が展開する。そのうちの窪木遺跡、三輪・三軒屋遺跡<sup>(註12)</sup>からは、朝鮮半島の影響を受けた丹塗磨研土器が出土しているが、この時期の水田址や灌漑施設は発見されていない。

前期には縄文時代後・晩期の遺跡が引き継がれており、南溝手遺跡では、玉造工房も発見されている。また、面的には検出されていないが、水田層が確認されている。

中期には、南溝手遺跡、窪木遺跡、三輪遺跡群の他、中期後半以降新たに出現した足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡<sup>(註13)</sup>、上東遺跡<sup>(註14)</sup>、津寺遺跡<sup>(註15)</sup>、高塚遺跡<sup>(註16)</sup>、加茂政所遺跡<sup>(註17)</sup>など、足守川下流域に遺跡は広がりその数も増大する。

これらの遺跡は、後期以降さらに拡大し大規模な集落が築かれる。加飾した土器が多数出土しており土器祭祀が盛んに行われたことが窺える。なお、高塚遺跡からは、突線鈕式銅鐸や貨泉が25枚出土している。その他上東遺跡からは、縄蓆文をもつ土器や、岡山県唯一の出土例である瓦質土器も出土しており、朝鮮半島との交流があったものと考えられる。

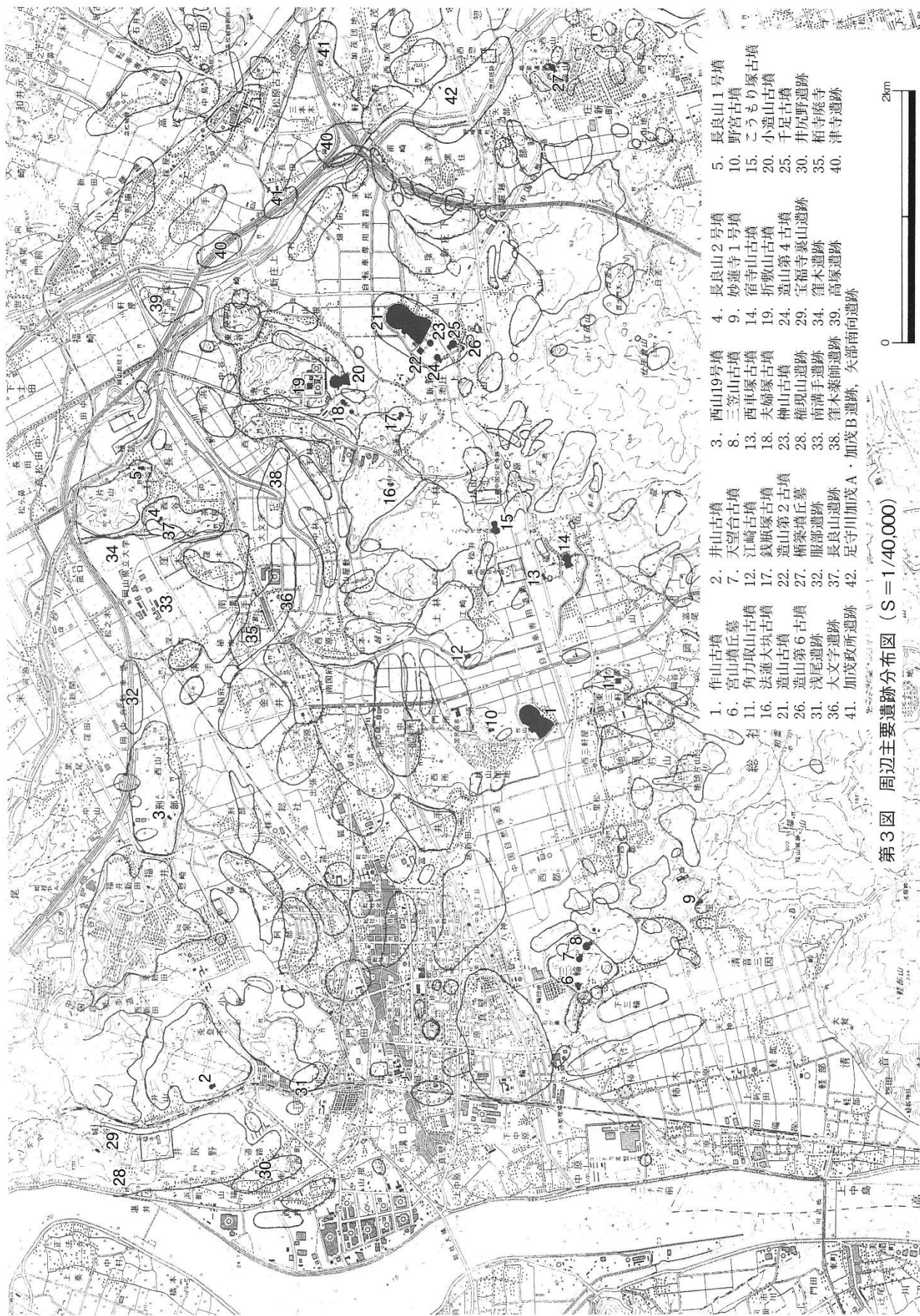
このように、後期以降足守川下流域に大規模な集落が出現するが、このような集落を基盤として弥生時代最大の墳墓、楯築墳丘墓<sup>(註18)</sup>が出現し、最古型式の特殊器台が出土している。その他、全面に直線と弧線を施した弧帯石も出土しているが、同様の弧帯石が近隣に築かれた鯉喰神社墳丘墓でも表採されている。そして高梁川に近い三輪丘陵には、弥生時代最終末と考えられる宮山墳丘墓<sup>(註19)</sup>が築造されており、この墳丘墓で使用された宮山型特殊器台が、奈良県の最古式の前方後円墳である箸墓古墳、弁天塚古墳、西殿塚古墳、中山大塚古墳などから出土していることで注目されている。

### (4) 古墳時代

弥生時代後期までは、大形の墳丘墓を築いていたこの地域に、前期の前方後円(方)墳はほとんど築かれていない。総社市の高梁川に近い三輪丘陵に天望台古墳(約55m)<sup>(註20)</sup>、三笠山古墳(約70m)<sup>(註21)</sup>が、そして井山に井山古墳(約50m)<sup>(註22)</sup>が存在する他、すでに消滅したが、前方後方墳である久米10号墳などがみられる程度である。

高梁川以西には、総社市秦の地に茶臼嶽古墳(55.4m)・一丁坑1号墳(約70m)<sup>(註23)</sup>の2基の前方後方墳と、前方後円墳である秦大坑古墳(約63m)<sup>(註24)</sup>が築造されている。また、足守川の東には、中山茶臼山古墳(約120m)<sup>(註25)</sup>・尾上車山古墳(約135m)<sup>(註26)</sup>が存在するが、近隣に弥生時代から古墳時代にかけての有数の集落遺跡や墳丘墓があるにもかかわらず、足守川西岸付近には前期の前方後円(方)墳として確実なものは、矢部大坑古墳が知られるにすぎない。

そして、5世紀はいると、この地に突如、全国第4位、県下最大の巨大な前方後円墳造山古墳<sup>(註27)</sup>が築かれる。それとともに、前期古墳が数多く造られていた地域では、中期古墳がほとんど存在しなくなる。高梁川以東から足守川以西にあたるこの地域では、造山古墳の後も小造山古墳<sup>(註28)</sup>や作山古墳、宿寺山古墳<sup>(註29)</sup>など巨大古墳や大形古墳をはじめ、中小の前方後円墳が多数見られ、この時期の首長墳が集中する。



- 1. 作山古墳
- 2. 井山古墳
- 3. 西山19号墳
- 4. 長良山2号墳
- 5. 長良山1号墳
- 6. 宮山古墳
- 7. 天望古墳
- 8. 三笠山古墳
- 9. 砂蓮寺1号墳
- 10. 野宮古墳
- 11. 法蓮大坑古墳
- 12. 江崎古墳
- 13. 西草塚古墳
- 14. 折敷山古墳
- 15. こちもり塚古墳
- 16. 法蓮大坑古墳
- 17. 錢塚古墳
- 18. 夫餘塚古墳
- 19. 宿寺山古墳
- 20. 小造山古墳
- 21. 造山古墳
- 22. 造山第2古墳
- 23. 夫餘塚古墳
- 24. 折敷山古墳
- 25. 千足古墳
- 26. 造山第6古墳
- 27. 榑桑墳丘墓
- 28. 榑桑墳丘墓
- 29. 千足古墳
- 30. 井尻野遺跡
- 31. 浅尾遺跡
- 32. 服部遺跡
- 33. 榑桑墳丘墓
- 34. 榑桑墳丘墓
- 35. 榑桑墳丘墓
- 36. 大文字遺跡
- 37. 長良山遺跡
- 38. 榑桑墳丘墓
- 39. 榑桑墳丘墓
- 40. 榑桑墳丘墓
- 41. 加茂政所遺跡
- 42. 足守川加茂A・加茂B遺跡, 矢部南向遺跡

第3図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/40,000)



また、折敷山古墳<sup>(註30)</sup>や角力取山古墳<sup>(註31)</sup>のように、大型の方墳も認められる。

なお、造山古墳に近接した地域では高塚遺跡や菅生小学校裏山遺跡<sup>(註32)</sup>、作山古墳に近接した地域では大文字遺跡<sup>(註33)</sup>・窪木薬師遺跡など、朝鮮半島系の遺物や、渡来人が移り住んだ足跡が認められる集落遺跡が存在する。

6世紀にはいると、この地域でも100mを超えるような前方後円墳はみられなくなるが、6世紀後半になると、全長100mのこうもり塚古墳<sup>(註34)</sup>が出現する。そしてそれに次いで備中最後の前方後円墳江崎古墳(約45m)<sup>(註35)</sup>が築造される。

また、6世紀後半には最古級の製鉄遺跡である千引カナクロ谷製鉄遺跡<sup>(註36)</sup>が出現し、本格的な鉄生産が始まる。その後7・8世紀を通して総社市内各所で鉄生産が行なわれるようになる。

#### (5) 歴史時代

歴史時代にはいると、高梁川の西岸ではあるが、県下で最も古い飛鳥時代前期の秦原廃寺<sup>(註37)</sup>が創建される。その後高梁川東岸から足守川西岸にかけての地域においても飛鳥時代後期の栢寺廃寺<sup>(註38)</sup>が、そして奈良時代に入り備中国分僧寺<sup>(註39)</sup>・国分尼寺<sup>(註40)</sup>が創建される。そのほか、三須廃寺<sup>(註41)</sup>や三輪廃寺<sup>(註42)</sup>の存在も知られるが、瓦の出土はあるものの寺域の特定などはできていない。

平野部の北に位置する吉備高原南端の山上には、古代山城鬼城山<sup>(註43)</sup>が築かれている。『記紀』に記載がないため築城時期には諸説あったが、近年の調査によって出土土器から7世紀後半と判明した。7世紀代第3四半期の土器はほとんどなく、7世紀第4四半期の土器が主であることから、築城の経緯については未だ確定していないが、古代山城の分布から、東アジアの緊張関係の中で築かれたものと考えられる。

#### 註

- (1) 島崎 東1993「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
- (2) 間壁葎子1966「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号
- (3) 鎌木義昌・小林博昭1987「浅尾遺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (4) 近藤義郎1987「権現山遺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (5) 谷山雅彦1997「分譲住宅造成地立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』7
- (6) 中野雅美他1997「服部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121
- (7) 村上幸雄・高田明人・谷山雅彦1987「真壁遺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (8) 村上幸雄1987「長良山遺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (9) 平井典子・高橋進一2008「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』17
- (10) 平井泰男編1995「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100  
平井泰男編1996「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107  
江見正己・松尾佳子編2008「南溝手遺跡・窪木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214  
渡邊恵理子編2012「窪木遺跡・南溝手遺跡・北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』235
- (11) 岡田 博編1997「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120  
平井泰男編1998「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124
- (12) 平井典子1995「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』5
- (13) 島崎 東編1995「足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- (14) 伊藤 晃他1974「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集  
柳瀬昭彦編1977「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16  
下澤公明編2001「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157  
小林利晴編2001「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158

- (15) 大橋雅也編1995「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98  
 亀山行雄編1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104  
 亀山行雄・大橋雅也編1997「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116  
 高畑知功・中野雅美編1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
- (16) 江見正己編2000「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- (17) 平井泰男・弘田和司・柴田英樹編1999「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- (18) 近藤義郎編『楯築弥生墳丘墓の研究』1992 楯築刊行会
- (19) 高橋護・鎌木義昌・近藤義郎1987「宮山墳墓群」『総社市史 考古資料編』総社市
- (20) 近藤義郎・中田啓司1987「天望台古墳」『総社市史 考古資料編』総社市
- (21) 近藤義郎・中田啓司1987「三笠山古墳」『総社市史 考古資料編』総社市
- (22) 中田啓司・近藤義郎1987「井山古墳」『総社市史 考古資料編』総社市
- (23) 谷山雅彦編2014「一丁塚古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』23
- (24) 高橋進一・村田晋2014「附載 秦大塚古墳測量調査について」『一丁塚古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告23
- (25) 近藤義郎1986「中山茶臼山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
- (26) 水内昌康1986「尾上車山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
- (27) 新納 泉編2012『岡山市造山古墳群の調査概報－科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科
- (28) 沢田秀実編2014『小造山古墳・小丸古墳 測量報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科 岡山大学考古学研究室
- (29) 葛原克人2003「宿寺山古墳」『山手村史 資料編』山手村
- (30) 前角和夫「折敷山遺跡・雲上山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (31) 葛原克人2003「角力取山古墳」2003『山手村史 資料編』山手村
- (32) 中野雅美編1993「山陽自動車道建設に伴う発掘調査5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81
- (33) 前角和夫・平井典子2013「南溝手地内の保育所建設に伴う発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』22
- (34) 葛原克人1979「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35  
 近藤義郎1987「こうもり塚古墳」『総社市史 考古資料編』総社市  
 藤田憲司2003『こうもり塚古墳と江崎古墳』吉備人出版
- (35) 近藤義郎1987「江崎古墳」『総社市史 考古資料編』総社市
- (36) 武田恭彰1999「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15
- (37) 葛原克人1987「秦原廃寺」『総社市史 考古資料編』総社市  
 谷山雅彦1996「秦原廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6  
 谷山雅彦1997「秦（秦原）廃寺確認調査2」『総社市埋蔵文化財調査年報』7
- (38) 葛原克人・岡本寛久1979「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34  
 葛原克人1987「栢寺廃寺」『総社市史 考古資料編』総社市
- (39) 葛原克人1987「備中国分僧寺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (40) 葛原克人1987「備中国分尼寺跡」『総社市史 考古資料編』総社市
- (41) 葛原克人1987「三須廃寺」『総社市史 考古資料編』総社市
- (42) 葛原克人1987「三輪廃寺」『総社市史 考古資料編』総社市
- (43) 高橋護1976「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117号 ニュー・サイエンス社  
 鬼ノ城学術調査団1980『鬼ノ城』  
 村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版  
 松尾洋平編2005「古代山城鬼ノ城」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』18  
 松尾洋平編2006「古代山城鬼ノ城2」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』19  
 岡田博編2006「国指定史跡 鬼ノ城山」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』203  
 谷山雅彦編2011「鬼城山 国指定史跡鬼ノ城山環境整備事業報告書」総社市教育委員会  
 金田善敬・岡本泰典編2013「史跡 鬼城山2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』236

### 第3章 既往の調査・研究

作山古墳について報告された最初のもは、堀安道（1829～1875）の『惣社記』と思われる。しかし、その書籍は失われている可能性が高く、現在入手にはできない。ただ、永山卯三郎による『岡山縣通史』上編に収められた「古墳横穴及遺物発見地名表 都窪郡」の表中に以下のとおり紹介されている。

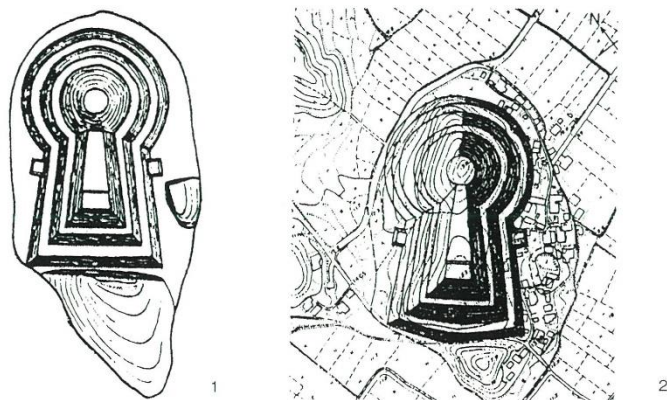
「 前方後圓 全長170間 前方10間  
高 後圓徑91間 後圓11間

「 埴輪幅20間之を古墳と云こと堀安道の惣社記に見ゆ 」

そして『岡山縣通史』上編には、上記の表の他、参考諸表として岡山県前方後円式古墳一覧が掲載されており、ここでは、作山古墳に全長175間（約318m）、後円部径99間（約180m）前方部幅88間（約160m）の値を付している。また円筒埴輪の基部が列をなして残存していることを報じ、あわせて埴輪列及び墳丘側面の写真も掲載している（永山1930）。なお、永山は『吉備郡史』においても作山古墳の規模について、細かく記載している（永山1937）。

西川宏は、かつて河出書房の『日本考古学講座』で作山古墳の全長を285mとした（西川1955）。しかし、その後の調査による略測で270mに訂正し、前方部幅160m・高さ10m、くびれ部幅126m、後円部径170m・高さ16mの数値を与えた。そして、造出しは両側に存在し、くびれ部から10m前方より位置するとして、造出しについては造山古墳より新しい傾向にあると指摘している。しかし、墳形や外表施設、円筒埴輪の形態・製作技術やその他の特徴などから、先後関係は決めにくく、両古墳は5世紀中葉の頃に相前後して築かれたとした。また、前方部前面の丘陵や、くびれ部南側の陪塚として指定されたものは、すべて墳丘を加工成形した際の余分な部分をそのまま放置した自然の丘陵であるとされた。さらに、後円部を取り巻く帯状の高まり（作山段）は、地盤を平坦にならしただけで、墳丘には含まれないとしている。そのほか、作山古墳の復元図も提示している（西川1964）。

その後、西川は、巨墳の築造順序について、新庄地域の造山古墳から山手地域の作山古墳<sup>(註2)</sup>そして東高月の両宮山古墳へ輪番したと考え、これらの巨墳の被葬者は吉備全域に君臨した大首長である



第4図 作山古墳復元図（西川・春成）（1：西川1964，2：春成1983から引用，一部改変）

とともに、その地域の首長をも兼ねていたと考えた。また、作山古墳の特徴について、低丘陵を加工修飾しているが、周囲の整備工事で削平されるべき丘陵が一部を残されていることから、周囲に堀は巡っていないことにも触れている（西川1975）。

春成秀爾は、1/2,500の都市計画図をもとに、現地観察や航空写真から作山古墳の全長を約285mとし、仲津山古墳と並んで全国第9位の規模とした。そして、後円部径約175m・高さ26m・頂部平面径31.5m、前方部長約110m・前方部幅160m・高さ19m、前方部頂部平面は、上辺26m、下辺30m、長さ18.5mの台形とした。また、前方部の形状については「前方部前端も一直線ではなく、中ほどで屈折して外側へ張りだす、いわゆる剣菱形を呈している」とし、前方部前端を剣菱形に復元した模式図を提示した。造出しは、西川と同様に両側に描いている。また、埴輪を検討し、ごく一部には黒斑をもつ円筒埴輪があることをあげ、大部分は窯窯焼成で一部に野窯によって焼かれたものがあるとした。その他、造山古墳と異なり、近接する場所に中小古墳が全く築かれていないとしている（春成1983）。

次いで、葛原克人は、埴輪と墳形から作山古墳の造営期を5世紀第2四半期後葉から第3四半期前葉と考え、畿内で併行関係にある前方後円墳としては、菅田御廟山古墳が有力であるとし、この時期においては全国第2位の規模に位置付けられると考えた。そして、南側の造出しの存在については切絵図からみて疑わしいとした（葛原1984）。また、作山古墳前方部の形状について、剣菱形を有する河内大塚古墳の後円頂部が狭く横穴式石室をもつ可能性があり、作山古墳とは異なることから春成の見解に異を唱え「一見剣菱形に見えとしても、それは昭和初年ごろ里道を拡幅したさい墳端が削り込まれ、出来あがった形状にすぎない」とした（葛原1991）。

作山古墳の測量図が初めて公開されたのは1986年のことで、『岡山県史 考古資料』の付図として1/1,000の図が、次いで1987年に『総社市史 考古資料編』に1/2,000の図が掲載された。これらの図は、岡山県史及び総社市史編纂事業のため、県と市が共同で樹木を線的に伐採し航空測量を実施したものである。この図により、作山古墳の全長は286mとされ、墳丘規模全国第9位の順位が与えられるとともに、墳丘形態の検討や他の巨大古墳との比較が可能となった（葛原1986、近藤義郎・葛原克人・中田啓司1987）。

この測量図から、石部正志らによって作山古墳の築造企画が検討され、奈良県の渋谷向山古墳と同一の企画性をもって築造された可能性が高いとした。また、一段目平坦面が凸形をなしていることを指摘しているが、前方部前端線は左右非対称の「片剣菱形」であるとしている（石部・田中・堀田・宮川1991）。

その後、総社市教育委員会が埴輪の表採資料や埴輪列の検出状況を報告している（前角和夫1993、平井典子1999）。また、現状変更に伴う立会調査で、後円部のくびれ部付近から、埴輪列が検出され、周辺の地形や形態から、作山段上の墳端に設置されたものと想定された（平井2004）。その他、墳丘の観察や墳丘測量の過程で、前方部一段目中央が台形状に突出することや、造出しに接して前方部側に小形の造出し状を呈した張出し部も確認された（平井2008）。

近年、新納泉は、作山古墳のレーザー計測を実施し、デジタル測量図を公表するとともに、後円部北側に70～80cmほどの高さをもった周堤状の部分があることから、周堤の一部を削平し周濠を埋めたことによって「作山段」が形成された可能性を指摘している（新納2012）。

## 註

1. 堀安道の文献は、岡山県立図書館に『蒼蠅日記』が所蔵されているのみである。総社市史編纂事業に携わった加藤信二によると、『惣社記』は市史編纂時にも発見されることはなかったとのことである。永山卯三郎の『岡山県通史』にその内容が記されているが、『惣社記』にどのように表記されていたかは不明である。
2. 西川宏は、三輪地域と山手地域に分けて捉え、山手地域に出現した五世紀前半の角力取山古墳と、それに続く作山古墳を5世紀後半とし、三輪地域に5世紀前半の首長墓がみられないことから、この2つの古墳の出現をもって、三輪・山手両地域が統合されたものと考えた。

## 文献

- 永山卯三郎1930「第一編上古 第十六章岡山縣に於ける古墳」275・309頁『岡山縣通史』上編
- 永山卯三郎1937『吉備郡史』巻上 岡山県吉備郡教育会
- 西川 宏1955「吉備」『日本考古学講座』5 河出書房
- 西川 宏1964「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』考古学研究会
- 西川 宏1975『吉備の国』学生社
- 葛原克人1976「古代吉備豪族の誕生—古墳の形成過程を中心として—」『歴史手帳』4—6
- 春成秀爾1982「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 古代を考える会
- 春成秀爾1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会編 福武書店
- 葛原克人1984「吉備の大古墳」『えとのす』25 新日本教育図書
- 葛原克人1986「作山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県
- 近藤義郎・葛原克人・中田啓司1987「作山古墳」『総社市史考古資料編』
- 葛原克人1991「第5章 前方後円墳時代 第2節 巨墳の造営」『岡山県史 原始古代Ⅰ』第2巻 岡山県
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 渉1991「造山・作山および両宮山古墳の築造企画の検討」『考古学研究』第38巻第3号 考古学研究会
- 前角和夫1993「付載3. 周辺古墳出土の埴輪について（2）作山古墳」『折敷山遺跡 雲上山11号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10
- 平井典子1999「作山古墳の調査について」『総社市埋蔵文化財調査年報』9
- 平井典子2001「作山下水道改良工事に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』11
- 平井典子2004「作山古墳現状変更に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13
- 平井典子2008「国指定史跡 作山古墳前方部前端的形状について」『総社市埋蔵文化財調査年報』17
- 新納 泉2012「作山古墳墳丘のレーザー計測」『岡山市造山古墳群の調査概報—科学研究費補助金基礎研究（A）研究成果報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科

## 第4章 調査成果

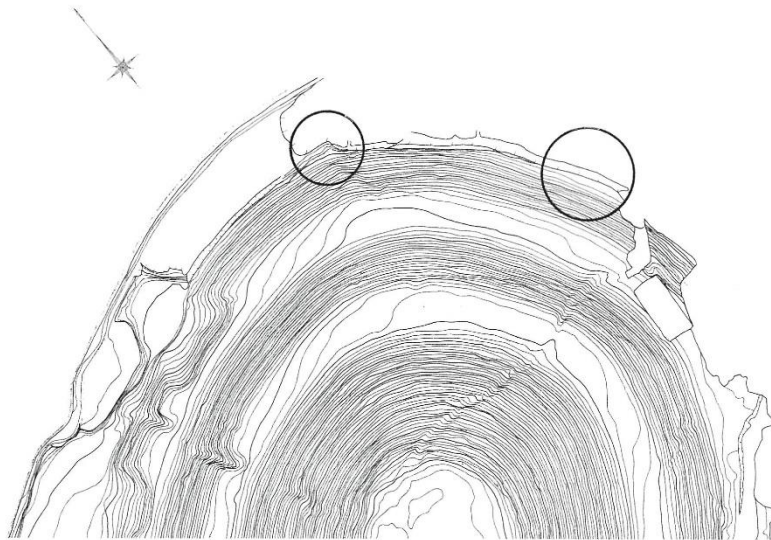
### 1. 墳丘規模

作山古墳の墳長は『岡山県史 考古資料』(1986)・『総社市史 考古資料編』(1987)の航空測量図から全長286mとされ、全国第9位、岡山県下第2位の規模をもつ前方後円墳とされてきた。そして各部位の値は、後円部径174m・高さ24m、前方部長110m・前面幅174m・高さ23mが与えられた。

さて、今回の測量図をもとに、墳長を古墳のほぼ中軸線にあたるJライン上で割り出してみた。前方部の墳端は、最下段斜面の傾斜からみて道路より前方に大きく伸びる可能性は低く、29-J杭からおおよそ6.5m前方と推定される。

後円部については、耕作地及び宅地造成などによって墳端のほとんどがカットされているが、墓地へと続く昇り口付近のL-Nライン間に、等高線の緩やかな箇所が存在することから、この傾斜変換点付近を墳端と推定した。また、G-Hライン間にも、若干等高線が緩やかになる箇所があり、いずれも標高12m付近にあることや最下段斜面の幅がほぼ同じであることから、この箇所も墳端と考えられる。この墳端ラインを追うと、主軸の2-J杭から概ね5.5m後方に墳端が求められる。

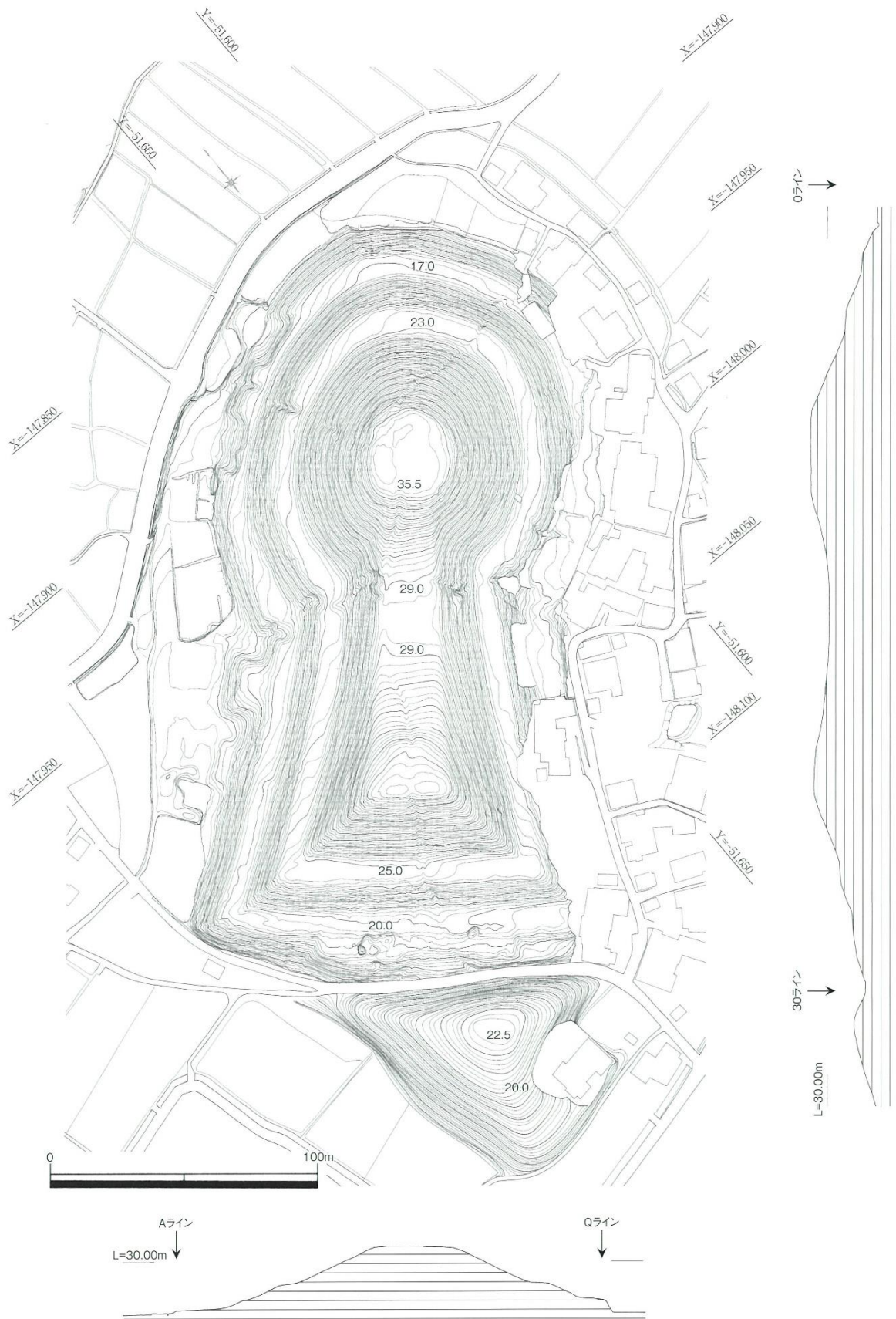
これらのJライン上における前方部および後円部の推定墳端ラインから、作山古墳の全長は現状で約282mと考えられる。



第5図 後円部墳端残存位置図 (S=1/1,500)

前方部の幅については、南側(方位による説明が煩雑になるため、便宜的に後円部側を東、前方部側を西として記述する)は民家によって大きく削平されているが、北側の角が良好に残存することから、Jラインで折り返し最大幅を求めた。結果、約170mの数値が与えられる。前方部長(くびれ部から前端まで)は約130mで高さは約23m<sup>(註1)</sup>である。

後円部は、墳端が耕作地造成などでカットされている上、南側は宅地造成により大きく削平されている。そのため幅は不確実ではあるが、L-Nライン間やG-Hライン間の墳端と思しき箇所と、比較的残りの良い最下段から推定した。また、楕円形を呈しているため、長軸方向に求められる長さ



第6図 作山古墳墳丘測量図・断面図 (S=1/2,000)

周辺の地形は『岡山県史考古資料』の作山古墳測量図と都市計画図 (S=1/2,500) を使用し、合成した。



第7図 作山古墳墳丘測量図 (S=1/1,500)  
 周辺の地形は『岡山県史考古資料』の作山古墳測量図  
 と都市計画図 (S=1/2,500) を使用し、合成した。



大幅が大きく異なる。長軸方向では約175m、最大幅は約160mと、その差は15mにも及ぶ。高さは約24mで、前方部との差は1m程度である。

以上、作山古墳の規模は、現状では全長約282m、後円部最大幅約160m・高さ約24m、前方部最大幅約170m・高さ約23mと推定される。

かつて、作山古墳は全長286mとして、仲津山古墳と並び全国第9位の規模を誇るとされてきたが、今回の測量調査結果から第10位と訂正する。なお、仲津山古墳は『前方後円墳集成 近畿編』(近藤義郎編1992)で290mとされていることから、いずれにせよ、箸墓古墳よりやや墳長が長い全国第10位の規模をもつ前方後円墳と位置付けられる。

## 2. 墳丘の形状及びその周辺

作山古墳は、前方部、後円部共に三段築成された前方後円墳である。

北側は耕作地造成などにより部分的に削平されてはいるものの、比較的残存状況は良好である。南側は一段目平坦面上に1軒の家屋が建設されているほか、墳端附近も家屋や道路によって大きく改変されているため墳端の形状は明らかでない。

前方部は、前面にかつての独立丘陵の丘尾が、削平されずにそのまま残されている。

また、前方部前端は中央付近が台形状に突出する特異な形状をもつ。

造出しは、現状では北側にのみ存在する。そして、造出しの前方部寄りに、造出しと同様の形状をした小規模な張出し部が存在する。

後円部は、この時期の巨大前方後円墳が正円に近い形状であるのに対し楕円形を呈する。

また、後円部を取り囲むように作山段と呼ばれる帯状の高まりが認められる。

このように作山古墳は、300mに近い巨大前方後円墳でありながら、その形状には他とは異なる特徴を持つことが指摘できる。

以下、墳丘の特徴を詳細にみていきたい。

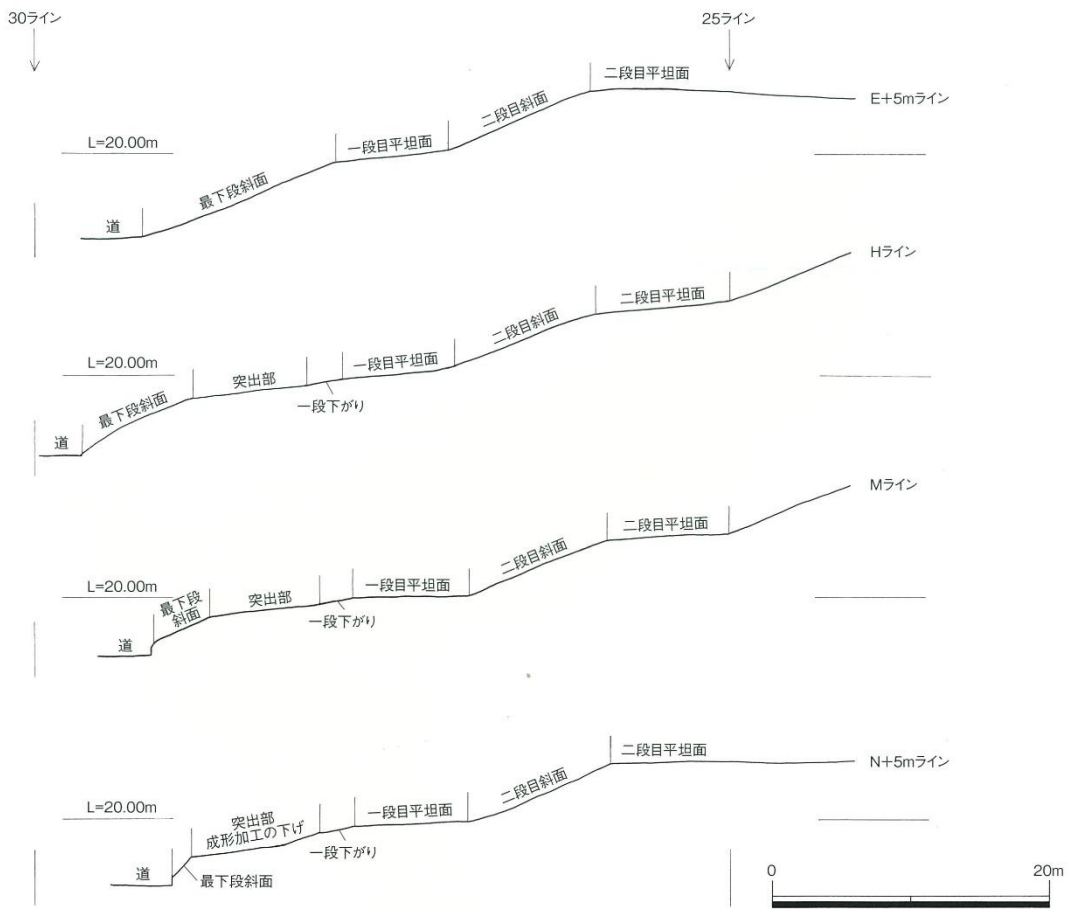
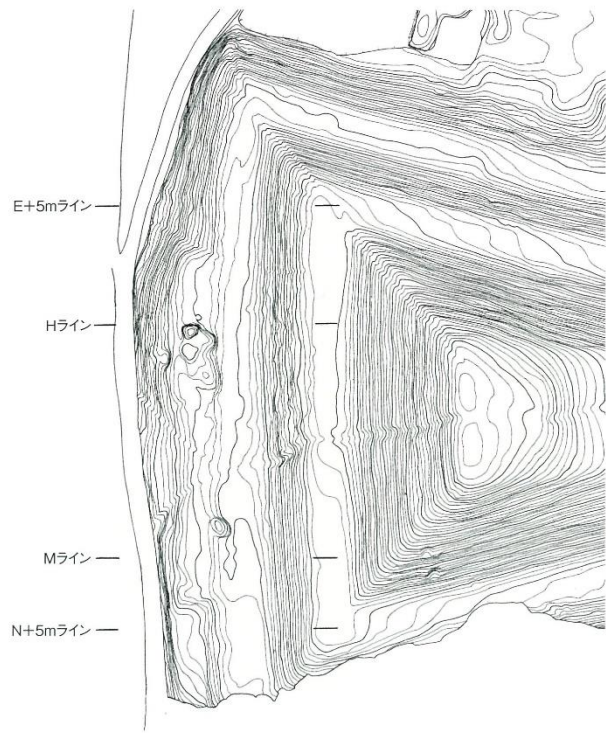
### (1) 前方部

#### 【前方部前端付近】

前方部前端は、開削して丘陵から切り離しているが、前方部前面の丘陵は除去されずにそのまま残されている。開削された堀切部分は現在道路となっており、道路部分を含む平坦部は幅約3～4m程度で、前面に広いテラスは形成されていない。

他の古墳と大きく異なるのは一段目である。一段目平坦面の北西角に立ち、もう一方の角と結ぶラインを視認しようとした時、一段目平坦面の前面中央付近が大きく外側に張り出していることに気付く(第21図版)。かつて作成された岡山県史・総社市史の航空測量図からもその形状は明瞭に看取でき、突出部は古墳の中軸線に対しほぼ対称形となる。そして突出部上面前線のラインが二段目、三段目のラインにほぼ平行し、突出部前線の斜面における等高線もそれに平行することから、この突出部が前方部と一体のものであることが窺える。そして突出部上面は、一段目平坦面から斜めに一段低くして、一段目平坦面と区別している(第8図)。この一段低くした部分を除くと、一段目平坦面及び突出部平坦面の長さは、ほぼ同一に仕上げられている。

前方部前線の形状については、中央付近が外側に張り出していることから、築造時に形状を剣菱形



第8図 前方部前端断面図 (上: 断面位置図 S=1/1,500, 下: 断面図 S=1/500)

に整えたという説（春成1983）や、堀切を利用して敷設された後世の道の拡幅によってこのような形状に変わったとする説（葛原1991）が唱えられた。しかし上記のような形状から意図的に台形状の突出部が築かれたものと考えられる。また、この突出部の上面に掘削された攪乱孔の最上部には岩盤が露出しており（第22・23図版）、崩落で外側に張り出したものではないことも明らかである。

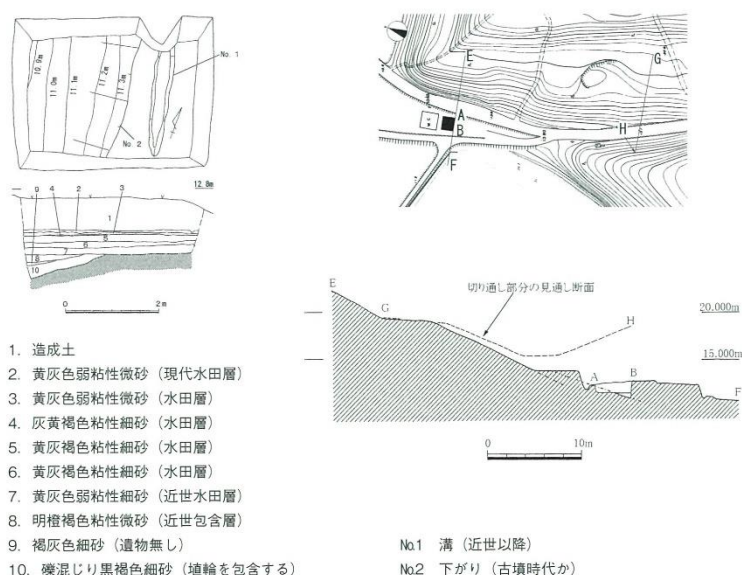
突出部から外れた北側は、一段目平坦面から堀切までを削って斜面とし墳端を形成している（第8図E+5 mライン）。突出部から南では、北側の形状とは異なり最下段の斜面上半のみを、場所によっては1.5 m程度も削平して平坦面を造り、見かけ上対称形となるように突出部を成形している。そして突出部の成形加工で削平した平坦面の前端から堀切までを最下段の斜面にしたと想定されるが、墳端は道路拡幅の際にカットされ、現状ではN+5 mライン付近で高さ約80cm前後の石垣が築かれている（第8図N+5 mライン）。

このような突出部から外れた北側と南側の形状の違いは、元の丘陵形状によるものと想定される。北側は丘陵端部にあたるため、一段目から墳端まで一気に下げ斜面を形成することが容易であったと考えられる。それに比し、南側は残丘が高く残存していることからみて、突出部を形成するために岩盤を墳端まで一気に掘削するには多大な労力が必要と考えられることから、一段分のみ掘削し見かけ上の突出部を形成したものと推測される。

#### 【堀切部と周辺の下がり】

堀切部は現在道路として使用されているが、道路面のレベルは一定ではなくL-Mライン間が高く特に一段目斜面の登り口付近は15.79mを測り最も高い。北西角の上り口付近では13.56mと、2.2mを超える差がみられる。最高所を0とすると、Hライン付近で約1.5m、南側の現存する墳丘の最南端付近で約1.3m、墳端付近と考えられる集落へ続く道路との交差点付近で約2.4mも低くなっている。堀切部分に道路を築く際、作山古墳の中軸付近に向けて2 mもの盛土をしたとは考えにくい。また以下に記述するトイレの改修工事に伴う確認調査や、北西隅付近の墳丘の形状からも、道路のレベルは当時の地形をそのまま残しているものと考えられる。

2006年度、作山古墳前部西側の駐車場に設置されたトイレの改修に伴って、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した。調査の結果（和田剛2007）、近世の水田造成によって削平された地山層の水平な面と、地山層の下がりが検出された（第8図）。調査担当者の和田は、最下層の10層上半で埴輪片が、下半から僅かに弥生土器片が出土していることや、北西端の墳丘形状などから、調査区内の地山の下がりは墳丘外にあ



第9図 作山古墳トイレ改修に伴う確認調査  
（和田2007から引用 一部改訂）

り、古墳築造当時の地形をある程度留めているとした。そしてこの下がりには南の残丘につながっているようにしている。

そこで残丘との関係を見ると、残丘部分の最も低い等高線は11.5mを示しており、調査区内の地山削平面で下がりが始まる約11.3mのレベルに近似する。そしてその等高線は、緩やかに弧を描き調査区に延びていくことから、和田が指摘したとおり、残丘はこの調査区の斜面につながるものと考えられ、当時の丘陵の形状を知る手掛かりとなる。

また、和田が作成した調査区断面と堀切見通しラインの図からも、先述した道路面のレベルが一定でないことが看取できる。前方部前端に位置する突出部の成形と同様で、丘陵の端部においてはそのレベルを活かし、残丘が最も高く残っているL-Mライン付近では掘り下げを浅くして、その労力を省いたためと考えられる。このように、堀切部のレベルを揃えようとした形跡は認められない。

なお、作山古墳の前方部は、残丘を取りきっていないため、墳丘と残丘を隔するある程度の広さをもった平坦な面を築く必要があったと考えられる。道路によって拡幅され、石垣が築かれているとはいえ、作山古墳の規模からみて築造当時の堀切が現在の道路幅を大きく減じるものであったとは考えにくい。現状が当時の形状をある程度反映していると考えるのが妥当と思われる。

#### 【前方部南側】

前方部南側のほとんどは、一段目がカットされ民家や道路が築かれている。また、くびれ部寄りの一段目平坦面上にも民家が存在し、墳裾の形状は明らかでない。

道路の南側にも民家が並び、これらの民家は丘陵の端部をカットして築かれているものと考えていた。しかし、道路に敷設する下水路の工事立会調査（平井2001）で、道路部分から弥生時代中期後半の包含層及び地山の下がり確認された（第12図）。西側のA・B・C地点では、地山が道路面から約55～70cm付近で検出されたが、東側にあたるI地点では、約35cm付近で確認された。D～G地点では地山は確認できなかったが、7層から弥生時代中期後半の土器が多数出土した（第13図）。地山が西に下がっていること、またE～G地点では弥生時代中期の包含層が道路面から35cmより下に堆積し、削られることなく遺存していることから、この付近は作山古墳の造営から外れた箇所であったと想定される。地形は西及び南に下がっていくものと推測され、残丘の南側にあたる田面のレベルが12.6m前後で、道を挟んだ東側の宅地面レベルと近似することから、道路の南側の集落は丘陵端部を大きく削平して築かれたのではなく、現状が当時の自然地形やレベルをある程度反映しているものと推定される。

#### 【前方部北側】

北側では、前端付近が水田造成でカットされているが、25ライン以東からくびれ部付近までは墳端が残されており、その北側にはテラスが広がる。このテラスの状況と前方部南側の地形からみて、前方部に周濠はなかったものと考えられる。

なお、次に述べるが、北側には造出しと造出し状の低い張出し部が付帯されている。

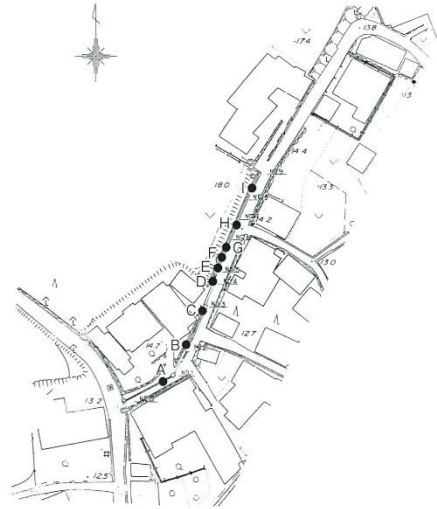
#### 【造出し】

現状では、北側のみ造出しが存在する。かつて、西川宏や春成秀爾は造出しを両側に付設して復元図を描いた（西川1964・春成1983）が、葛原克人は古い切絵図を検討し、残丘との間が狭いことなどから南側に造出しが入る余地はないとした（葛原1984）。

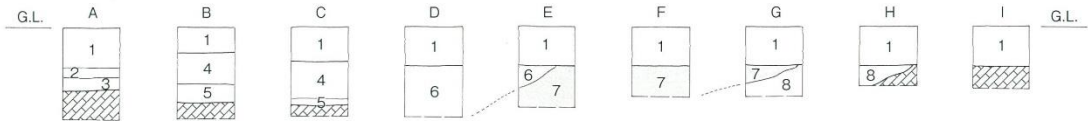
北側の造出しにほぼ対応する箇所にある南側の民家は、他の民家が一段下がっているのに対し、北側の道路と同じレベルに築かれている。そして一段下がった民家の南側の畑地は、平らではなく南に



第10圖 下水路工事調査地位置圖 (S=1/5,000)

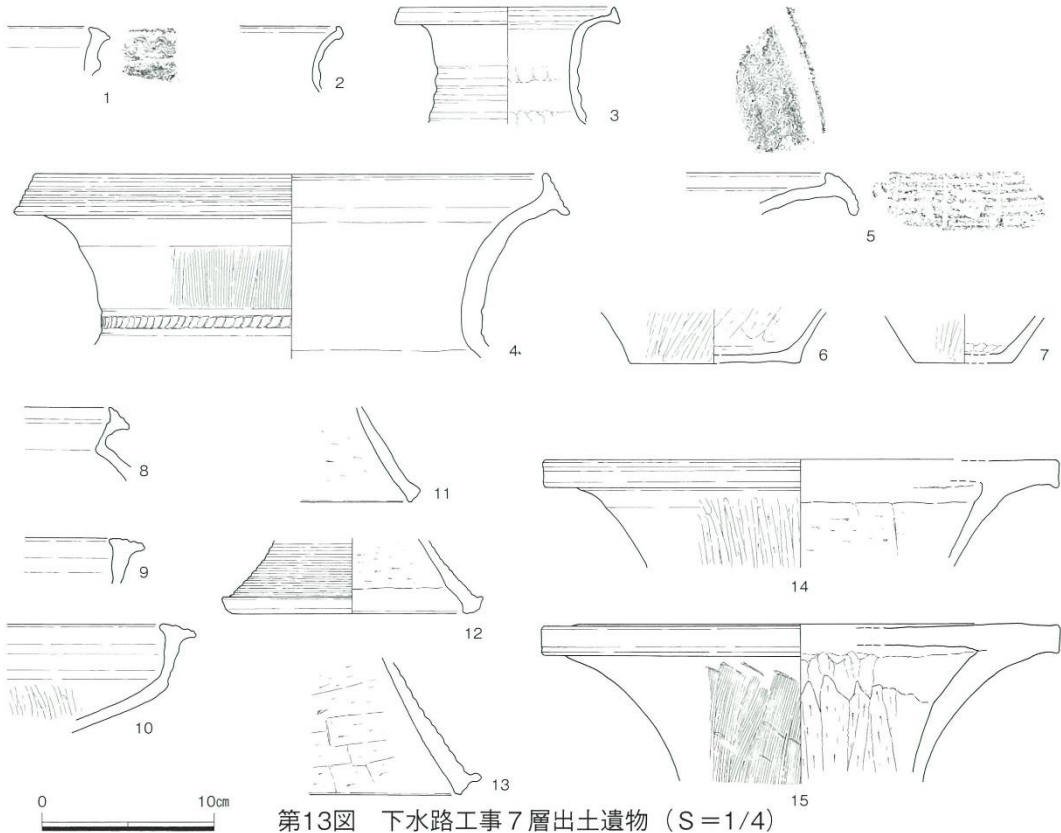


第11圖 下水路工事土層柱狀圖位置圖 (S=1/2,000)



1. 道路造成土 3. 橙褐色土 5. 灰茶色土 7. 暗黑灰色土 (弥生中期包含層)  
 2. 橙灰色 4. 暗灰橙色土 6. 暗灰褐色土 8. 黑灰色土

第12圖 下水路工事北壁土層柱狀圖 (S=1/60)



第13圖 下水路工事7層出土遺物 (S=1/4)

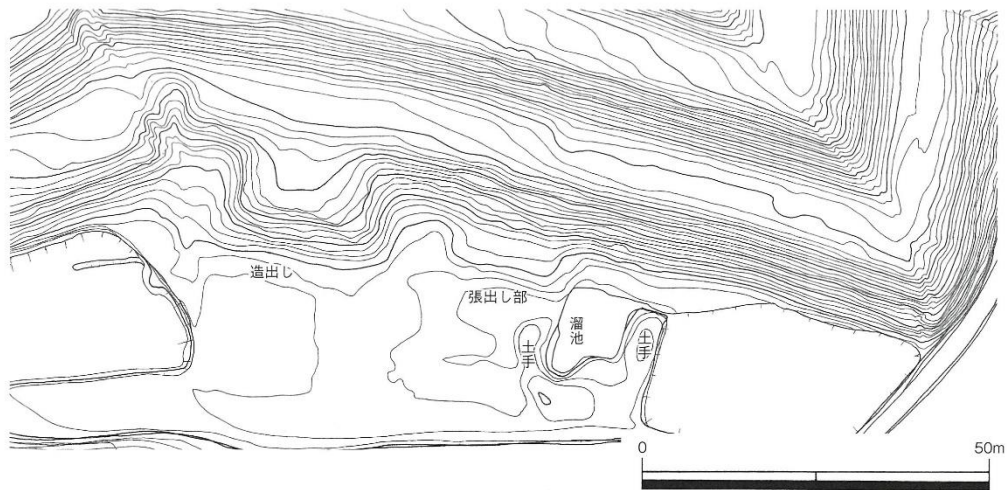
緩やかに下がる傾斜をもつ（第30図版）ことから、小尾根を削平した痕跡と捉え、民家の敷地は造出しの名残りではないかと考えた。近隣の住民に尋ねたところ、どの程度かは不明であるが随分以前に地上げをしたとのことであった。このように現状では造出しが存在した確証を得ることはできなかったが、この付近は小尾根が延びていたため西寄りの部分よりは高かったと考えられる。昭和36年6月7日に国土地理院によって撮影された作山古墳の航空写真をみても、墳丘と地上げた民家にあたる箇所及び残丘をつなぐように木が茂っている。

作山古墳の築造の特性からみて、小尾根を最大限に利用している可能性があり、また、前方部の堀切が狭いことから、造出しが存在した場合でも、残丘との間はそれほど広くないものと想定される。これらのことから、確証はないが南側にも造出しが存在した可能性が考えられる<sup>(註2)</sup>。

北側に築かれた造出しは、くびれ部より6m程度前方部よりに築かれている。造山古墳の造出しがくびれ部附近に築かれているのに対し後出的な要素をもつ。この造出しは、一段目平坦面から若干下がった位置に上面が形成されており、墳端からは3mに近い高さをもつ。

造出しにほぼ並列して、西側に低い造出し状の張出し部が存在する（平井2008）。この張出し部の西側に接して後世の溜池が掘削されており、掘削時の土が盛られた懸念もあったが、掘削土は池の東・北・西側に存在するコの字形の土手に使用されたものと考えられる。奈良県の室宮山古墳にも造出しの前方部寄り両側に、二段築成の張出し部が存在すること（木許ほか1996）や、造山古墳においても張出し部の可能性が指摘されている（草原2014）箇所があることなどからみて、整然とした台形状を呈する作山古墳の張出し部も、築造当初のものと考えられる。

なお張出し部は、正規の造出しと異なって、一段目斜面の下部から派生して築かれており、その高さは1m以下に留まる。



第14図 前方部北側の造出しと張出し部（S=1/1,000）

#### 【前方部頂部】

前方部の頂部には、主軸に直交して長さ約20m、推定幅約15m及び30mを測る台形状の平坦面が形成されている。頂部から東側斜面の傾斜変換点までは急斜で、1.5m程度の比高差が認められるが、そこから次第に緩やかになり、幅広い平坦面が後円部まで続く。

#### (2) 後円部

作山古墳の後円部は、主軸方向に長い楕円形を呈する。

墳頂部は、主軸方向に約35m、主軸に直交して約32mの楕円形を呈する平坦面をもつ。平坦面には窪んだ箇所は全くなく、この古墳が盗掘を受けていない可能性は極めて高い。最高所は標高35.8mである。

墳丘斜面の幅は、一段目・二段目・三段目が概ね1：1：3の比率となっている。

#### 【南側】

後円部南側は、一段目斜面・平坦面が大きくカットされ、民家が軒を連ねている。

前方部寄りの一段目平坦面は一見良好に遺存しているかのように見受けられるが、上部は削平されている。そして南北に延びる土手状の高まりが2箇所存在し、そこからくびれ部付近にかけて近世以降と考えられる瓦が多数埋没・散乱しているのが認められる。二段目斜面も大きくカットされ、一段目平坦面を広くしていることから、民家が建てられていたか、あるいは畑を耕作し放棄した後瓦などを捨てた可能性が考えられた。近隣の古老によると、かつては一段目平坦面上に家が2・3軒存在したという話を聞いているとのことであったが、地目図での確認はできていない。また、一段目平坦面上には、南側から墓地上る道の西側に、後世に掘られた東西方向の細長い溝が存在し、この付近の平坦面が地元住民にしばしば利用されていたことが窺える。

二段目平坦面及び三段目斜面の遺存状況は良好である。

なお、くびれ部付近に立地する民家で改築が行なわれ、現状変更に伴う立会調査を実施した<sup>(註3)</sup>。この時、すでに遺構は削平されていると考えていた敷地内から埴輪が列をなして出土した。一段目平坦面より下位に位置するため埴輪列と考えると、埴輪列の面と家屋の南側には段差があることから、埴輪列は作山段上に位置すると想定した(平井2004)。

しかし、測量図が完成し検討を試みると、この埴輪列は一段目斜面の中に収まる可能性が高いことが判明したため、張出し部のような付帯施設が存在した可能性が浮上した。後円部の形状やレベルが、左右対称に築かれているとした場合、埴輪列は一段目平坦面に近い16mの標高付近に位置することになり、埴輪列の検出面が概ね14.85mであることから、一段目斜面を1m以上もカットして付帯施設を構築したことになる。また、民家の敷地は付帯施設の平坦面を示していると考えられ、その規模は地形や埴輪列の位置などからみて幅17m以下、長さ13m程度と推測される。しかし、判断材料が少ないことと、一段目斜面をカットしている可能性があることなどから、その形状を想定することはできなかった。

#### 【東側】

比較的良好に遺存している。前述したように、L-Nライン間・G-Hライン間付近で等高線の幅が広がる箇所があることから、傾斜変換点付近を墳端と考えた。いずれも標高12m付近で、作山段につながると考えられる平坦面は、墳端から2m程度を残し後世に削平されている。墳端が残存する2箇所以外は、すべて墳丘斜面の下部が水田造成などによってほぼ垂直に削平され、その境には幅の狭い溝が掘削されている。

なお、墳端から僅かではあるが、平坦面が存在することから周濠はなかったものと考えられる。

#### 【北側】

後円部北側は、二段目斜面までは比較的良好に残存しているが、一段目平坦面とその斜面は中央付近で大きく掘削されている。また、北側部分では墳端が残存している箇所はなく、遺存状況が良好な

箇所でも、墳端付近は耕作地造成などによって標高14mより若干下位でカットされている（第63～66図版）。

#### 【くびれ部】

三段目の斜面と二段目平坦面の境のくびれ部は、南側に比べ北側が前方部寄りに位置する。二段目以下のくびれ部はすべて人の通行によって道がつけられ、そこから崩落が広がっているため、特に南側の遺存状況が劣悪であるが、ここでも北側がより前方部側に位置するようである。

なお、道でくびれ部付近の斜面が抉れていることから、墳丘の出入り口らしきものは確認できない。

#### （3）平坦面上の等高線

前方部側面の一・二段目平坦面の等高線はすべて平坦面上を斜め外側に向け平行して横切る。他の巨墳にも同様の等高線がみられるが、作山古墳は平坦面や斜面の遺存状況がよく、非常に美しい線を描く。これは前方部側面における平坦面上の等高線が、前方部前端に向かってすべて下位の斜面に取り込まれていくことによるもので、前方部側へ平坦面・斜面ともに高くなっていくことが明瞭に看取できる。特に三段目の斜面は前端に向けて急激に高さを増す。

後円部一・二段目における平坦面上の等高線は、東側から側面にかけて上位の斜面に取り込まれ、側面中央付近からくびれ部付近に向けて下位の斜面に取り込まれていく傾向にある。このことから、東側の平坦面が高く、側面に向けて低くなり、そこからくびれ部に向けてまた高くなっていく状況が読み取れる。

#### （4）外表施設

作山古墳は、各段の平坦面縁辺部すべてに埴輪列をもつと考えられる。埴輪列は、前方部の一段目北西角および南側の二段目、そして後円部南側の二段目で確認している。また、後円部南側のくびれ部付近で確認された埴輪列は付帯施設に伴うものと想定される。

なお、付帯施設に伴う埴輪列は、溝を掘り埴輪を据えたのではなく、1基ごとに穴を掘り設置していたものと推定される。しかし、他の箇所の埴輪が同様の据え方をしていたかについては、確認できていない。

各段の斜面には、すべて葺石が葺かれていたと考えられるが、そのほとんどは人頭大の角礫である。しかし、後円部東側に築かれた遊歩道付近には人頭大の円礫が散見され、一部に河原石も使用されていたと想定される。

#### （5）作山段

後円部を取り巻くように段が形成されており、作山段という小字名が存在する。作山段は、南を民家の宅地造成で掘削され、東側もそのほとんどが上部を削平されて耕作地などに利用されているが、北側には当時の地形がそのまま残されていると考えられる箇所も存在する。

#### （6）培塚について

かつて、作山古墳くびれ部付近の南側に陪塚があるとされ、作山第1古墳と称されていた。現在その場所には小丘陵が残されており、周囲を宅地などで削られているが、断面を見る限り古墳と考えら



れるような盛土や墓壇、周濠などの人工的な土層は認められない。この小丘陵も、かつては作山古墳が築造された独立丘陵と一体のものであったと考えられる。周囲の地形やこれまでの調査成果から、丘陵全体が南に張り出していたとは考えにくいので、丘陵から派生する小尾根の先端付近が、前方部前方の残丘と同様に削平されずにそのまま残されたものと推定される。

なお、作山古墳の道を挟んで北側に位置する丘陵の尾根上先端付近に、野宮古墳という前方後円墳が所在する。作山古墳から約200mの距離である。かつて鳥居龍三が発掘調査を実施したが、すでに盗掘にあっていたようである。地元の古老の話によると、地元の青年達がボランティアで発掘調査に参加したが、何も出土しなかったでそのうち参加しなくなったということである。『前方後円墳集成』では墳長約48mとされているが、中央にはトレンチ様の坑があいている上、竹藪と周囲の削平から、現在古墳の形状や規模は定かではない。また時期も不詳で、作山古墳との関係も不明である。

以上、作山古墳の形状や周囲についてみてきたが、前方部の前方に広いテラスはなく丘陵の一部をそのまま残していること、前方部前端に突出部を設けていること、前方部前面堀切部のレベルが一定でなく2mもの差をもつこと、後円部を楕円形に成形していることなどなど、他の巨大古墳では見られない特異な形状をもつことが指摘できる。しかし、一段目・二段目平坦面の等高線がいずれも同様の形状を描くことから、きちんとした設計図の元、各段・各斜面が計画的に築かれたことが窺える。前方部前端の突出部も、当初から計画され築かれたものと推測される。

## 註

- 1) 高さは、前方部堀切部のレベル差が大きいことから、前方部・後円部共に後円部墳端付近のテラスのレベルから割り出したものである。
- 2) 第17図の地目図では地上げされた民家付近は水田である。ただ第12図の土層で東側へ地山が高くなっていき、その後の土地利用でもこの箇所のみ木々に覆われていることから造出しの可能性を考えた。
- 3) 本報告書に附載として立会調査の報告を掲載している。詳細はそちらを参照いただきたい。

## 引用・参考文献

- 木許 守編1996「室宮山古墳範囲確認調査報告」『御所市文化財調査報告書』第20集
- 草原孝典2014「造山古墳の基礎的考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
- 葛原克人1984「吉備の大古墳」『えとのす』25 新日本教育図書
- 葛原克人1991「第5章 前方後円墳時代 第2節 巨墳の造営」『岡山県史 原始・古代Ⅰ』第2巻 岡山県
- 近藤義郎編1991『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 新納 泉2011「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究』58-1 考古学研究会
- 新納 泉編2012『岡山市造山古墳群の調査概報—科学研究費補助金基礎研究(A) 研究成果報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科
- 西川 宏1964「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』考古学研究会
- 春成秀爾1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会編 福武書店
- 平井典子2001「作山下水路改良工事に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』11
- 平井典子2004「作山古墳現状変更に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13
- 平井典子2008「国指定史跡 作山古墳前方部前端の形状について」『総社市埋蔵文化財調査年報』17
- 和田 剛2007「(8) 自然環境整備交付金に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』37

## 第5章 寄贈遺物及び表面採集遺物

ここに紹介する遺物は、表面採集資料で、1～4・12・13は三須在住の高杉鋭一氏がかつて表採されたものである。採集された資料を御子息の高杉博氏が、2012年にすべて市に寄贈され、その中に1976年3月に作山古墳で採集された資料が含まれていたののでここに紹介する。いずれも貴重な資料であり、特に武人埴輪は作山古墳では唯一の出土例である。

寄贈して下さった高杉博氏に記して感謝の意を表します。

1・2は朝顔形埴輪で、1は肩部から筒部の破片である。硬質で表面には灰赤色の顔料が塗布されている。外面のタガから上は、粗いヨコハケ後、一部にナナメハケを、タガから下は、タテハケ後二次調整にヨコハケを施している。内面はやや粗いタテ・ナナメハケ後、タガ付近に数回にわたるヨコ方向のナデがみられる。また内面にも一部顔料が残存している。胎土に黒褐色粒（くさり礫）の大粒を含む。2は、肩部の破片で、色調は浅黄橙色であるが硬質である。外面の調整はヨコハケで、上端に一部ナナメハケが入る。内面はヨコハケ後、下半に不定方向の強いナデがみられる。

3・4は円筒埴輪の口縁部である。3は硬質で、外面には粗いヨコハケが施される。内面は、上方が粗いヨコハケ、下方がナナメハケで調整されている。4は外面にB種ヨコハケ後線刻を施している。内面は上方にナナメハケ、下方に不定方向のナデがみられる。

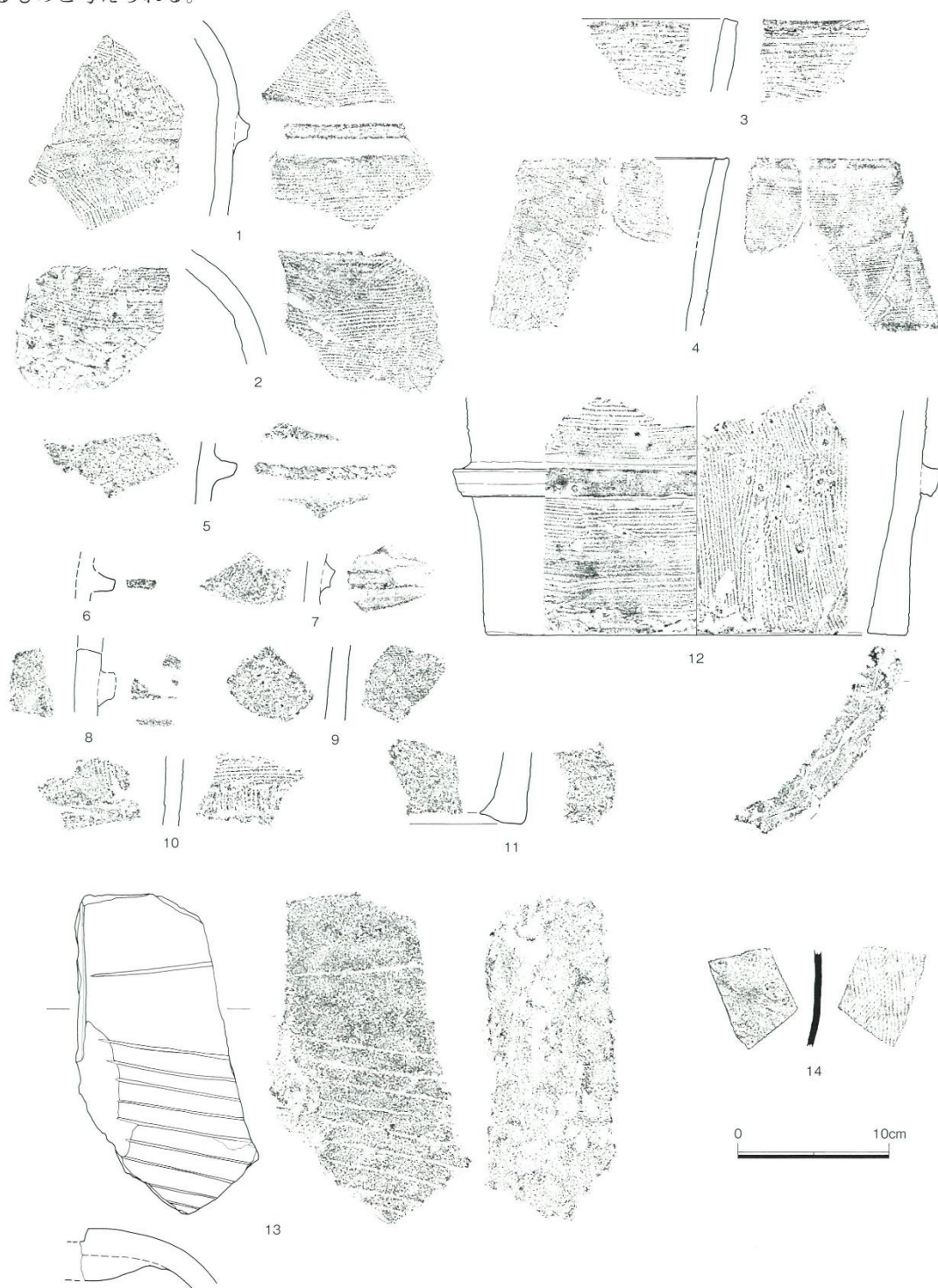
5～11も円筒埴輪の破片である。5・10・11は、北側くびれ部付近に掘られた小さな溜池の上方で採集したものである。5は細く高いタガをもつ。内外面ともに器面が荒れ、調整は不明である。10は、外面が粗いタテハケ後粗いヨコハケ、内面はタテハケ後不定方向にナデている。11は基底部の破片であるが調整は不明で、接地面には圧痕がみられる。二次的に火を受けたものと思われ、桃色がかった色調を呈する。6・9は、北西角の一段目平坦面縁辺付近で採集したものである。埴輪片が円形に散り、3か所程度に分かれていたので、埴輪列が遺存していた可能性がある。この場所から出土した埴輪は、いずれも硬質のものはなく、断面が黒化している。6はタガが剥離した小片で、細く高いタガをもつ。調整は器面が荒れ不明である。9は外面に比較的細かなヨコハケが施されているが、内面の調整は不明である。断面は他と同様に黒化している。このように、北西角の一段目平坦面上の埴輪は、古い様相をもったものがみられることから、作山古墳の中でも比較的早い段階に焼成され据えられた可能性がある。7は低いタガをもつ破片で、タガ付近のため外面はヨコナデ調整のみ認められる。内面の調整は器面が荒れ不明である。

8は後円部南斜面の遊歩道で採集されたもので、灰色を呈し、透かし孔をもつが、摩耗しているため調整は不明である。焼成はやや甘い、須恵質埴輪として捉えられる。12は、基底部から2段目下半までの破片である。最下段の下半は灰白色を呈し、限りなく須恵質に近い破片である。非常に硬質で、胎土には5mmを超えるくさり礫の黒・茶褐色粒が熔解した状態で多く含まれており、高温で焼成されたことが窺える。外面はB種ヨコハケ、内面はタテハケでいずれも粗い。なお底部の接地面には部分的に圧痕がみられ、また粘土を重ね合わせた痕跡も認められる。

13は肩鎧の破片で、1921（大正10）年9月に前方部中央付近で表採されたものである。肩から腕にかけての破片で、タテの線刻を平行に施しており、鉄板を重ねた表現と考えられる。内面には指オサ

エの痕跡が認められる。なお断面は黒化している。作山古墳では形象埴輪の出土例は非常に少なく、この武人埴輪片は希少な例である。

14は須恵器の甕で、外面に平行タタキが施され、内面は当て具痕跡をナデ消している。断面は、サンドウィッチ状で、風化しているが中心部は暗紫色系の色調である。TK216あるいはTK208に属するものと考えられる。



第15図 寄贈遺物及び表面採集遺物 (S=1/4)

寄贈遺物及び表面採集遺物観察表

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
1	朝顔形 埴輪	外：肩部一粗いヨコハケ後ナナメハケ 筒部一粗いたテハケ後粗いヨコハケ 内：タテ・ナナメハケ後タガ付近はヨコ方 向のナデ	外：7.5R4/2 (灰赤) 外：10YR5/2 (灰黄褐)	2mm以下の長石・石英粒少 3mm以上の黒褐色粒目立つ	硬質 外面に顔料を塗布 内面にも一部顔料残存
2	朝顔形 埴輪	外：ヨコハケ、一部にナナメハケ 内：ヨコハケ後下半は不定方向の強いナデ	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR8/4 (浅黄橙)	3mm以下の長石・石英粒中 (1.5mm以下主) 6mm以下の黒褐色粒少～中。 茶褐色粒僅	硬質
3	円筒 埴輪	外：粗いヨコハケ 内：粗いヨコハケ・ナナメハケ	外：10YR5/2 (灰黄褐) 内：10YR6/2 (灰黄褐)	2.5mm以下の長石・石英粒中～多 (1mm以下主) 5mm以下の暗茶・黒褐色粒少	硬質
4	円筒 埴輪	外：B種ヨコハケ 内：ナナメハケ後口縁付近と下方を横方向 のナデ	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙)	1.5mm以下の長石・石英粒中 (1mm以下主) 3mm以下の暗茶・黒褐色粒中 (1mm以下主)	線刻あり
5	円筒 埴輪	外：調整不明 内：調整不明	外：10YR8/3 (浅黄橙) 内：10YR8/2 (灰白)	5mm以下の石英・長石粒中 (1～2mm前後多) 茶褐色粒僅	やや硬質
6	円筒 埴輪	外：調整不明 内：－	外：10YR 7/4 (にぶい黄橙) 内：－	4mm以下の石英・長石粒少～中 (1mm以下主)	剥離したタガ部分のみ残存 やや軟質
7	円筒 埴輪	外：ヨコナデ (タガ付近) 内：調整不明	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙)	1mm以下の長石・石英粒少～中 1.5mm以下の黒褐色粒中	やや硬質
8	円筒 埴輪	外：調整不明 内：調整不明	外：2.5Y7/1 (灰白) 内：2.5Y7/1 (灰白)	1.5mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 2.5mm以下の茶褐色粒少	硬質 須恵質
9	円筒 埴輪	外：ヨコハケ 内：調整不明	外：10YR6/3 (にぶい黄橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙)	4mm以下の長石・石英粒中 (1mm以上のもの目立つ) 茶褐色粒僅	断面黒化
10	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケ 内：タテハケ後不定方向のナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/3 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (0.5mm以下主) 4mm以下の茶褐・暗茶褐色粒少	やや硬質
11	円筒 埴輪	外：調整不明瞭、底面に圧痕 内：調整不明	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	5mm以下の長石・石英粒中 (2mm前後目立つ) 茶褐色粒僅	二次的に火を受けている 断面黒化
12	円筒 埴輪	外：粗いB種ヨコハケ 内：粗いたテハケ	外：2.5Y7/2 (灰黄) ～8/2 (灰白) 内：2.5Y7/2 (灰黄)	1.5mm以下の長石・石英粒多 (0.5mm以下主) 10mm以下の茶褐・黒褐色粒中 (5mm前後目立つ)	基底部～筒部 硬質、部分的に須恵質様に 灰色を呈す。
13	武人 埴輪	外：表面薄く剥落、調整不明、線刻あり 内：表面薄く剥落、ユビオサエ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	8mm以下の長石・石英粒多 (2～5mm多) 3mm以下の茶褐色粒中	肩鎧
14	須恵器 甕	外：平行タタキ 内：あて具痕跡ナデ消し	外：2.5Y6/1 (黄灰) 内：2.5Y7/1 (灰白)	4mm以下の長石・石英粒少 (0.2～0.3mm以下主) 1mm以下の黒褐色粒少	断面サンドウィッチ状 7.5R5/2 (灰赤)

※白石純氏の御教示によると、茶褐色粒・黒褐色粒は「くさり礫」とのことである。

## 第6章 総括

### 1. 墳丘の形状について

作山古墳は、282mもの全長をもつ巨大な古墳であるが、第4章でみてきたように他の巨大古墳と異なる点が諸所に見出され、復元図（第16図）からも墳丘形状の違いは明らかである。

周辺の整備についても丘尾を取り除かずそのまま残しており、残丘によって墳丘の景観がさえぎられてしまう箇所もある。また前方部前面の堀切もレベルをそろえることなく、核となった丘陵の尾根筋付近と端部付近では2m以上の高低差をもつ。

前方部は、前端が一直線ではなく中央付近が台形状に突出する。そして、突出部の両外側は、丘陵の端部に近い北側を墳端まで削平し、丘陵の尾根筋に近い南側は一段分だけ掘削し左右対称に見えるように成形している。後円部も、正円形に近い他の巨大古墳とは異なり、楕円形を呈する。このような特異な形状をもつ巨大古墳は、河内大塚山古墳の前方部が剣菱形を呈する以外はその存在を知らない。

ではなぜこのような形状に、築造されたのであろうか。

作山古墳の前方部前面に残された丘陵端部と周辺の地形が、その手掛かりを与えてくれる。

残丘の形状から推測すると、作山古墳北西角の墳端付近は独立丘陵の端部にあたると考えられる。そのため突出部の前端に合わせ一直線に墳端を築くならば、北西部分には大量の盛土が必要となる。ましてや北西角の前方は、トイレの改修工事に伴う確認調査（和田2007）でも明らかなように、地形が下がっていくためその盛土量も相当のものとなり、多大な労力が必要になると想定される。南側では、前方部側面の道路で弥生中期の包含層が確認され、その下層に地山の下がりか認められることから、この付近より南に全面的に丘陵が延びる可能性は低く、南西端付近も地形が下がっていることから、南側にも一定程度の盛土が必要になってくると思われる。

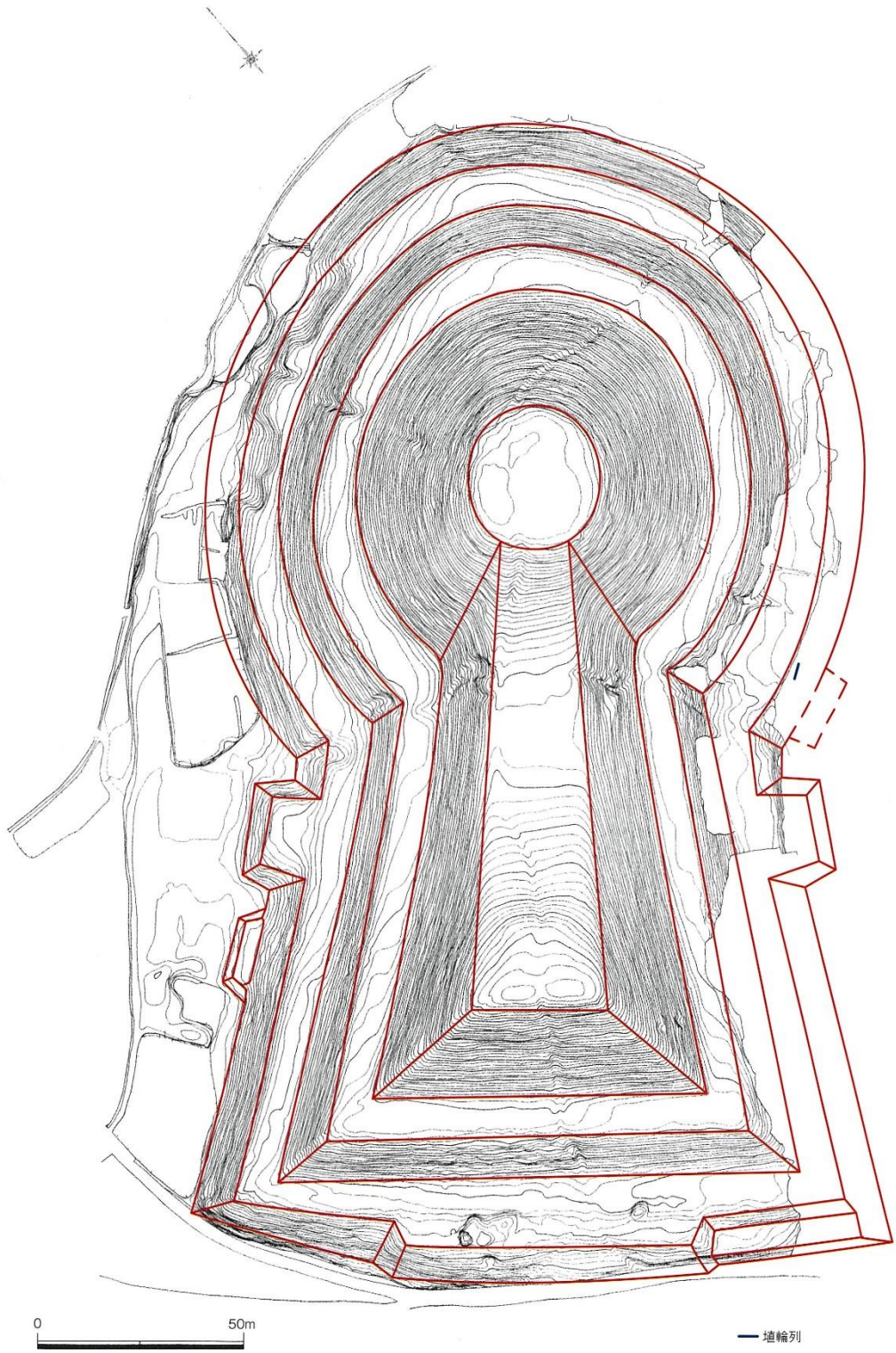
逆に突出部を付設せずに、遺存している北西角から一直線に成形した場合、前方部の長さは約20m程度短くなる。そして、墳丘中央付近からやや南寄り丘陵の尾根付近にあたるため高さがあるのみでなく、突出部上面の攪乱上部に岩盤がみられることから、岩盤を除去し一直線に掘削成形するのは容易なことではなかったと考えられる。

このような状況から、突出部を設け、労力を最小限にして長さを保ったものと推定される。このことは、突出部の南側が堀切部まで取り除かれていないことや、堀切部も丘陵の尾根筋付近が両端より2mあまり高くなっていることから追認される。

後円部も、現状の後円部最大幅で正円形にした場合、10m程度短くなる。また、長軸に合わせて正円形にすると、作山段のレベルなどからみても相当量の盛土が必要になったと考えられる。

以上から、作山古墳は岩盤を含む丘陵の大規模な掘削や、大量の土を盛ることは極力避け、最小限の労力でより墳丘を長くするために、このような形状に成形加工したのではないかと推測される。

上記のように述べれば、作山古墳は核となった丘陵に規定されて、他の部分の形状も歪で手抜き工事的な様相が強いように受け取られる恐れがある。しかし各段や斜面の形状は極めて精美であり、一・二段目の平坦面における等高線形状が一致していることから、きちんとした設計図の元、計画的に



第16図 墳丘復元図 (S=1/1,500)

築造されたものと考えられる。一見歪に見える突出部でさえ、左右対称に見えるように成形加工しているほか、各斜面・平坦面ともに幅や高さをできるだけ左右対称に揃えようとしていたと見受けられ、後円部も楕円形を呈してはいるものの、整った古墳であることが窺える。

ともあれ、作山古墳が墳丘の長さにこだわってこのような成形加工をしたのであれば、従来いわれてきたように、墳長が古墳のランクを示す可能性は非常に高いものと思われる。

なお、復元図は、測量図の等高線に合わせて線引きし作成した。前方部前端については、類例はないが堀切の幅などを考慮して図のように復元した。造出しは、第4章でふれたように航空写真や地形等から南側にも存在した可能性があり、両方に付設した。南側くびれ部付近に位置する埴輪列は、本書の附載で記したように、平面的には一段目斜面に位置すると考えられるため、何らかの付帯施設が存在したものと思われる。埴輪列の位置と標高からみて、一段目斜面を部分的に掘削して埴輪を並べた可能性が高いが、管見の限りではそのような類例はなく、また調査での情報も少ないことから、その全体形状を把握することは困難であった。しかし、埴輪列が位置する敷地面と、南側の石垣までが付帯施設である可能性が高いため、石垣下端付近までをその範囲と考え破線で表示した。なお、北側の形状からみて、付帯施設が左右対称に取り付く可能性は少ないものとする。

吉備の三大巨墳である造山古墳・作山古墳・両宮山古墳はいずれも旧山陽道の付近に造られていることから、旧山陽道の前身となる幹線道が古墳時代にはすでにこの周辺に存在したものと考えられ、巨大なモニュメントは道行く人に吉備の力を誇示したものと推定される。近世の山陽道は、作山古墳の南約500m付近を東西に走っている。作山古墳に限っていえば、残丘を取り除かなかったことから、全体の形状や葺石・埴輪の類は南側からは見にくいいため、広いテラスをもち全体がよりよく見える北側に当時の交通路が存在していた可能性も考えられる。

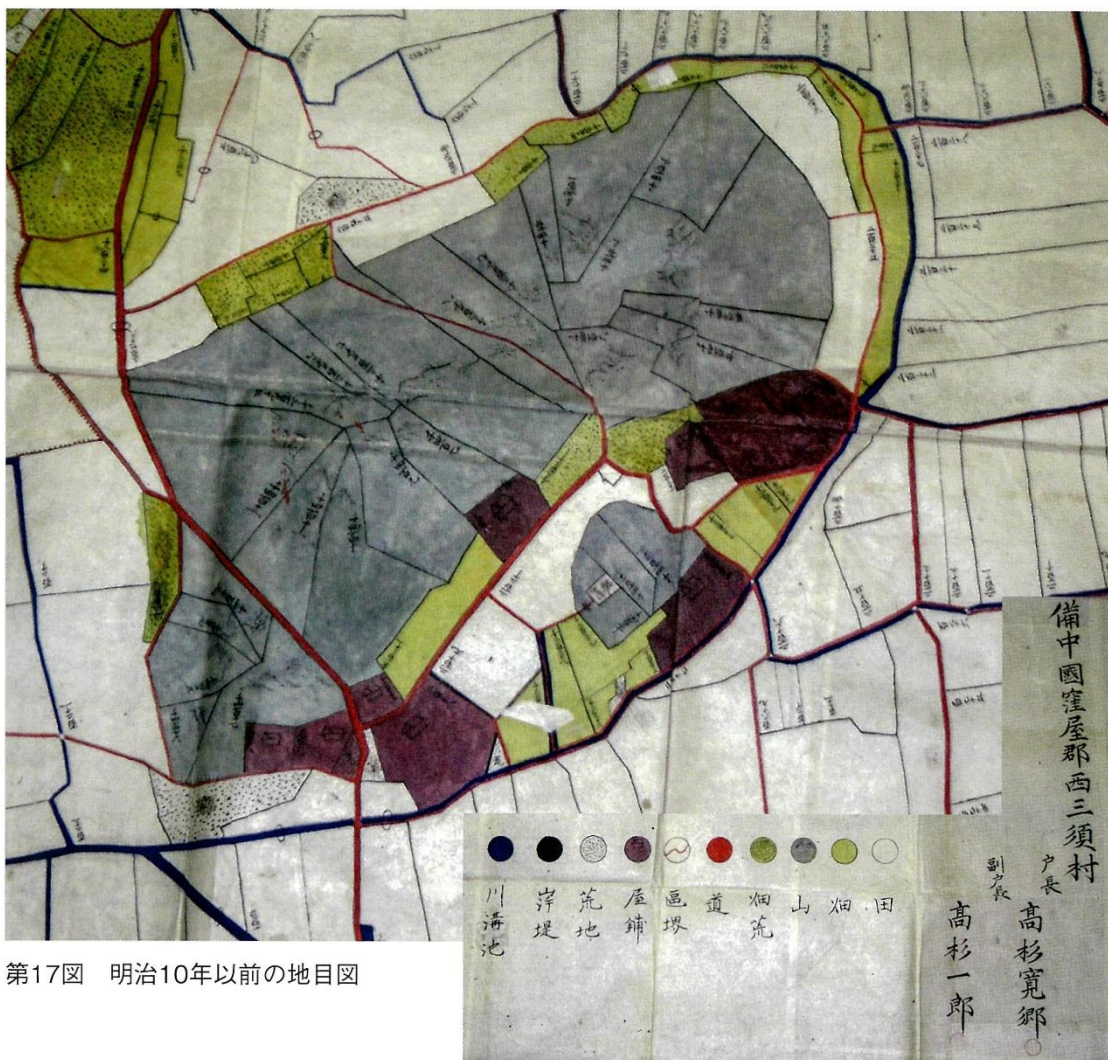
## 2. 周濠の有無について

作山古墳に伴う周濠の有無についてであるが、かつて堀安道の『惣社記』には「湟幅二十間」と記されていたようである（永山1930）。しかし、その後は西川宏をはじめ研究者の多くが、周濠の存在に否定的であった。そのような中で新納泉は、作山古墳デジタル測量のデータから、作山古墳北側の後円部くびれ部付近に周堤状の部分がみられるとし、「作山段」は周堤を一部削平して周濠を埋めたことにより形成された可能性が高いとした（新納2012）。

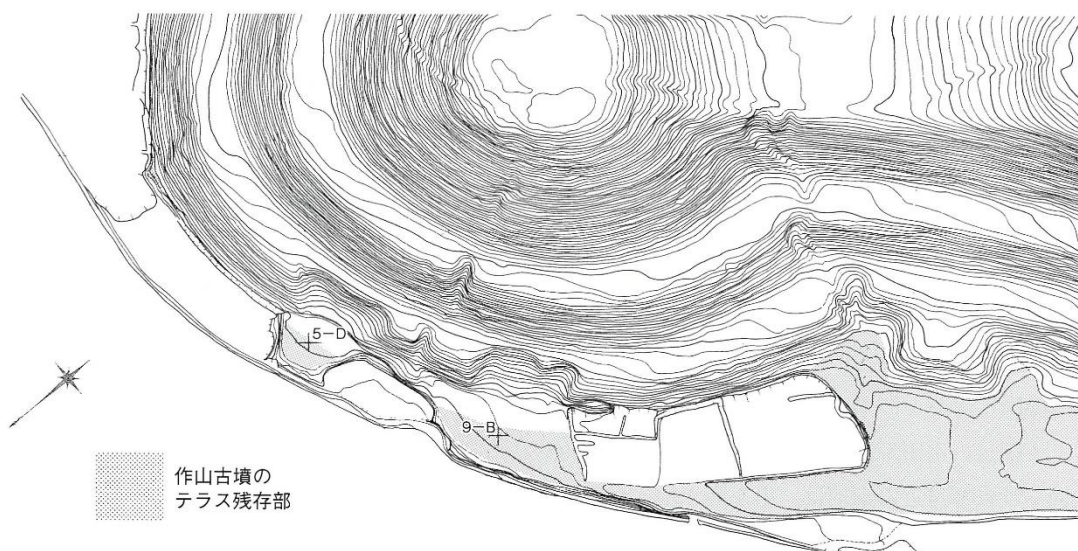
はたして、作山古墳に周濠は存在するのであろうか。

ここに作山古墳を含む1枚の地目図がある。『備中国窪屋郡西三須村』と明記され、当時の戸長・副戸長の名も列記されている。西三須村は、西三須村と西三須村西組が明治8年6月28日に合併し、西三須村の名を使用していたが、明治10（1877）年5月25日に改称し三須村となった。このことから、西三須村と明記されたこの地目図は、明治10年5月25日より古い段階に作成されたものであり、この地区では現存する最古のものと思われる。

この図によると、「作山段」の一部は水田として利用されており、北側くびれ部付近から後円部にかけても細長い水田が認められ、その北側には三角形の荒地が存在する。新納が周堤状と指摘した北側くびれ部付近の畑地は、第1図や他の地籍図からみて、この三角形の荒地とされている箇所の南端にあたると思われるが、一定の幅で東に延びてはいない。また後円部の南側には宅地が存在しており、周濠が深いものであれば、この当時あえて水はけの悪い場所に宅地を造成したとは考えにく



第17図 明治10年以前の地目図



第18図 作山段を含む北側テラスの遺存状況 (S=1/1,500)



い。

そこで、周堤状の部分について、墳丘の北側全体を含めて検討を試みた。くびれ部の北は造出しからつながる標高13.5m前後のテラスを一部カットして70~80cm程度下げており、その北側に周堤状の畑地が存在する。この畑地に向けて造出し付近のテラスから地形は緩やかに下がっていき、段差をもつことなくつながっている。周堤状の畑地上面も、東へ行くにしたがってレベルが下がり、標高からみて9-B付近に位置する平坦面や、削平部分を越えた5-D付近の平坦面につながっていく。そしてそれは、後円部東側の墳端と考えられる付近にみられる平坦面の標高約12mにもつながる。このことから、これらの平坦面は作山段本来の標高と考えられ、前方部からつながる作山古墳のテラスと想定される。

なお、この9-B付近にみられる平坦面の西側からくびれ部までがカットされており、カットされた部分は3区分され西から東へ段状に下がるが、東に行くに従い、周堤状の部分とのレベル差は解消されていく。このカット部分が、地目図の北側中心付近にみられる水田部分にあたる<sup>(註1)</sup>。

また、墳端が残存していると考えられる後円部東側の2地点では、墳端から周濠へつながる下がりではなく、墳端から直接平坦な面となっている。そしてそこから約2m先で、耕作地造成などによって後世にカットされた状況が看取できる。

以上のように、作山古墳は現状では周濠は存在しないものと考えられ、周堤状とされているものは、耕作地造成などによる削平を免れた作山古墳のテラスと捉えられる。

なお、前方部南側は道路付近から地形が下がっていくことから、周濠もテラスも存在しなかったと考えられるが、前方部の北側から後円部にかけては広いテラスが形成されていたと想定される。ただし現状では、作山段と呼称されている後円部を取り巻く段に、本来のテラスのレベルが残されている箇所は少ない。

吉備においては、大形・巨大前方後円墳のうち畿内のような周濠をもつ確実なものとしては赤磐市の両宮山古墳が知られる<sup>(註2)</sup>。造山古墳においても、新納によって周濠の存在が指摘されているが非常に浅い。また草原孝典は、周辺の地形などからも、造山古墳に周濠はなかったと論じている(草原2014)。

作山古墳は一部盛土を行っている(平井2004・同書附載)が、基本的には独立丘陵を削って築造されており、盛土をするために若干周囲が掘り窪められることはあっても、深い周濠を掘削する必要はなかったものと思われる。基本的に丘陵を削って築造する吉備の古墳には、一部に浅い周濠があったとしても、畿内のように周囲を取り巻く深い周濠は存在しなかった可能性が高く、両宮山古墳は吉備の古墳のなかでは異質な存在といえる。

### 3. 時期について

作山古墳から出土した埴輪は、朝顔形埴輪や円筒埴輪がほとんどで、形象埴輪は非常に少なく武人の肩鏡片1点と、蓋埴輪の破片数点の他、器種が不明な小片が僅かにみられるのみである。

円筒埴輪のタガの形状はバラエティに富み、高く突出したものや低いもの、幅の狭いものや広いもの、そしてその形状も様々である。基底部が残されたものも、最下段のタガ下端に押圧のあるものと無いものがみられる。基底部接地面には、圧痕が認められるものと丁寧に撫でているものの両者が存在する。外面の調整はタテハケ後ヨコハケを施しており、全周残されたものや幅の広い破片には工具

の停止痕がみられることから、B種ヨコハケを施したものが多くと推測される。また、基底部には二次調整のヨコハケを省略し、タテハケのみが施されたものも見受けられる。

最下段のタガまでの高さも異なり、南側くびれ部付近から出土した埴輪列の埴輪はすべて9cm程度と低い。報告された採集資料（前角1993）の中には15cmを測るようなものもあり、埴輪列の埴輪は新しい様相をもつ。巨大な古墳ゆえ、築造には年数を要したであろうから、墳丘各部位によって少しずつ時期が異なる可能性は高い。今後の表採資料については、位置と埴輪の関係を詳細に検討し、どのようなあり方をするかみていきたい。

これまで実見した作山古墳出土の埴輪の中に、あきらかに須恵質といえるようなものは、第5章で報告した小片1点のみであるが、須恵質に近い硬質のものはかなり見受けられる。また、黒斑を有するものは、埴輪列を含むくびれ部付近から出土した埴輪の中には全くみられず、春成（春成1983）や前角（前角1993）の報告の中に僅かに認められるにすぎない。このことから、作山古墳の埴輪はそのほとんどが窯窯焼成と考えられる。

以上のように、円筒埴輪の形態や調整等は多様であり、時間幅はあると考えられるものの、概ね円筒埴輪Ⅳ期に位置付けられ、1点ではあるが表採された須恵器の甕からも、5世紀第2四半期のどこかで築造が始まり、中頃に完成されたものではないかと考えられる。

#### 4. 作山古墳とその周辺

作山古墳が位置する県南の高梁川以東から、造山古墳が位置する足守川以西では、平野部に低丘陵が集中する箇所がある。この地域では、楯築墳丘墓・雲山鳥打墳丘墓・宮山墳丘墓など、弥生時代有数の墳丘墓が築かれているほか、近隣には弥生時代から古墳時代の拠点的な集落が存在する。

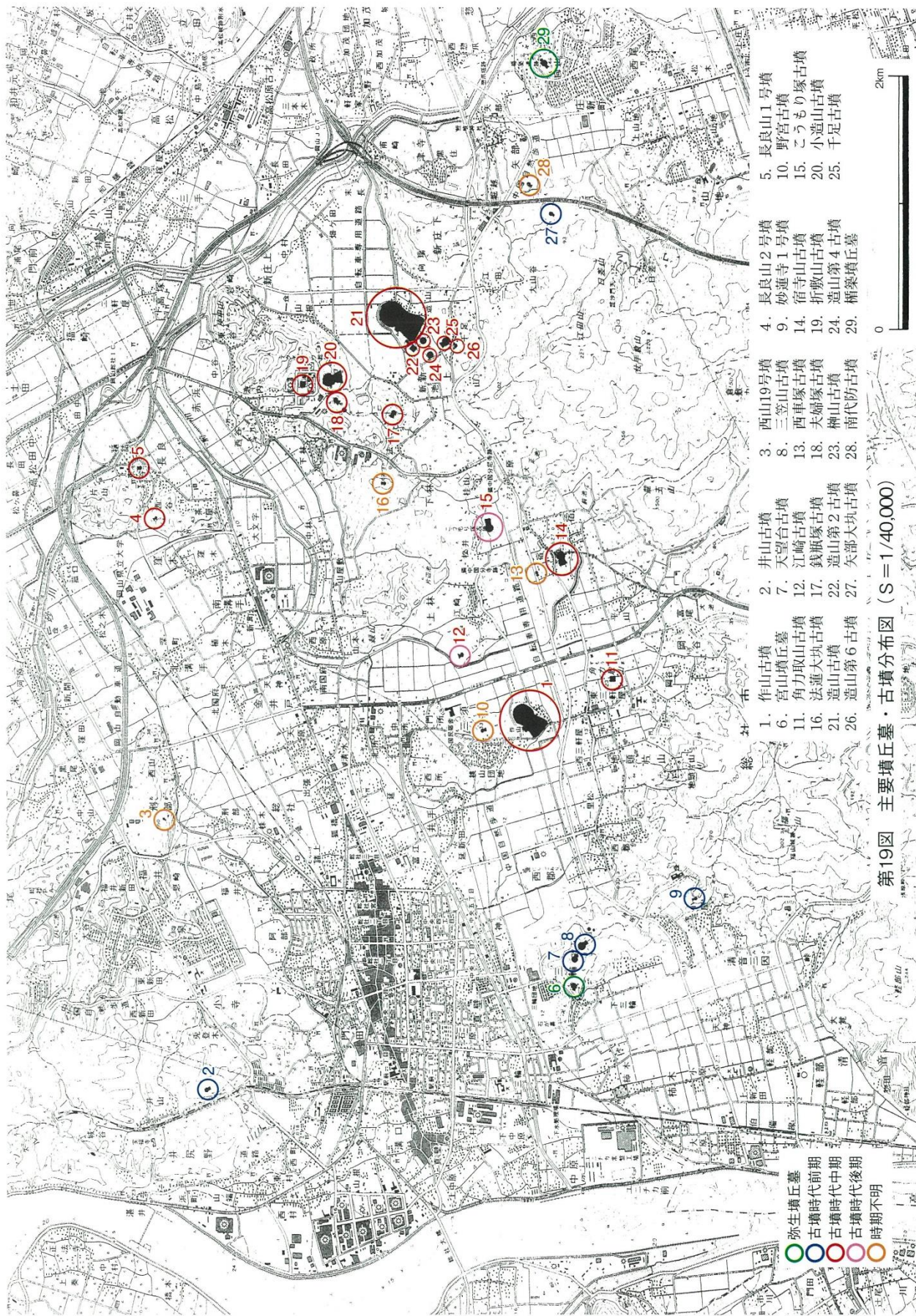
しかし古墳時代前期の首長墳としては、高梁川に近い三輪丘陵上に天望台古墳・三笠山古墳、そこからさらに南に位置する妙蓮寺1号墳、北の井山に築かれた井山古墳、そして足守川に近い矢部大坩古墳などが知られるにすぎない<sup>(註3)</sup>。特に足守川流域にはこの時期の拠点的な大集落が分布するにもかかわらず、足守川西岸付近の前期の首長墳として確実なものは、前述した矢部大坩古墳が知られるのみである。

足守川以東では、足守川に近接した場所に中山茶白山古墳・尾上車山古墳のように、100mを超える前期の大形前方後円墳が築造されており、さらに東の吉井川流域周辺までの地域には、この時期の前方後円（方）墳が数多く築造されている。

また、高梁川以東においても、秦の山塊に前方後方墳である茶臼嶽古墳・一丁坩1号墳、そしてその下方に前方後円墳の秦大坩古墳や、破壊され墳形は不明であるが三角縁神獣鏡が出土した秦上沼古墳がみられる。

しかし、前期の首長墳が多数築かれた上記の地域では、引き継いで5世紀代に系譜がたどれる前方後円墳の築造はほとんどみられない。

5世紀に入ると、高梁川以東から足守川以西の、前期古墳がほとんど存在しないそして大形前期古墳が皆無のこの地域をあえて選択したかのように、突如として全国第4位・県下最大規模の造山古墳が築かれる。これまで指摘されてきたことではあるが、造山古墳の築造と共に、他の地域では前方後円墳の築造が衰微する。その傾向は、造山古墳が築造された時期だけではなく5世紀を通してみられ、造山・作山古墳が所在する地域では、その後も点在する低丘陵を利用して小造山古墳・作山古墳・宿



寺山古墳など大形あるいは巨大な前方後円墳が築かれている。そして周辺にも中小の前方後円墳が多数みられ、まさに5世紀代の首長墳が集中する地域といえる<sup>(註4)</sup>。

前述したように、前期の首長墳が多数存在した地域では、5世紀代の首長墳はほとんど存在しない傾向にあり、大形の前方後円墳は皆無に近い。その他の地域では、5世紀後半に両宮山古墳とその周辺に前方後円墳が集中することや、県西部・県東部にこの時期の前方後円墳が若干存在するにすぎない。

この偏在については、ただ巨大な古墳を築くためだけに、他の地域の古墳が縮小されたり築造されなかったということではなく、別の論理が働いたものと思われる。作山古墳の位置付けを考える上でも、今後の課題としてこれらの首長墳の在り方についてみていきたい。

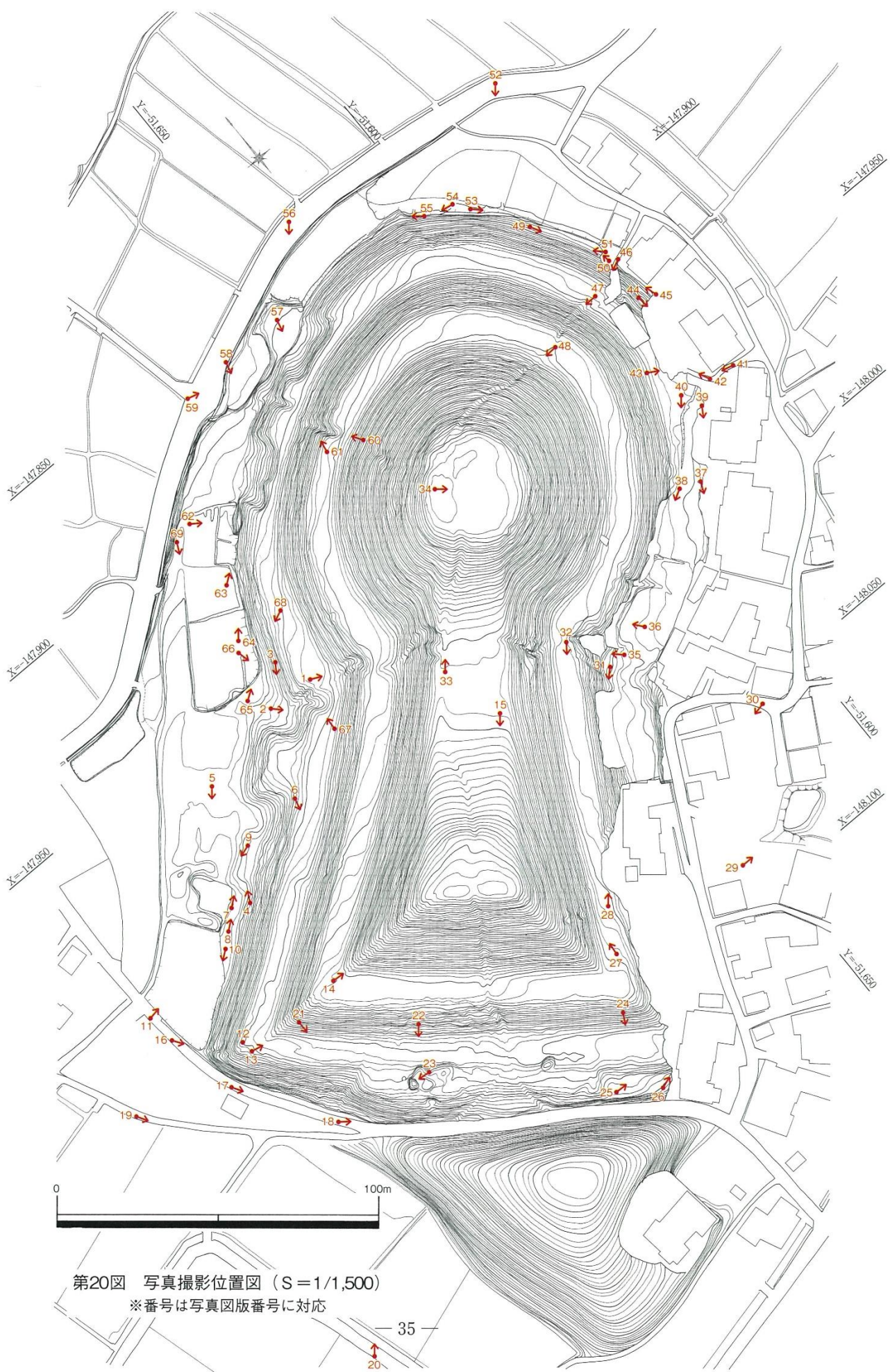
## 註

- (1) 地目図は実際の長さやや異なるが、第1図に照らし合わせてみれば、道や作山段の形状などから、後円部北側の水田とされている箇所が、くびれ部付近の削平部分にあたることや、周堤状の箇所がどの部分かを特定することができる。
- (2) 宿寺山古墳は、盾形の周濠が廻ると想定されているが、北側の周濠が位置する箇所に古い民家が存在することから、畿内のもののように深いものではなく浅かった可能性がある。葛原克人も『山手村史資料編』において「浅い、盾形の周濠」と明記している(葛原2003)。
- (3) 平野部北辺の吉備高原から続く山塊から派生する小尾根上においても、尾崎1号墳やすでに消滅した久米10号墳(前方後方墳)など20~30m程度の小規模な前期の前方後円(方)墳が僅かに築造されているのみである。
- (4) この古墳群の集中を松木武彦は、「造山・作山古墳集団(造山・作山古墳コンプレックス)」として捉えている(松木2001)。

なお、作山古墳から造山古墳までの間の低丘陵が分布する地域には、前期の前方後円墳が全く築かれていないことも興味深い。

## 引用・参考文献

- 宇垣匡雅1992「吉備の中期古墳の動態—使用石材の検討から—」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会
- 宇垣匡雅2005「両宮山古墳」『赤磐市文化財調査報告』第1集
- 宇垣匡雅2002「宿寺山古墳の研究(1)」『環瀬戸内海の考古学—平井勝追悼論文集』古代吉備研究会
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 草原孝典2014「造山古墳の基礎的考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
- 葛原克人2003「宿寺山古墳」『山手村史 資料編』山手村
- 新納泉編2012『岡山市造山古墳群の調査概報 科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書』岡山大学大学院社会文化科学研究科
- 春成秀爾1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会編 福武書店
- 平井典子1999「作山古墳の調査について」『総社市埋蔵文化財調査年報』9
- 平井典子2004「作山古墳現状変更に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13
- 前角和夫1993「付載3. 周辺古墳出土の埴輪について(2) 作山古墳」『折敷山遺跡 雲城山1号墳』総社市埋蔵文化財発掘調査報告10
- 松木武彦2001『吉備地域における「『雄略朝』期」の考古学的研究 科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』



第20図 写真撮影位置図 (S=1/1,500)  
 ※番号は写真図版番号に対応

35  
 20

前方部とその周辺



第1図版 くびれ部付近二段目斜面の道と崩落状況



第2図版 くびれ部付近一段目斜面の道と崩落状況



第3図版 造出し



第4図版 造出しと張出し部



第5図版 前方部北側テラス



第6図版 前方部二段目・三段目



第7図版 張出し部



第8図版 造出しと張出し部と溜池



第9図版 張出し部西側の溜池と土手



第10図版 前方部前端付近と水田跡



第11図版 前方部前端付近の水田跡



第12図版 前方部一段目平坦面の埴輪



第13図版 北西角二段目斜面



第14図版 北西角三段目斜面



第15図版 前方部頂部を望む



第16図版 北西角一段目斜面と前端



第17図版 前方部前端北側と残丘



第18図版 前方部前端と堀切



第19図版 前方部・残丘・トイレ



第20図版 前方部前端 白いポール付近から突出部



第21図版 突出部



第22図版 突出部上の攪乱・岩盤露出状況



第23図版 突出部上の攪乱・岩盤露出状況



第24図版 突出部の南側一段下がり





第25図版 突出部の南側一段下がり



第26図版 前方部南西角の民家裏側掘削状況



第27図版 前方部南側三段目斜面



第28図版 一段目平坦面上の民家裏側掘削状況



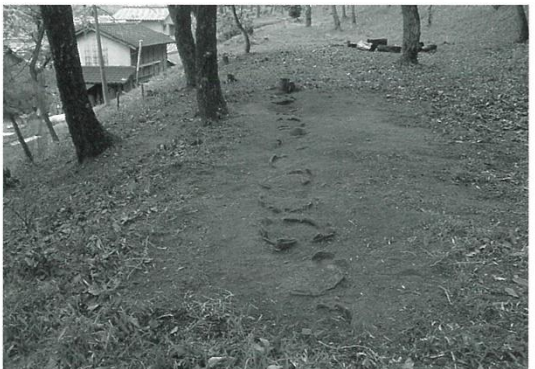
第29図版 かつて培塚とされた残丘



第30図版 南側造出し想定地付近の民家



第31図版 二段目斜面の崩落状況



第32図版 二段目平坦面の埴輪列

後円部とその周辺



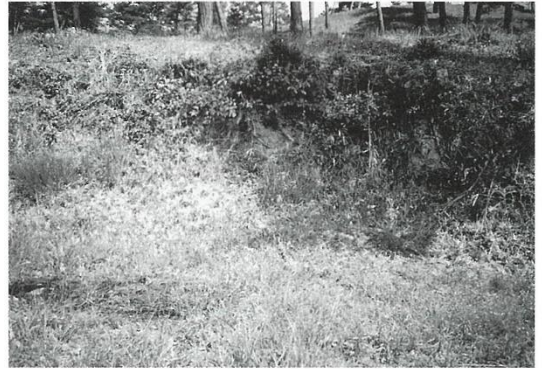
第33図版 西側三段目斜面



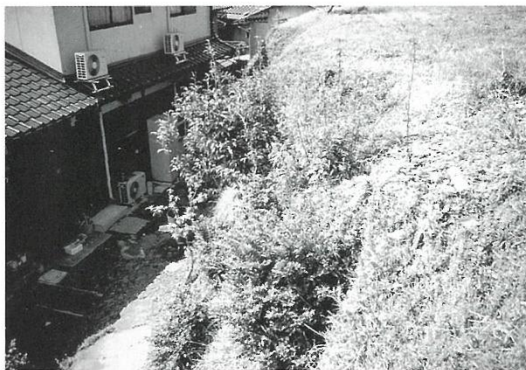
第34図版 後円部頂部



第35図版 くびれ部付近二段目斜面の攪乱



第36図版 くびれ部付近二段目斜面の削平状況



第37図版 民家裏側の掘削状況



第38図版 二段目斜面の削平状況



第39図版 民家裏側の掘削状況



第40図版 一段目平坦面上の溝



第41図版 一段目斜面の削平状況



第42図版 一段目斜面の削平状況と道



第43図版 一段目斜面の道



第44図版 民家裏側の削平状況



第45図版 民家裏側の掘削状況



第46図版 一段目斜面の遊歩道



第47図版 二段目斜面の遊歩道



第48図版 三段目斜面の遊歩道



第49図版 後円部墳端



第50図版 後円部墳端



第51図版 後円部墳端付近の掘削状況



第52図版 作山段と墳丘段築



第53図版 墳端の掘削状況



第54図版 墳端の掘削状況



第55図版 後円部墳端



第56図版 作山段の掘削状況



第57図版 墳端と作山段の掘削状況



第58図版 作山段の掘削状況



第59図版 作山段の掘削状況



第60図版 道周辺の崩落状況



第61図版 二段目以下の道と崩落状況



第62図版 一段目の掘削状況



第63図版 墳端の掘削状況



第64図版 墳端の掘削状況



第65図版 作山段上の水田跡と小溜池



第66図版 作山段上の水田跡



第67図版 くびれ部付近の崩落状況



第68図版 周堤状の畑と前方部テラス



第69図版 周堤状の畑と前方部テラス 一段低い箇所が水田跡



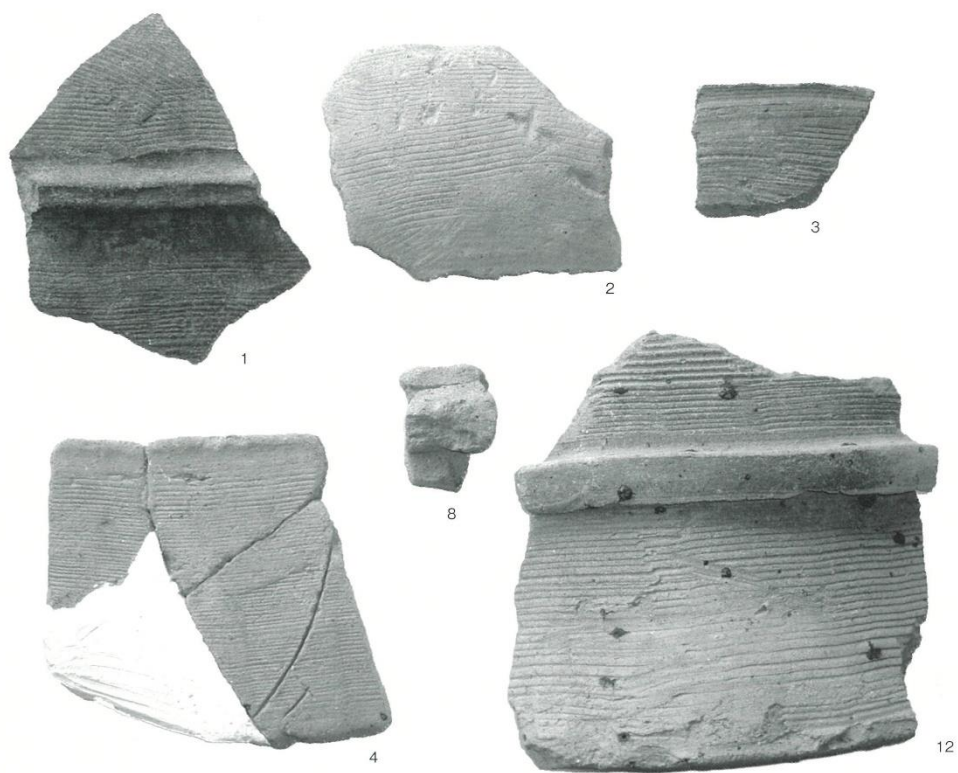
第70図版 作山古墳側面遠景(南東から)



第71図版 後円部遠景(東から)



第72図版 後円部遠景(北東から)



第73図版 寄贈・表面採集埴輪



第74図版 寄贈埴輪：武人埴輪肩鏡片





**附載**

**作山古墳現状変更に伴う立会調査**

# 第1章 調査の経緯

## 1. 調査に至る経緯と経過

国指定史跡作山古墳の後円部南側（方位による説明が煩雑になるため、便宜的に後円部側を東、前方部側を西として記述する）は、作山古墳の一段目を削平して民家が並ぶ。2002年、そのうちの1つ、くびれ部付近に位置する三須259番地の個人住宅において、老人の在宅介護のために風呂場を広くする必要が生じ、併せて周囲の台所・物置等の改築が予定された。そして、宅地背後の切断面が崩落するおそれがあることから、擁壁も構築したいとの申し入れがあった。

申請地は、作山古墳の一段目平坦面の端部（高さ1.5～2.5m）をカットして、家屋が建設されている。そのため敷地部分は墳丘が大きく削平され、作山古墳に関連する遺構はすべて消失しているものと思われた。一段目平坦面縁辺に存在したであろう埴輪列も、地形図でみるかぎり消滅している可能性が高いと予測された。

また、改築箇所においても基礎の掘削はほとんどないことから、仮に何らかの遺構が残存していたとしても遺構への影響は少ないものと考えられ、工事立会で対応することとした。

現状変更許可申請が提出され、許可後の2002年11月11日から工事が実施された。建物除去後、切断面の土層の検討を行ないつつ、重機による建物のコンクリート床面除去作業に立ち会っていたところ、コンクリートの下から埴輪列が出現した。

急遽、埴輪列を保存すべく、基礎の位置等について計画変更を申し入れたが、埴輪列を避けて建物の北端を南に寄せると大幅に建築面積を狭くすることになり、既に建築部材の発注がなされていたこともあって、設計変更は不可能と考えられた。また設計変更を行っても、周囲の状況から良好な状態での保存は困難と思われた。他に方策もないことから、やむなく記録保存を行なって埴輪を取り上げることとなった。

切断面および埴輪列の記録保存後、断面に露出していた埴輪や埴輪列の埴輪を取り上げ、2002年11月15日に調査が終了した。直後に工事が入り、2003年3月31日に工事は完了した。

## 2. 調査の体制

遺構の残存している可能性は低いとはいえ、慎重に立会する必要があったことや、老人介護のための改築で竣工を急がれていたことから、迅速に記録を取る必要があったため、調査は平井典子と高橋進一の2名で対応した。また、調査作業員小野良介・長岡和美の協力を得た。

整理作業は、埴輪の実測・トレースを平井が、遺構のトレースを高橋が行い、埴輪の復元・拓本は両者で分担した。

なお、調査および整理を通して、(故)葛原克人・村上幸雄の両氏にはご指導・ご教示を賜った。また、宇垣匡雅・草原孝典・新納泉の各氏には整理を通してご教示を賜った。記して感謝の意を表します。

## 組織

教育長	桑田 交三		
教育次長	丸山 光男	主 事	笹田 健一
文化課長	加藤 信二	臨時職員	福田有美子
文化財係長	谷山 雅彦 (調整担当)		
主 査	平井 典子 (調査担当)	(埋葬文化財学習の館)	
主 査	武田 恭彰 (調査担当)	館 長	村上 幸雄
主 任	前角 和夫 (調査担当)	臨時職員	近藤 雅子
主 事	高橋 進一 (調査担当)	臨時職員	田中 富子
主 事	松尾 洋平 (調査担当)		

## 第2章 調査の概要

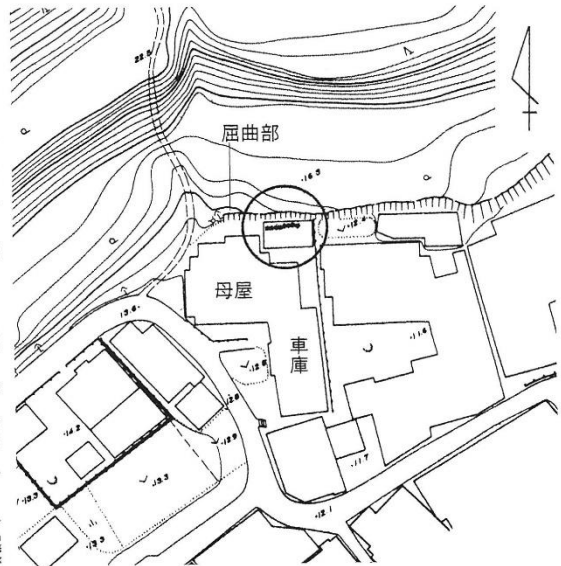
### 1. 調査の概要

建物のコンクリート床面下から埴輪が出土したことにより、周辺を精査した。埴輪は基底部分が列をなして直線的に並んでおり、抜き取り痕を含む12基分が確認された。建物の基礎部分から外は若干低くなっており、埴輪列の続きは確認できなかったことから、建物の内部に位置した埴輪のみがコンクリートによって保護されていたようである。

埴輪列は、一段目平坦面より下部に位置すること、また、改築箇所や母屋部分が立地する敷地面と車庫の立地する南側には大きな段差が存在すること、車庫の立地するレベルが前方部墳端と推定されるレベルよりかなり下がっていることから、概要報告(平井2004)では、埴輪列は墳端に据えられたもので、この敷地面が後円部を取り巻く作山段につながる可能性を指摘した。



第1図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第2図 埴輪列出土地点とその周辺



第1図版 一段目平坦面と敷地（西から）  
家の左側が一段目平坦面



第2図版 敷地面と南側の段差（西から）  
南側は大きく下がり石垣が築かれている



第3図版 敷地面と南側の段差（南から）  
道の突き当たりが前方部一段目

しかし、作山段は周堤の一部を削平して周濠を埋めたものとする新納泉から、埴輪列の位置やレベルなどについて疑義が呈され（新納2012）、張出し部の存在する可能性も口頭で指摘された。その後、作山古墳の測量が終了し検討した結果、埴輪列は平面的には一段目斜面内に位置する可能性が高く、何らかの付帯施設が存在したことが明らかになった。

また、切断面の土層観察から、部分的にはかなりの盛土が行われていたことも判明した。

## 2. 遺構と遺物

### (1) 墳丘切断面

住居の裏側は墳丘を切断した崖になっており、擁壁を構築する予定となっていたため、表面の流土を除去して断面観察を行った。

崖線は敷地の西端付近でやや「く」の字状に屈曲している。屈曲部から西は地山の上に風化した花崗岩のバイラント土が部分的に堆積し、その上層は流土となるが、屈曲部付近から東は盛土が確認できた。

屈曲部の東では旧表土と考えられる暗黒褐色土層（24層）が存在し、崖線中央付近ではその旧表土面から垂直方向に80cm程度切り込んで、そこから東を平坦に成形している。成形時期は作山古墳築造以前の可能性もあったが、成形部分の土層の状況や、断面及び周囲からより古い遺物が出土していないことなどからみて、作山古墳築造に伴うものと考えた。埴輪列に近い位置に切り込みがあるが、付帯施設に伴うものであるなら一段目平坦面が大きくカットされるので、その可能性はないと思われる。

成形部分は、23層がほぼ平らに積まれているが、その上層は切り込み部から順に22層、21層と積んで上面を平坦にし、その後

は切り込み面に沿うように20層まで盛り、これらの層の上に19層が積まれている。その上層も、旧表土上面レベルまで、切り込み面に対応するように斜めに土を盛っている。また東端に近い箇所でも、地山成り面と同様に斜めに切り込んで6層や13層を積んでいる。このような盛土の状況を見ると、旧表土から地山面への切り込みが、盛土をする上で何らかの意味があったものと思われるが、部分的な観察なので詳細は不明である。なお盛土については、総じて細かく突き固められた状況は認められなかった。

作山古墳は、独立丘陵を削り出して築造しているため、盛土は少ないものと考えていたが、今回の調査により部分的には相当量の盛土がなされていたことが明らかとなった。

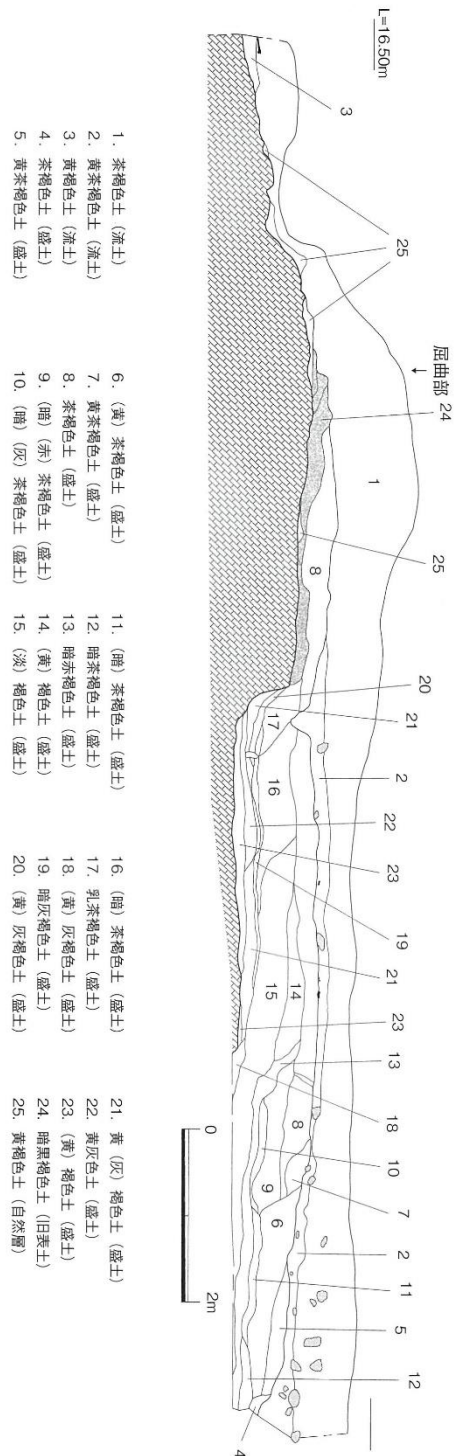
## (2) 埴輪列

埴輪列は、除去された建物の基礎北辺の内側に一部接して確認された。基礎西辺の外側は一段低くなっておりすでに埴輪は消失していたことから、基礎の内側にあったため遺存していたことが明らかになった。また、当該地は、家屋によって墳丘が大きく削平されていると考えていたが、この敷地面が当時の形状を留めていたことも判明した。

遺存した埴輪列には、抜き取り痕も含め少なくとも12基の埴輪が並んでいたものと想定されるが、埴輪自体は9基が確認された。残存する埴輪から番号を付し、中心付近の抜き取り痕にも便宜的に連番を付した。各埴輪は10cm以下の間隔で据えられており、口縁部付近はほぼ接触するような状況にあったと考えられる。

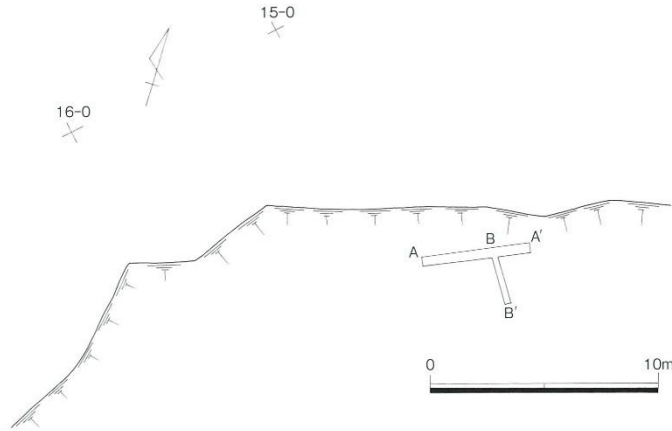
検出面の平面観察によると、埴輪の周囲には円形に土質・色調の違いがみられ(第6図、巻頭図版2)、埴輪を据える際に溝を掘って立て並べたのではなく、それぞれに穴を掘り据えたものと想定された。切り合いを観察するために、まず1基置きに埴輪間と南側へ方形のサブトレンチを設けて精査し、次いで埴輪の中心から南をすべて掘り抜

第3図 調査区北壁墳丘断面土層図 (S=1/80)



き観察した。埴輪間が狭く埋土も10cm程度と浅かったため、切り合いは不明瞭であったが若干の違いが認められた(第6図)。また、平面での埴輪周囲の土質や色調の違いと、埴輪基底部のレベルが一定していないことから、布掘りではなく1基ごとに穴を掘り設置したことが首肯できるものと考えられる。埴輪10は並びがややずれており、基底部を欠くことから、後に据え直した可能性が高い。

この埴輪列は、前述したように、調査当初は作山段上の墳端に据えられたものと考えていた。その根拠は、埴輪列が検出された敷地面とその南側の車庫部分では大きな段差があり、車庫部分のレベルは前方部の墳端レベルと比べても1m以上も低くなることから、敷地面を作山段の上面とし、墳端がのると考えたことによる。なお、埴輪列を墳端とした場合、北側の墳端より1m程度高くなるが、立会調査の段階では、作山古墳の特異な形状からこの程度のレベル差は問題にならないと考えていた。

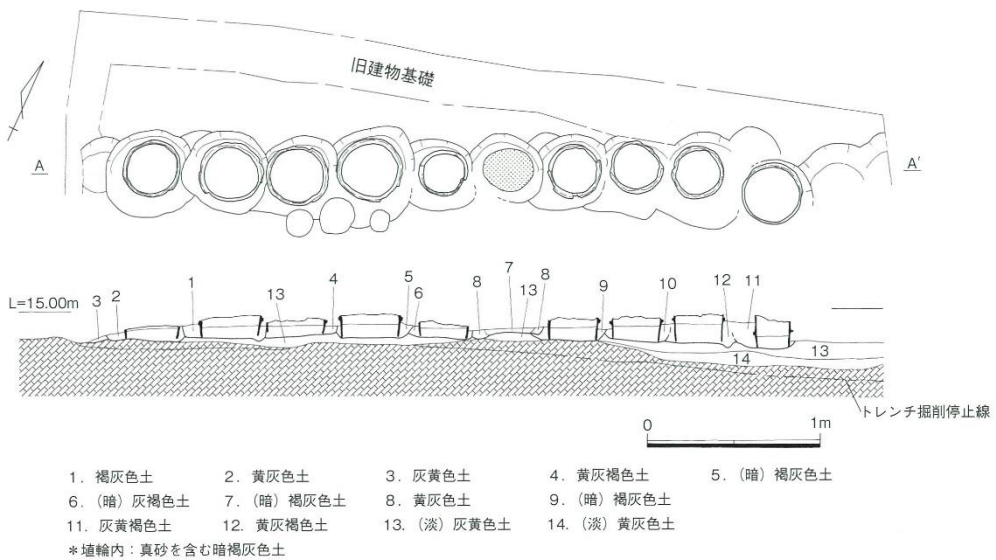


第4図 調査区とサブトレンチ位置図 (S=1/300)



1. 暗茶褐色土(現代の攪乱) 2. 黄灰褐色土(近世以降の攪乱) 3. 灰黄褐色土(近世以降の攪乱)

第5図 南北サブトレンチ西壁土層図 (S=1/60)



- |             |             |              |              |             |
|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 褐灰色土     | 2. 黄灰色土     | 3. 灰黄色土      | 4. 黄灰褐色土     | 5. (暗) 褐灰色土 |
| 6. (暗) 灰褐色土 | 7. (暗) 褐灰色土 | 8. 黄灰色土      | 9. (暗) 褐灰色土  |             |
| 11. 灰黄褐色土   | 12. 黄灰褐色土   | 13. (淡) 灰黄色土 | 14. (淡) 黄灰色土 |             |

\*埴輪内: 真砂を含む暗褐灰色土

第6図 円筒埴輪出土状況平・断面図 (S=1/40)

しかし、測量図が完成し検討した結果、埴輪列は一段目斜面に位置する可能性が高いことが判明した。歪にはなるが、後円部南側の最下段がくびれ部付近で内側に入り、埴輪列が墳端に位置することも想定した。しかし作山古墳は、他の巨大古墳とは異なる点が諸所にみられるが、完成した測量図をみると、遺存状況の良好な部位は中軸線を中心に対称形となる箇所が多く、精美に築かれている。このことから、くびれ部付近の後円部南側最下段のみが著しく内側に入り、北側の形状と大きく異なって非対称になるとは考えにくい。現時点では、新納氏が指摘したように何らかの付帯施設が築かれ、そこに埴輪を据えて祭祀を行ったとみるのが妥当と考えている。

なお、墳丘が左右対称と考え、この埴輪列を北側の部位に合わせると、一段目平坦面の上面に近い16m前後のレベル付近に位置する。もう少しレベルが低い箇所にも位置したとしても、埴輪列検出レベルが14.8m前後なので、斜面をカットすることになる。そうであるならばどのような形状の付帯施設になるのか、類例がないため想定することは困難である。

### (3) 出土遺物

検出された遺物は、1点の須恵器の他は、埴輪列の円筒埴輪をはじめ切断面や周辺から出土した多数の埴輪である。ほとんどが円筒埴輪で、若干の朝顔形埴輪と形象埴輪を含む。

1～10は埴輪列出土のものである。6番目の埴輪は、抜き取られていたが、それ以外のものは基底部の全周が残存する。

1は、基底部最大径約33cmで、底面から約8cmより上位は欠失しており、タガは残存していない。器面が荒れ外面の調整は不明瞭であるが、一部にタテハケらしき痕跡が認められる。内面はナナメ方向に稜がみられ、ナデが施されたものと考えられる。底面には圧痕が残る。断面の中心付近のみ黒化がみられる。

2は、1段目タガの上部まで残存しており、基底部最大径32cmを測る。内・外面共に表面が剥落しており調整は不明瞭であるが、最下段外面にはタテやナナメ方向の平坦な面が認められ、タテハケの工具痕跡かと考えられる。底から最下段のタガまでの高さは9cm前後を測り、タガはヨコナデを施しているものと考えられるが、下端には僅かに押圧が認められる。内面には若干の凹凸がみられ、ナナメ・ヨコ方向のナデが施されている。底面には圧痕が残る。断面は中心部分のみやや黒化している。

3は、最下段のタガ上方まで残存し、基底部最大径33cmを測る。外面は器面が荒れ調整は不明瞭な箇所が多いが、最下段はやや粗いタテハケで、一部に横方向のナデらしきものもみられるが、明瞭なヨコハケの痕跡は認められない。タガは扁平で幅が広く、下端には押圧痕跡が残る。底面からタガまでの高さは9cm前後である。内面は工具によるナナメ・ヨコ方向のナデが施され、粘土帯の接合痕跡も認められる。断面の中心部は黒化している。

4は、基底部最大径33cmで、1段目タガの上部まで遺存している。外面はやや粗いタテハケで、2次調整のヨコハケを省略し、基底部付近にのみヨコ方向のナデを施す。また、底面及び底部付近の外面には押圧痕跡が認められる。タガは扁平で広く、下端に押圧が廻る。底からの高さは9cm弱である。内面にはナナメ方向のナデがみられる。断面は僅かに黒化する。

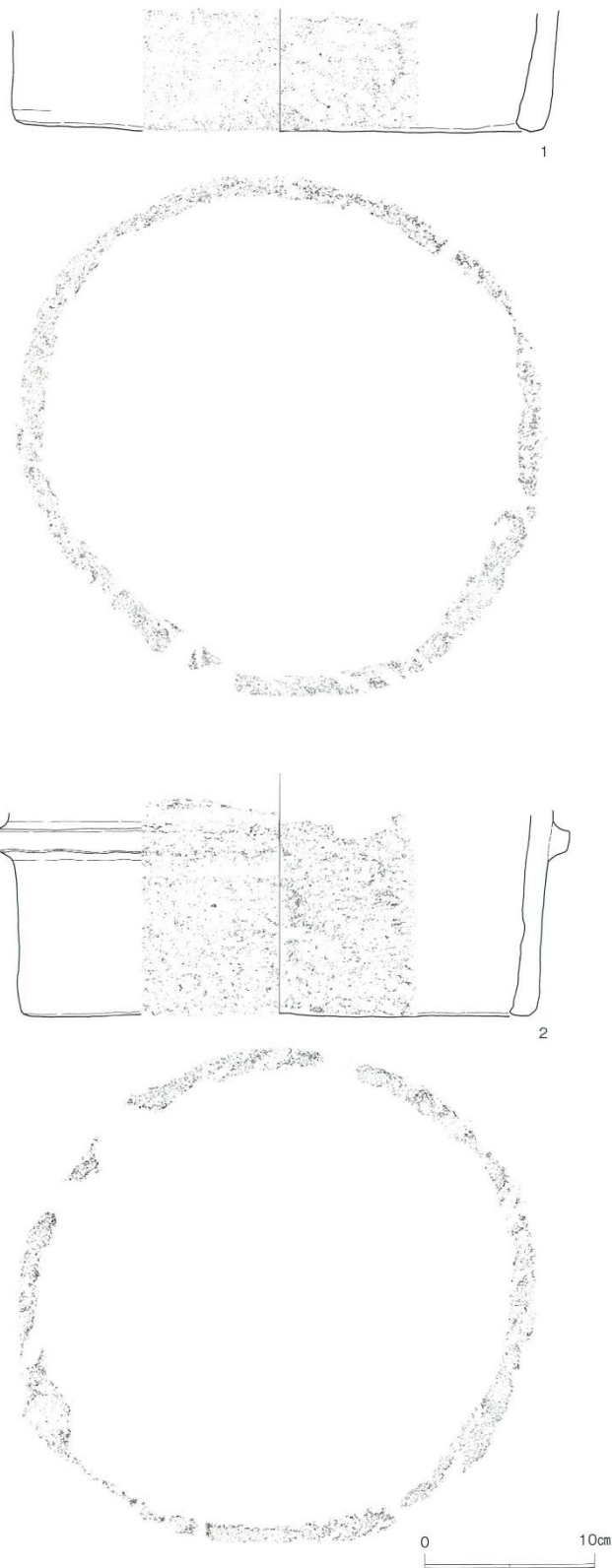
5は、基底部最大径約26cm、最下段タガ上部まで残存し、タガは低く幅広い台形を呈する。タガ下端には若干の押圧がみられる。なお、タガは若干ナナメに上がっていき、底面からの高さは9～10cmを測る。外面はタテハケ後B種ヨコハケを施す。内面はナナメ方向のナデと底部付近の一部にヨコ方向のナデが認められる。その後タテハケを主としてナナメハケが施されるが、全面には及ばない。底

面には圧痕がみられ、圧痕の中にはハケ状の工具痕もみられる。

7は、基底部最大径28.7cmを測り、1段目タガの上方まで遺存する。タガは台形を呈し、ヨコナデで仕上げている。外面はタテハケ後、幅6.5cm前後の工具でB種ヨコハケを施しており、底面から2～2.5cm付近に工具の痕跡が横方向に強く残る。内面はタテ・ナナメ方向のナデ後、タテハケを施すが全面には及ばない。約3cm幅の粘土帯の接合痕跡も看取できる。底面にはハケ状の工具痕を含む圧痕がみられる。また推定復元径約7cm程度の円形の透し孔も残存する。タガの突出度や調整は異なるが、内外面や底面の調整などは5に類似する。

8は、基底部最大径28cmを計り、最下段タガ上方まで残存する。外面は、粗いタテハケ後幅8cmを超える工具によってB種ヨコハケを施している。タガは底面からの高さが9cm前後で、下端には押圧が廻る。内面は、底部付近をヨコ方向にナデた後、残存最上部からナナメ方向のナデを施している。底面には圧痕が認められる。また2段目には円形の透し孔が残存し、推定径約7cmを測る。

9は、基底部最大径25cmで、最下段のタガ上方まで残存する。外面は粗いタテハケ後粗いヨコハケを施している。表面が剥落した箇所が多く、B種ヨコハケと思われる工具の止め痕跡は認められなかった。タガは低く幅広で、底からの高さは9～10cm弱である。タガ下端の押圧はみられない。内面は調整が不明瞭であるが、一部に粗いタテハケが残存する他、オサエやナデらし



第7図 埴輪列出土埴輪1 (S=1/4)



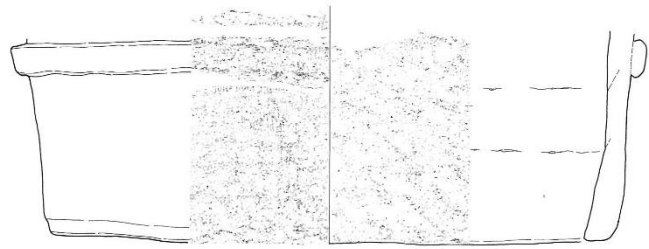
き痕跡も認められる。底面には圧痕が僅かに残る。

10は、基底部分がなく、筒部最大径は33.5cmを測る。タガは2段残存するが、下段のタガもその形状から最下段のタガではないと考えられる。外面は表面が剥落し、調整不明瞭であるが、一部にタテハケとヨコハケらしき痕跡が見受けられる。内面の調整も不明瞭であるが、一部にタテハケが認められる。なお、粘土帯の接合痕跡が約3cm幅で確認できる。断面は黒化しており、器壁は他の埴輪列の埴輪と比べ薄い。

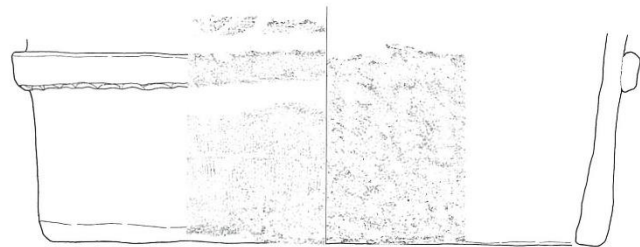
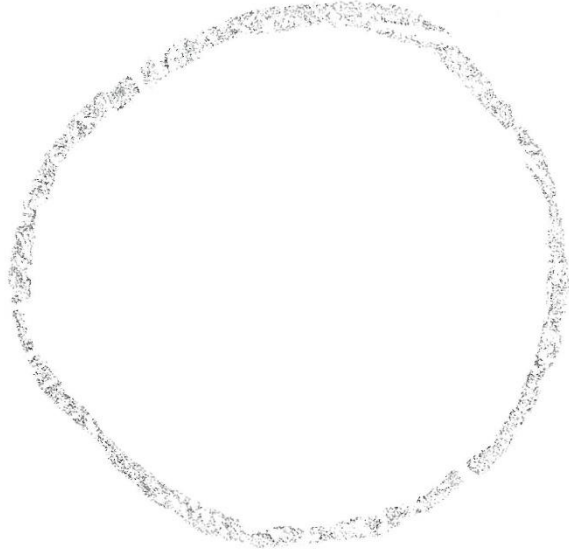
その他の埴輪片は、18が切断面の流土中から出土した以外は、すべて埴輪列周辺の流土除去中と、くびれ部付近から東の敷地内で採集されたものである。

11～15は朝顔形埴輪の破片である。11～13が口縁部、14が口縁部下端付近の破片、15が肩部から筒部付近の破片である。11、13は表面が剥落し調整は不明である。12はかなり硬質で、外面はタテハケ後口縁端部をヨコナデしており、表面には褐灰色の顔料を塗布している。15の外面筒部はタテハケ後ヨコハケを施している。外面には灰赤色の顔料が施されている。

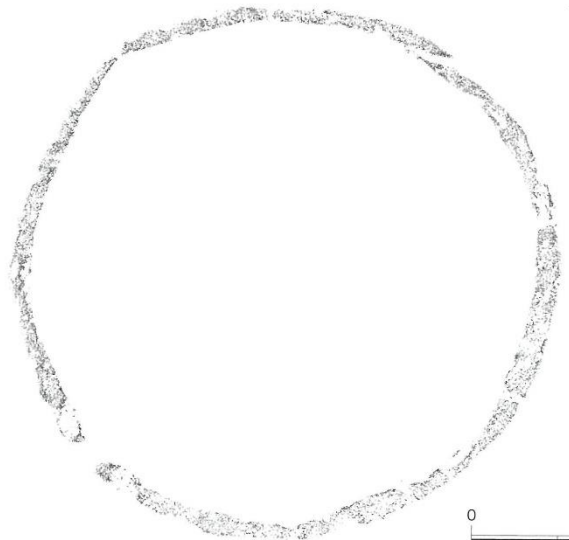
16～30は円筒埴輪の口縁部である。外面の調整は、16がタテハケ後ナデ、17が表面剥落のため調整は不明である。21・25・26・28～30についてはタテハケの痕跡が残されていなかったが、他の破



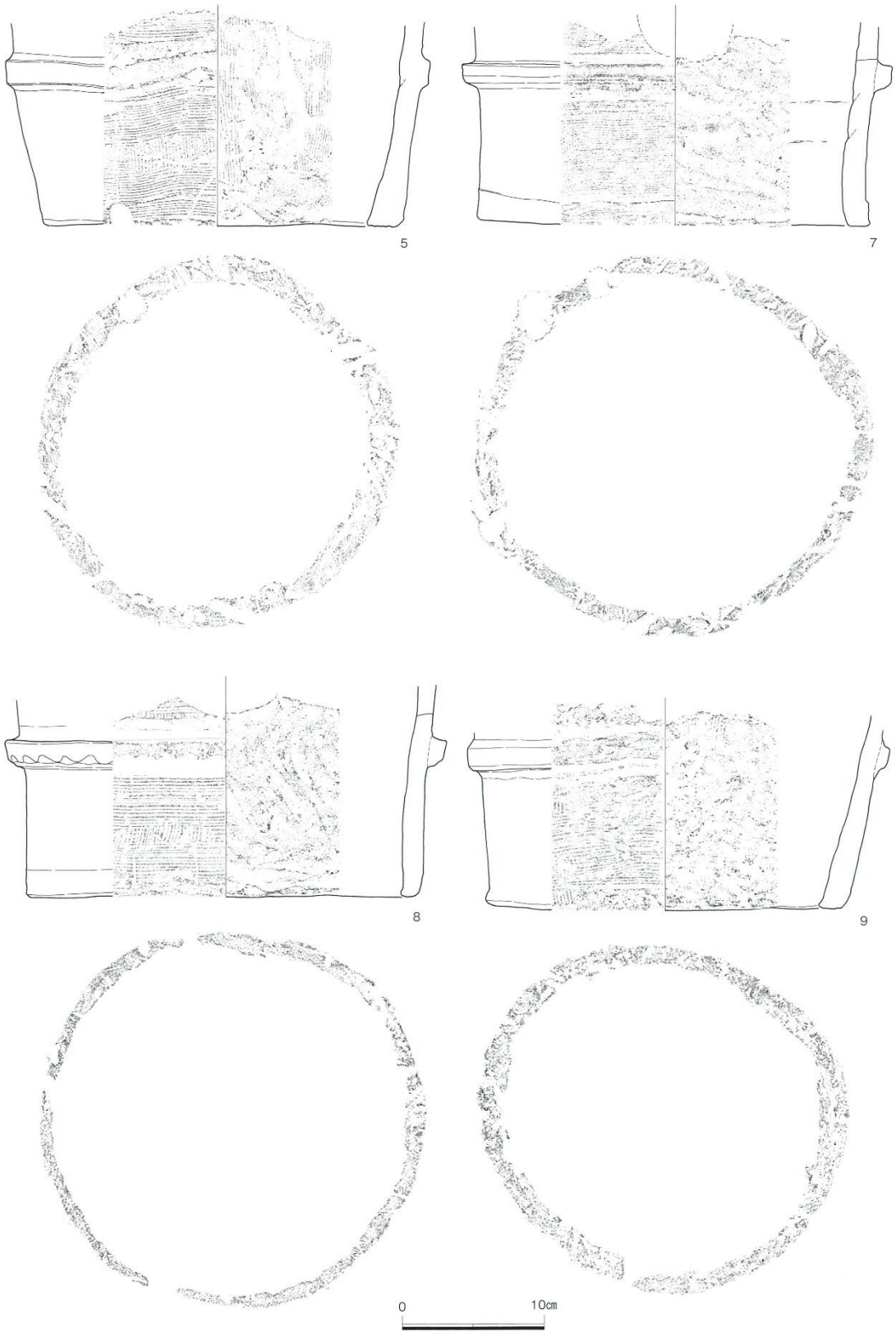
3



4



第8図 埴輪列出土埴輪2 (S=1/4)



第9図 埴輪列出土埴輪3 (S=1/4)

片ではヨコハケ前のタテハケを確認している。ハケメについては18と23が細かいが、他はすべて粗い。18～20・22はB種ヨコハケが確認できた。内面は、タテハケのみ、オサエ・ナデ+タテハケ、タテハケ後ヨコハケ、ヨコハケのみと多様であり、20はB種ヨコハケ状の工具の止め痕跡が認められる。19・20・24・25はかなり硬質である。

31～66は円筒埴輪である。31は弧文とそれに直交する直線文が、32は弧文が線刻されている。外面は、表面の荒れや剥落で調整が不明なもの以外はヨコハケを施しており、一次調整のタテ

ハケが確認できるものもある。ヨコハケは総じて粗いが、37や61のように非常に細かいものもみられる。タガは、突出度の高低や、形状の違いなどバラエティに富む。65・66はタガの下端に押圧痕がみられることから最下段のタガと考えられる。

なお、33・35・41・55・56はかなり硬質で須恵質に近く、55・56以外は表面に顔料を塗布している。また、40・45は色調が白く、他の埴輪と比べ異質である。48も表面が剥落した箇所は赤っぽい橙色で他とは異なる。

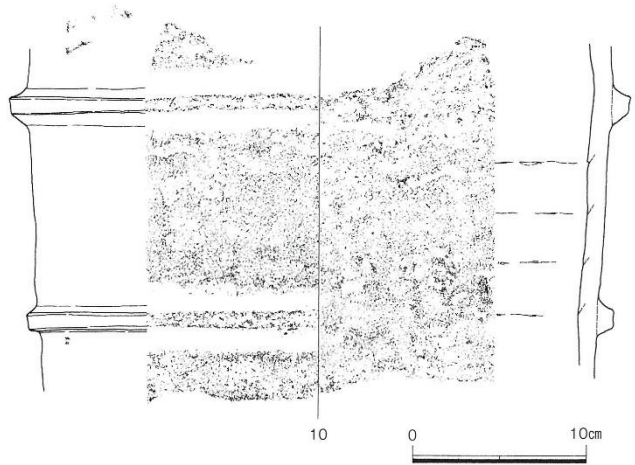
67は基底部の破片である。

68～70は蓋形埴輪の破片と思われるもので、68はタガが残存しており、内面には接合痕がみられる。69は、タガの下端付近の破片と考えられる。70はタガ接合部で剥がれており、接合面及び傘部にはヨコハケがみられる。タガ下端付近には工具による強いヨコナデが認められる。内面は、タテハケ後接合部に粘土を貼りつけた後工具によるナデを施しており、一部ヘラケズリ状に砂粒の移動がみられる。

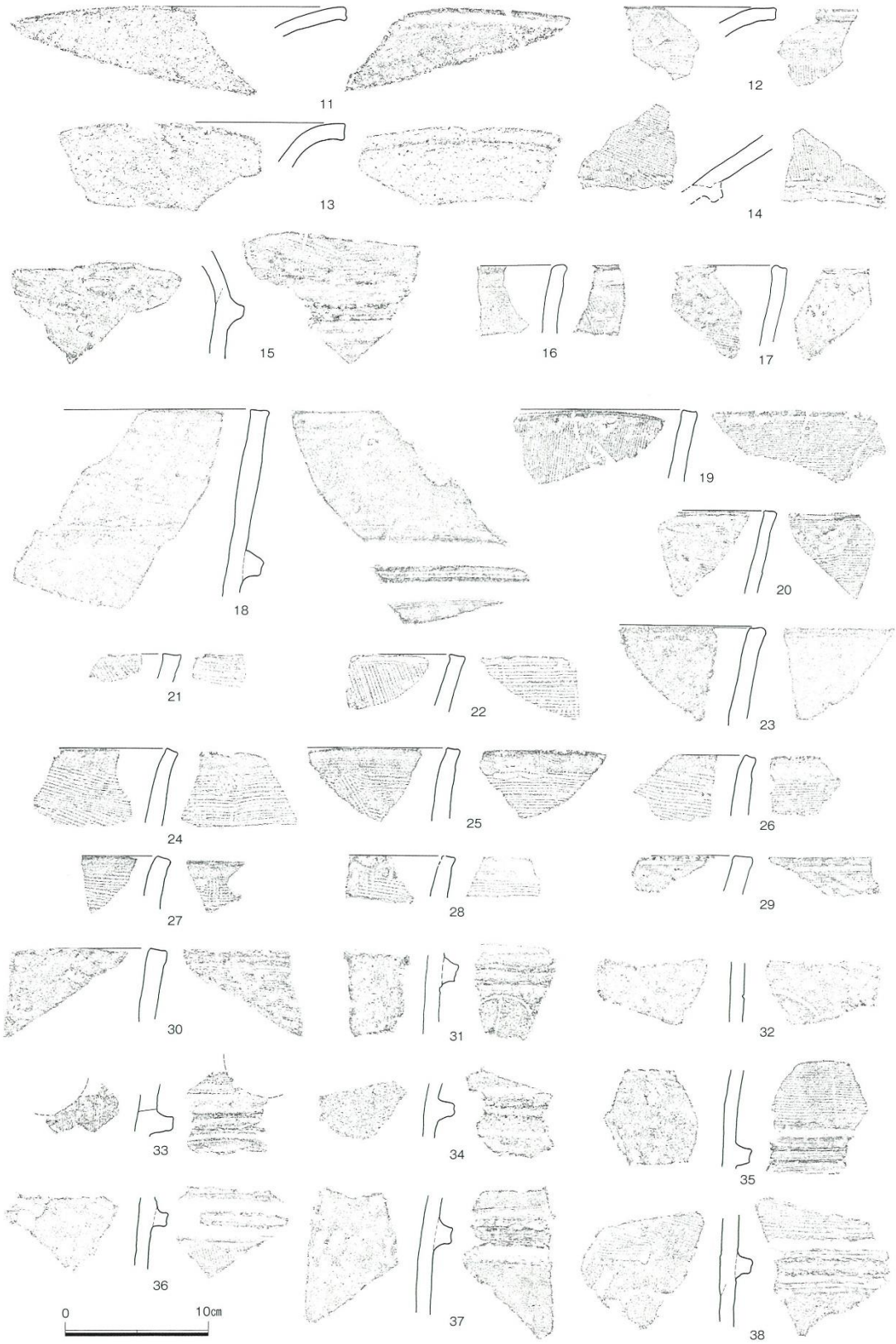
71は透かし孔が内側に向けて斜めに切られており、円筒埴輪とは異なることから、何らかの形象埴輪と考えられる。また、一部突起のような箇所があり、これはその内面にある茶褐色粒に影響されたものかもしれないが、小さな円形に膨らんでいる。天地は不明であるが、外面はハケメを施し、スリップあるいは顔料の塗布によるものか明るい橙色を呈する。72も不明形象埴輪で、本体から派生したと考えられる部分が、次第に薄くなっていくが、図面の下側の方が僅かに作りが粗雑に感じられたため、このような天地にした。

その他、脚付の須恵器片が1点出土しているが、小片で器種や器形は明らかでない。埴輪などに比べ表面や割れ口の摩耗は著しく、作山古墳に伴うかどうか不明である。

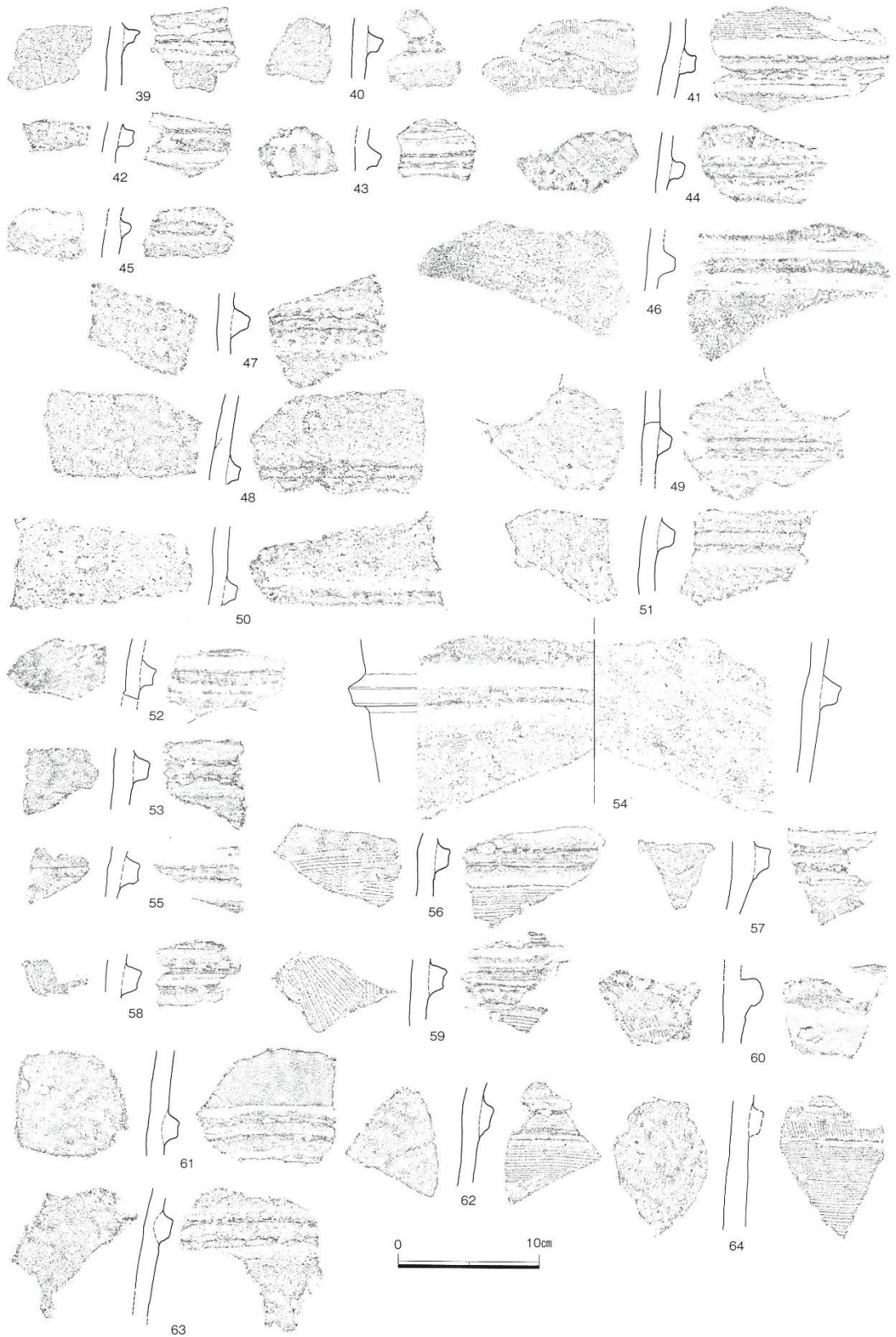
作山古墳の埴輪は、軟質で断面が黒化したものから硬質で須恵質に近いもの、タガの突出度が高いものから非常に低いもの、最下段のタガ下端に押圧のないものと押圧されたもの、最下段の外面に二次調整を施すものと一次調整のみのもなど、バラエティーに富む。古い様相と新しい様相がみられる程度の時間幅をもつものであるが、概ね川西編年（川西1978）のIV期の範疇で捉えられるものと考えられる。



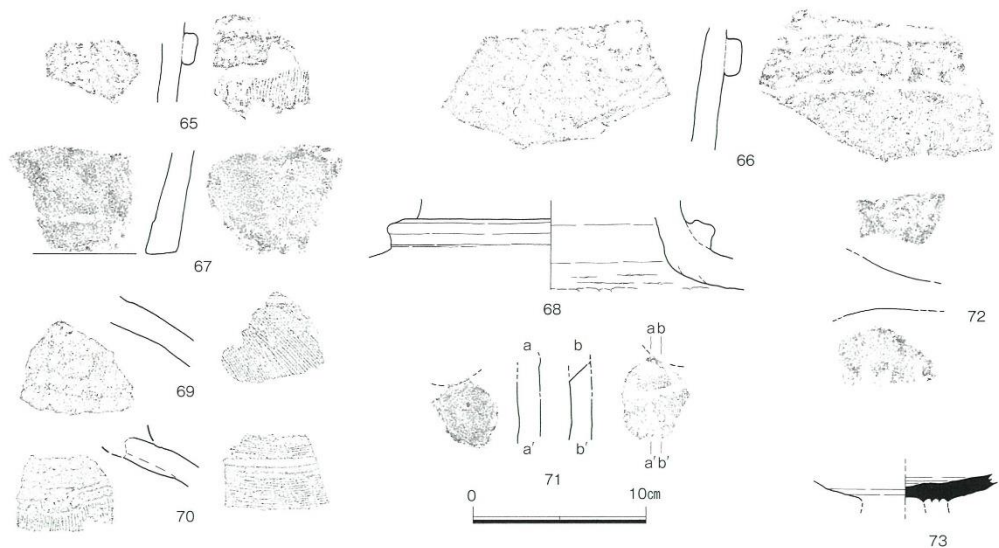
第10図 埴輪列出土埴輪4 (S=1/4)



第11図 調査区内出土遺物 1 (S=1/4)



第12図 調査区内出土遺物2 (S=1/4)



第13図 調査区内出土遺物3 (S=1/4)

### 3. 結語

今回の調査によって、一段目平坦面からカットされて墳丘は大きく削平されているものと考えられた当該敷地面は、築造時のまま残存していたことが明らかになった。

また、検出された埴輪列から、作山古墳に伴う何らかの付帯施設が築かれていたことも判明した。この民家の敷地は、付帯施設の上面にあたるものと考えられ、そこから一段下がった南側車庫付近に、付帯施設の下端があるものと想定されるが、埴輪列が一段目斜面の高い位置にあると考えられるため、一段目斜面が大きくカットされていた可能性が高い。このようなあり方を、他の大形古墳・巨大古墳に求めることができないため、付帯施設の形状を想定することはできなかった。

東隣の民家から東は大きく削平されて敷地が造成されており、調査地とは3m以上も低くなっている。そのため墳端および作山段は消滅していると考えられるが、地形図や周辺のレベルからみて、敷地南側の道路付近が作山段の裾付近にあたる可能性も残る。

なお、今回出土した埴輪列は、何らかの付帯施設に据えられたものと考えられることから、長大な作山古墳の埴輪がすべて1基ずつ穴を掘り据えたのではなく、この箇所にもみこういった工法が行なわれた可能性も考えられる。

### 引用・参考文献

- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会  
 新納泉編2012「岡山市造山古墳群の調査概報－科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書」岡山大学大学院社会文化科学研究科  
 平井典子2004「作山古墳現状変更に伴う立会調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』13

出土遺物観察表

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
1	円筒 埴輪	外：調整不明、タテハケか？ 内：ナナメ方向のナデ、凹凸目立つ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙) 断：10YR5/1 (褐灰)	3mm以下の長石石英粒僅～少 8mm以下の茶・茶褐・黒褐色粒 やや多 (3mm以上目立つ、2mm 以下も多)	やや軟質 断面中心付近のみ黒化
2	円筒 埴輪	外：調整不明瞭、タテハケか タガ下端僅かに押圧 内：調整不明、凹凸若干残存、ナデか	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：7.5YR8/4 (浅黄橙) 断：10YR6/1 (褐灰)	4mm以下の石英長石粒少 (1mm以下主) 6mm以下の茶褐・黒褐色粒中 (3～5mm目立つ)	やや軟質 断面中心付近のみ黒化
3	円筒 埴輪	外：タテハケ、2次調整省略か？ タガ下端押圧 内：ナナメ・ヨコ方向のナデ、接合痕跡残 存	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：7.5YR8/4 (浅黄橙) 断：10YR5/1 (褐灰)	4mm以下の石英・長石粒少 (1mm前後が目立つ) 6mm以下の茶・黒褐色粒少～中 (2～4mm前後目立つ)	やや軟質 断面黒化
4	円筒 埴輪	外：粗いタテハケ後底部付近ヨコ方向のナ デ、2次調整省略、タガ下端押圧 内：ナナメ方向のナデ	外：7.5YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙)	4mm以下の石英・長石粒少 (1mm以下主) 5mm以下の茶・黒褐色粒少～中 (2～3mm前後目立つ)	やや軟質 断面中心付近やや暗色
5	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケ (B種) タガ下端若干押圧 内：ナデ後タテハケ・ナナメハケ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/3 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 6mm以下の黒褐色粒少～中 (2mm以下主)	やや硬質 断面暗色
6	—	—	—	—	抜き取り痕のみで埴輪はない が、埴輪列の番号に合わせ ている
7	円筒 埴輪	外：タテハケ後B種ヨコハケ タガヨコナデ 内：タテ・ナナメ方向のナデ後タテハケ	外：10YR7/3 (にぶい黄橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙) 断：5 YR6/6 (橙)	5mm以下の長石・石英粒中 (2mm以下主) 7mm以下の黒褐色粒中 (2mm以下主)	やや硬質 透し孔あり 3cm幅の接合痕
8	円筒 埴輪	外：粗いタテハケ後粗いヨコハケ (B種) タガ下端押圧 内：底部付近横方向のナデ後、残存最上部 からナナメ方向のナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙) 断：10YR5/1 (褐灰)	3mm以下の石英・長石粒やや多 (1mm以下主) 5mm以下の黒・茶褐色粒少～中 (2～3mm前後目立つ)	やや硬質 透し孔あり 断面やや暗色
9	円筒 埴輪	外：粗いタテハケ後粗いヨコハケ タガヨコナデか 内：表面剥落、調整不明瞭、一部にタテハ ケ残存	外：7.5YR7/6 (橙) 内：7.5YR7/4 (にぶい橙)	7mm以下の石英・長石粒少～中 (1mm以下主) 9mm以下の茶・黒褐色粒少～中 (2～5mm目立つ)	やや軟質
10	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケか？ 内：タテハケ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙) 断：10YR5/1 (褐灰)	7mm以下の石英・長石粒少～中 (2mm以上が多い)	やや軟質 約3cm幅の粘土帯接合 痕あり 断面黒化
11	朝顔形 埴輪	外：調整不明瞭、口縁部付近ヨコナデ 内：調整不明	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	5mm以下の長石・石英粒中 (2～5mm目立つ) 茶褐色粒僅	断面中心部黒化
12	朝顔形 埴輪	外：粗いタテハケ後口縁付近ヨコナデ 内：粗いヨコハケ (B種か？) 口縁付近ヨコナデ	外：7.5YR5/1 (褐灰) 内：2.5YR6/4 (にぶい橙)	2mm以下の長石・石英粒少 (1mm以下主) 2mm以下黒褐色粒僅	硬質 外面に顔料
13	朝顔形 埴輪	外：表面薄く剥落、調整不明 内：表面薄く剥落、調整不明	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	8mm以下の長石・石英粒多 (2～5mm多) 3mm以下の茶褐色粒中	
14	朝顔形 埴輪	外：タテハケ 内：ナナメハケ後ヨコハケ、一部ナデ	外：10R5/2 (灰赤) 内：7.5YR5/1 (褐灰)	5mm以下の長石・石英粒少 (1mm以下主)	硬質 下端は接合部で剥落 断面：10R 6/6 (赤橙)
15	朝顔形 埴輪	外：肩部～ナナメハケ・ヨコハケ 筒部～タテハケ後ヨコハケ 内：工具 (幅7mm) によるナデ	外：2.5YR4/2 (灰赤) 内：5YR7/4 (にぶい橙)	2mm以下の長石・石英粒少 5mm以下の黒褐色粒少	外面に顔料 断面やや灰色
16	円筒 埴輪	外：ナナメハケ後ナデ 内：ヨコハケ 口縁部：ヨコナデ	外：7.5YR7/6 (橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	2.5mm以下の長石・石英粒少 (1mm以下主) 1mm以下の黒褐色粒少	
17	円筒 埴輪	外：表面薄く剥落、調整不明 内：ナナメハケ後ヨコ方向のナデ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：7.5YR8/6 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少 3mm以下の黒・茶褐色粒少	
18	円筒 埴輪	外：タテハケ後細いヨコハケ (B種) 内：オサエ・ナデ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙)	1.5mm以下の長石・石英粒中 (0.5mm以下多) 6mm以下の黒褐色粒少	やや硬質 断面やや黒化
19	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケ (B種) 内：タテハケ 後門部：ヨコナデ	外：7.5YR7/4 (にぶい橙) 内：7.5YR6/2 (灰褐)	5mm以下の長石・石英粒中 (1mm以下主) 2mm以下の黒褐色粒少	硬質

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
20	円筒埴輪	外：タテハケ後ヨコハケ（B種） 内：ヨコ・ナナメ方向のハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR7/2（にぶい黄橙） 内：10YR7/3（にぶい黄橙）	4mm以下の長石・石英粒少 （0.5mm以下主） 4mm以下の黒褐色粒少	硬質
21	円筒埴輪	外：粗いヨコハケ 内：粗いややナナメ方向のハケ 口縁部：ヨコナデ	外：7.5YR6/4（にぶい橙） 内：7.5YR6/4（にぶい橙）	1mm以下の長石・石英粒少 2mm以下の黒褐色粒少	
22	円筒埴輪	外：粗いタテハケ後粗いヨコハケ（B種） 内：粗いややナナメ方向のハケ 口縁部：ヨコナデ	外：7.5YR7/4（にぶい橙） 内：10YR7/4（にぶい黄橙）	1.5mm以下の長石・石英粒少 1.5mm以下の黒褐色粒少	
23	円筒埴輪	外：タテハケ後細かいヨコハケ（B種？） 内：オサエ・ナデ 口縁部：ヨコナデ	外：7.5YR7/6（橙） 内：7.5YR8/4（浅黄橙）	3mm以下の長石・石英粒中 （1mm以下主） 1mm以下の茶褐色粒中	
24	円筒埴輪	外：粗いタテハケ後ヨコハケ 内：粗いナナメハケ後一部にヨコハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR7/3（にぶい黄橙） 内：10YR6/3（にぶい黄橙）	1mm以下の長石・石英粒中 （0.5mm以下主） 3mm以下の黒色粒少～中	硬質
25	円筒埴輪	外：粗いヨコハケ 内：粗いヨコハケ・ナナメハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR6/1（褐灰） 内：10YR6/2（灰黄褐）	2mm以下の長石・石英粒やや多 （1mm以下主） 1mm以下の黒褐色粒僅	硬質
26	円筒埴輪	外：ヨコハケ 内：粗いヨコハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR8/4（浅黄橙） 内：10YR8/4（浅黄橙）	1mm以下の長石・石英粒中 3mm以下の茶褐色粒少～中	やや硬質
27	円筒埴輪	外：粗いタテハケ後ヨコハケ 内：粗いヨコハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR6/1（褐灰） 内：10YR6/2（灰黄橙）	1.5mm以下の長石・石英粒中 （0.5以下主） 2.5mm以下の褐色粒少	やや硬質
28	円筒埴輪	外：粗いヨコハケ 内：粗いヨコハケ 口縁部：ヨコナデ	外：10YR7/4（にぶい黄橙） 内：10YR6/2（灰黄褐）	2mm以下の長石・石英粒中 （0.5mm以下主） 1mm以下の黒褐色粒少	やや硬質
29	円筒埴輪	外：ヨコハケ 内：ナデ？口縁部：ヨコナデ	外：10YR7/4（にぶい黄橙） 内：10YR7/4（にぶい黄橙）	2mm以下の長石・石英粒中 （1mm前後目立つ） 4mm以下の茶褐色粒少～中	
30	円筒埴輪	外：ヨコハケ 内：調整不明 口縁部：ヨコナデ	外：10YR8/4（浅黄橙） 内：10YR8/6（黄橙）	2mm以下の長石・石英粒少～中 （1mm以下主） 3mm以下の茶褐色粒少～中	
31	円筒埴輪	外：調整不明、タガーヨコナデ 内：ナデ？	外：10YR8/4（浅黄橙） 内：7.5YR8/4（浅黄橙）	6mm以下の長石・石英粒少～中 （1～3mm目立つ） 1mm前後の茶・黒褐色粒少	弧と直線の交わる線刻 断面黒化
32	円筒埴輪	外：ヨコハケ 内：ナデ？（調整不明瞭）	外：7.5YR8/6（浅黄橙） 内：10YR8/4（浅黄橙）	3mm以下の長石・石英粒少～中 （1mm以下主） 7mm以下の茶褐・黒褐色粒少～中 （1mm以下主）	弧状の線刻あり
33	円筒埴輪	外：ヨコハケ、タガーヨコナデ 内：タテハケ	外：2.5YR3/2（暗赤褐） 内：10YR6/2（灰黄褐）	2mm以下の長石・石英粒少～中 （1mm以下主） 1mm以下の黒褐色粒少	硬質 透し孔あり 外面に顔料
34	円筒埴輪	外：調整不明 内：調整不明瞭、ナデか？	外：調整不明 内：調整不明瞭、ナデか？	4mm以下の長石・石英粒中 （1～2mm目立つ） 1.5mm以下の茶褐色粒僅	断面黒化
35	円筒埴輪	外：粗いタテハケ後ヨコハケ（B種） タガーヨコナデ 内：工具によるナデ	外：2.5YR4/1（赤灰） 内：7.5YR6/4（にぶい橙）	3.5mm以下の長石・石英粒中 （1mm以下主） 1mm以下の黒褐色粒僅	硬質 外面に顔料
36	円筒埴輪	外：やや粗いタテハケ後下部にヨコハケ タガーヨコナデ 内：工具によるナデ	外：7.5YR6/3（にぶい褐） 内：10YR6/2（灰黄褐）	5mm以下の長石・石英粒少～中 4mm以下の黒褐色粒少	やや硬質
37	円筒埴輪	外：細かいヨコハケ（B種） タガーヨコナデ 内：オサエ・ナデ	外：7.5YR8/6（浅黄橙） 内：10YR8/4（浅黄橙）	3mm以下の長石・石英粒中 （1mm以下主） 4mm以下の茶褐色粒少～中	
38	円筒埴輪	外：粗いヨコハケ、タガーヨコナデ 内：ナデ後上半にヨコハケ・ナナメハケ	外：10YR8/4（浅黄橙） 内：10YR7/4（にぶい黄橙）	3mm以下の長石・石英粒少～中 （1mm以下主） 2mm以下の茶・黒色粒少	
39	円筒埴輪	外：タテハケ後下端にヨコハケか？、 タガーヨコナデ 内：上半ヨコハケ、下半にややナナメのタ テハケ	外：10YR7/2（にぶい黄橙） 内：7.5YR7/4（にぶい橙）	4mm以下の長石・石英粒やや多 （1～3mm多） 2mm以下の黒色粒僅	硬質 断面やや暗色
40	円筒埴輪	外：調整不明瞭、タガーヨコナデ 内：工具によるナデ	外：10YR8/2（灰白） 内：10YR8/2（灰白）	4mm以下の長石・石英粒少～中 （1～2mm目立つ） 2mm以下の茶褐色粒僅	色調は白く、他と異なる
41	円筒埴輪	外：ヨコハケ、タガーヨコナデ 内：タテハケ後部分的にナデ	外：2.5YR5/2（灰赤） 内：10YR6/2（灰黄褐）	4mm以下の長石・石英粒中 （1mm以上目立つ） 3mm以下の黒褐色粒僅	硬質 外面に顔料 朝顔の可能性あり

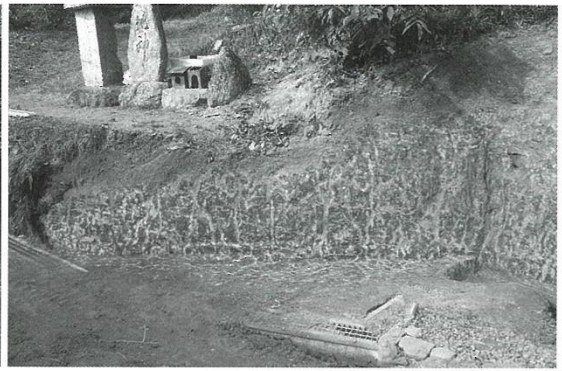


番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
42	円筒 埴輪	外：調整不明瞭， タガーヨコナデ 内：ナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	3mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以上目立つ) 2mm以下の茶褐色粒僅	断面黒化
43	円筒 埴輪	外：粗いヨコハケ， タガーヨコナデ 内：調整不明瞭， タテハケ後ナデか？	外：10YR8/6 (黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 3mm以下の茶褐色粒僅	
44	円筒 埴輪	外：表面薄く剥落， 調整不明 内：表面薄く剥落， 調整不明瞭， 工具によるナデか？	外：10YR8/6 (黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	3.5mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 5mm以下の茶褐色色やや多 (1mm以下主, 3mm以上目立つ)	
45	円筒 埴輪	外：表面剥落， 調整不明 内：表面剥落， 調整不明	外：10YR8/6 (黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	2.5mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 2mm以下の茶褐色粒・5mm以下の 黒褐色粒僅	
46	円筒 埴輪	外：調整不明 内：調整不明	外：10YR 7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR 7/4 (にぶい黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 3mm以下の黒・茶褐色粒少	
47	円筒 埴輪	外：表面剥落， 調整不明 内：表面剥落， 調整不明	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR8/4 (浅黄橙)	3mm以下の長石・石英粒中 (1mm以下主) 6mm以下の茶・黒褐色粒少～中， 2mm以下の茶色粒中	
48	円筒 埴輪	外：表面剥落， 調整不明 内：工具によるナデか？	外：10YR7/3 (にぶい黄橙) 内：2.5YR6/6 (橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (1mm前後多) 茶褐色粒僅	胎土・色調やや異質 外表面剥落部2.5YR6/6(橙)
49	円筒 埴輪	外：表面剥落， 調整不明， タガ付近ヨコナデ 内：表面剥落， 調整不明	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR8/6 (浅黄橙)	3mm以下の長石・石英粒少 (0.5mm以下主) 5mm以下の茶・黒褐色粒目立つ (2mm以上目立つ)	透し孔あり
50	円筒 埴輪	外：調整不明 内：調整不明	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	8mm以下石英粒・長石中 (1mm以下主， 3mm以上の石英粒目 立つ) 2mm以下の茶褐色粒僅	断面黒化
51	円筒 埴輪	外：調整不明 内：調整不明	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 2mm以下の茶褐色粒少～中， 7mm 以下の黒褐色粒僅	
52	円筒 埴輪	外：細かいヨコハケ， タガーヨコナデ 内：オサエ・ナデ	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR7/6 (橙)	2mm以下の長石・石英粒少 4mm以下の黒・茶褐色粒多 (1mm以下主)	透し孔あり
53	円筒 埴輪	外：調整不明， タガーヨコナデ 内：工具によるナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 5mm以下の黒・茶褐色粒僅	
54	円筒 埴輪	外：ヨコハケ 内：器面荒れ調整不明瞭， ナデか？	外：10YR8/2 (灰白) 内：10YR8/2 (灰白)	5mm以下の長石・石英粒少～中 6mm以下の橙・茶褐色粒目立つ (1mm前後主)	色調は白く， 40とほぼ同様 で他と異なる
55	円筒 埴輪	外：ヨコハケ， タガーヨコナデ 内：工具によるナデ	外：10YR6/2 (灰黄褐) 内：10YR5/1 (褐灰)	1mm以下の長石・石英粒多 1.5mm以下の黒褐色粒少	硬質
56	円筒 埴輪	外：粗いヨコハケ， タガーヨコナデ 内：タテハケ後， 粗いヨコ・ややナメの ハケ後一部ナデ	外：10YR5/2 (灰黄褐) 内：10YR5/2 (灰黄褐)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 5mm以下の黒褐色粒 (大粒目立つ)	硬質 須恵質に近い
57	円筒 埴輪	外：タテハケ後細かいヨコハケ？ タガーヨコナデ 内：ナメハケ	外：7.5YR6/1 (褐灰) 内：10YR6/2 (灰黄褐)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 3mm以下の黒褐色粒僅	やや硬質
58	円筒 埴輪	外：タガ付近ヨコナデ 内：ナデ	外：7.5YR7/6 (橙) 内：10YR6/2 (灰黄褐)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 3mm以下の黒褐色粒少	
59	円筒 埴輪	外：粗いタテハケ後粗いヨコハケ タガーヨコナデ 内：粗いナメハケ	外：10YR7/4 (にぶい黄橙) 内：10YR6/4 (にぶい黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少 (0.5mm以下主) 6mm以下の黒褐色粒僅	
60	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケか？ タガの下端オサエ 内：タテハケ後ナデ	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：10YR7/4 (にぶい黄橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (0.5mm以下主) 4mm以下の黒褐色粒僅～少	最下段のタガか やや硬質
61	円筒 埴輪	外：細かいヨコハケ？ タガーヨコナデ 内：オサエ・ナデ	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (0.5mm以下主) 3mm以下の茶色・茶褐色粒僅～ 少	

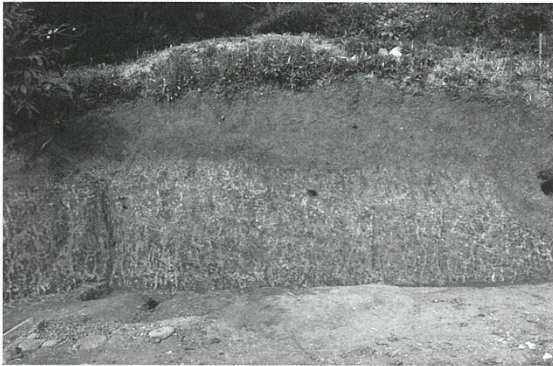
番号	器種	調整	色調	胎土	備考
62	円筒 埴輪	外：粗いヨコハケ、タガ-ヨコナデ 内：オサエ・ナデ	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR8/6 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 3mm以下の茶・黒褐色粒僅～少	やや硬質
63	円筒 埴輪	外：調整不明 内：ナデ	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/6 (黄橙)	3mm以下の長石・石英粒少～中 (1mm以下主) 3mm以下の茶色・茶褐色粒少	
64	円筒 埴輪	外：タテハケ後ヨコハケ 内：工具によるナデ (ヘラケズリ状に砂粒 の移動あり)	外：7.5YR8/6 (浅黄橙) 内：7.5YR6/4 (にぶい橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (0.5mm以下主) 3mm以下の茶褐色粒僅～少	やや硬質 タガ剥落
65	円筒 埴輪	外：粗いたテハケ、1次調整のみ タガ下端オサエか？ 内：調整不明瞭、ナデか？	外：7.5YR7/6 (橙) 内：7.5YR7/4 (にぶい橙)	2mm以下の長石・石英粒少 (1mm以下主) 3mm以下の茶褐色粒僅～少	最下段のタガ
66	円筒 埴輪	外：調整不明瞭、タガの下付近タテハケ残 存、タガ下端オサエ 内：ナデか？	外：10YR8/4 (浅黄橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙)	1～2mm以下の長石・石英粒少 5mm以下の茶色・茶褐色粒中 (1～2mmの茶色粒目立つ)	最下段のタガ やや軟質 断面やや黒化
67	円筒 埴輪	外：ナデか？ 内：ナデ	外：7.5YR7/6 (橙) 内：7.5YR7/6 (橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (1mm以下主) 3mm以下の茶・黒褐色粒少～中 (1mm以上目立つ)	基底部
68	蓋形 埴輪	外：調整不明 内：ナデ、接合痕あり	外：7.5YR7/6 (橙) 内：10YR7/3 (にぶい黄橙)	6mm以下の長石・石英粒中 (2mm以上目立つ) 2mm以下の茶色・茶褐色粒少	断面黒化
69	蓋形 埴輪	外：ナナメハケ後上端ヨコナデ 内：オサエ後ナデ	外：10YR6/1 (褐灰) 内：7.5YR7/4 (にぶい橙)	3mm以下の長石・石英粒少 (0.5mm以下主) 5mm以下の茶・黒褐色粒僅～少	硬質
70	蓋形 埴輪	外：ヨコハケ、上部にタガが剥がれた痕跡 あり。その付近に強いヨコナデ 内：タテハケ後接合部に粘土を貼り付けた 後ナデ (ヘラケズリ状に砂粒移動)	外：10YR5/2 (灰黄褐) 内：10YR5/2 (灰黄褐)	4mm以下の長石・石英粒やや多 (0.5mm以下主) 2mm以下の黒褐色粒僅	硬質 タガ接合部で破損
71	形象 埴輪？	外：タテハケ 内：ナデ	外：5YR7/6 (橙) 内：10YR8/4 (浅黄橙)	2mm以下の長石・石英粒中 (1mm以下主) 6mm以下の茶・黒褐色粒少～中 (0.5mm以下の黒褐色粒主)	透し孔あり
72	形象 埴輪	上：調整不明ナデか 下：調整不明ナデか	外：5YR7/6 (橙) 内：5YR7/6 (橙)	1mm以下の長石・石英粒少 6mm以下の茶・黒褐色・茶色粒 少～中 (1mm以下主)	
73	脚台付 須恵器	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外：5YR5/1 (灰) 内：5YR5/1 (灰)	3mm以下の長石・石英粒中 (0.5mm以下主)	脚接合部付近で欠損 全体に磨耗



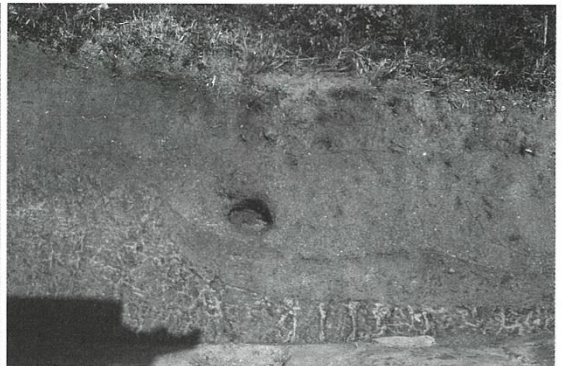
第4図版 建物除去後の調査区全景（西から）



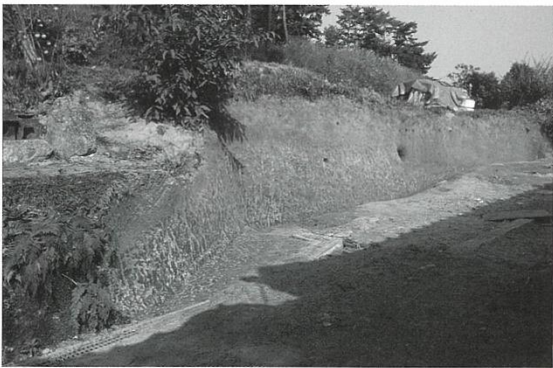
第5図版 墳丘切断面1（南から）



第6図版 墳丘切断面2（南から）



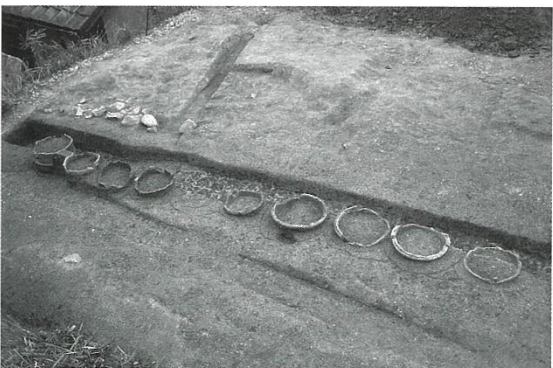
第7図版 墳丘切断面3（南から）



第8図版 墳丘切断面4（南西から）



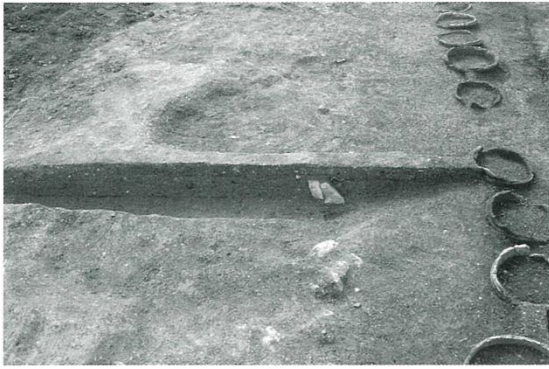
第9図版 墳丘切断面5（南東から）



第10図版 埴輪列出土状況（北西上方から）



第11図版 埴輪列出土状況（西から）



第12図版 埴輪列と南側サブトレンチ（東から）



第13図版 埴輪7～10（南から）



第14図版 墳丘切断面及び後円部（南から）



第15図版 埴輪列サブトレンチ掘削状況（南東から）



第16図版 埴輪2～4（南から）



第17図版 埴輪5～9（南から）



第18図版 埴輪7～10（南西から）



第19図版 埴輪完掘状況（南から）



第20図版 埴輪列の埴輪 1



第21図版 埴輪列の埴輪 2



第22図版 埴輪列の埴輪 3



第23図版 埴輪列の埴輪 4



第24図版 埴輪列の埴輪 5



第25図版 埴輪列の埴輪 7



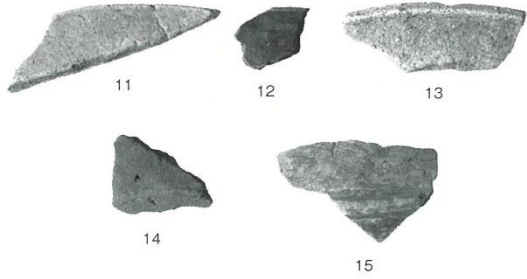
第26図版 埴輪列の埴輪 8



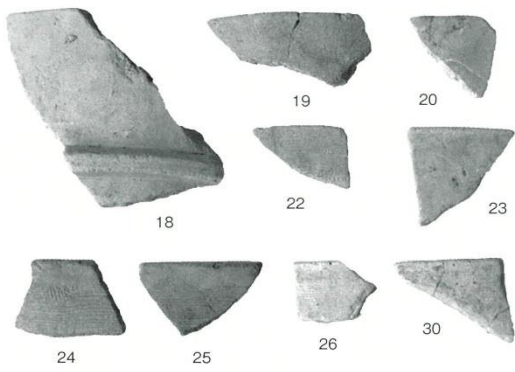
第27図版 埴輪列の埴輪 9



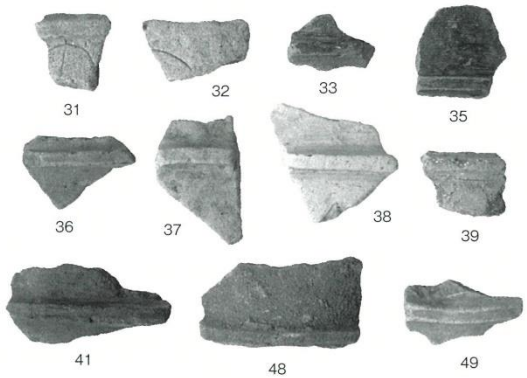
第28図版 埴輪列の埴輪10



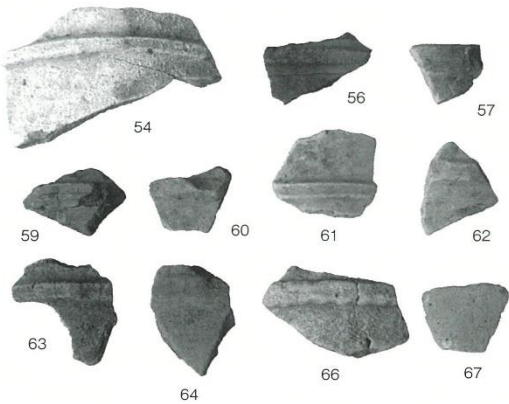
第29図版 朝顔形埴輪



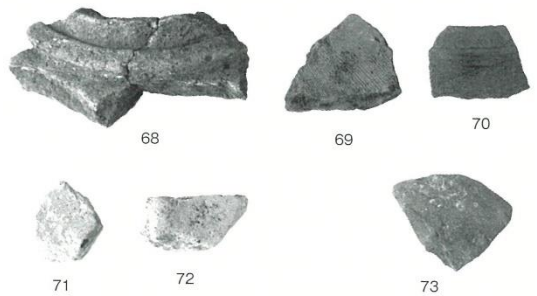
第30図版 円筒埴輪口縁部



第31図版 円筒埴輪



第32図版 円筒埴輪



第33図版 形象埴輪と須恵器

# 報告書抄録

ふりがな	くにしていしせき つくりやまこふんそくりょうちょうさほうこくしょ							
書名	国指定史跡 作山古墳測量調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	25							
編著者名	平井典子							
編集機関	岡山県総社市教育委員会							
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
つくりやまこふん 作山古墳	おかやまけん 岡山県 そうじやし 総社市 みす 三須200外	33-208	1592	34° 39' 86"	133° 46' 15"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
作山古墳	古墳	古墳時代 中期	埴輪列	埴輪・須恵器	墳長約282mであることが判明。 巨大古墳としては、前方部前端 中央に突出部をもち、後円部も 楕円形を呈する特異な形態をも つ。			
要約								

総社市埋蔵文化財発掘調査報告25

国指定史跡

作山古墳測量調査報告書

2016（平成28）年3月31日 印刷

2016（平成28）年3月31日 発行

編集発行 岡山県総社市教育委員会  
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県総社市真壁871-2



